

~~~~~  
西国観音霊場三十三札所 第二回巡礼記

行雲流水 風に吹かれて

発願：令和五年六月九日

結願：令和六年三月三日



(光明曼陀羅図 二種)

令和六年三月

寓多羅亭 鈍助 述之

## はじめに

ओं अमोघ वैरोचन महामुद्रा मणि पद्म ज्वाल प्रवर्त्तय हूं  
唵 阿謨伽 尾盧左曩 摩訶母捺囉 麼拏 鉢納麼 入嚩攞 鉢囉鞞哆野 吽  
オン アボキャ ベイロシヤノウ マカボダラ マニ ハンドマ ジンバラ  
ハラバリタヤ ウン (光明真言)

20 年ほど前に会社を定年退職し、10 年程前から暇潰しにお寺巡りを始めました。お寺巡りは信仰心や修行心などという高尚な理由からではなく、「ひともしなる遍路といふものを、してみむとてするなり・・・」と言う程度の謂わば全くの物見遊山に極く若干の懺悔の心を織り混ぜた程度のシロモノでありました。私は前世の因縁も悪く、今生でも悪行の限りを尽くしましたので供養も功德も積めず、その結果、お寺廻りをしてても当然のことながら瑞兆も驗も御利益もありませんでした。

マ、左様な御利益を期待して歩いた訳ではありませんので、参拝後の門前町の紅灯で御仏さまに般若湯を差し上げてそのお零れを頂戴するという酒池（肉林はナシ）の供養だけは欠かさず行ないましたので、彼岸での閻魔大王の御裁きも罪一等弛むかと下司な下心を期待するのも悲しき性（さが）でござりまして、誠にお恥ずかしき次第にござります。

巡拝致しましたお寺は、四国遍路の八十八ヶ所、同別格霊場二十札所、西国、坂東、秩父の日本百観音霊場百札所を夫々 2 巡し、都合通算 400 寺程を巡りました。その殆どは遍路道や巡礼古道を徒歩で巡礼いたしました。歩いた距離は合計で 8,000 キロメートルほどになりました。第一回目の巡拝は多少は修行心と懺悔心もあったので、寺の縁起や本尊などの仏縁に関する事柄にも言及しましたが、第二回目の今回の巡拝は風に吹かれた行雲流水を主たる目的といたしましたので気楽な漫遊記となりました。

どうか、巡礼の風物などを気楽にお楽しみ頂ければ、これもまた仏縁でしょう。合掌。

令和 6 年 3 月 4 日 記す

### 【補註】

- (1) 四国遍路紀行第一回、同第二回野宿遍路ノ記、坂東観音霊場第一回紀行、同第二回紀行（風に吹かれて）、秩父三十四観音巡礼第一回紀行、同第二回（弥次喜多道中記）、西国観音第一回巡礼記につきましては、それぞれ拙HP をご覧頂ければ幸甚です (<http://yamanami-harukani.world.coocan.jp/>)。
- (2) 併載した写真は筆者撮影の写真（第 1 回目、及び第 2 回目撮影）以外に、特に仏像や内陣などの撮影禁止の写真は夫々の寺院のHP から引用させて頂きました。記して謝意を表します。
- (3) 観音以外の仏をその寺院の本来の本尊としている寺院もありますが、ここに記載した本尊は観音霊場札所の本尊です。ただし、番外 3 札所は本来の本尊です。
- (4) 文中に時々出てくる同道の相棒「潔ちゃん」は大学時代からの 60 数年来の学友・呑友・悪友で、西国、秩父の観音霊場巡礼などに同行し、また国内や海外の山旅にも同道してくれている兵庫県在住の古くからの知友です。西国観音巡礼の途中では何回も彼宅にお邪魔して一宿一飯の恩義に与り、一献傾けました。ここに記して謝意を表します。



(5)「西国観音霊場三十三札所」の所在地は下図のとおりです。

(JTB パブリッシング「西国三十三所」に補記)。



～～ お断り ～～

後述のとおり、今回の巡礼はほぼ逆打ちで廻りましたので、札所番付（札所番号）順にお読みになる場合には、巡礼の繋がりに順打ちの場合と時間的に前後逆の記述が生じていることが多いことをお断りしておきます。

|            |                  |           |               |           |     |
|------------|------------------|-----------|---------------|-----------|-----|
| 第一番        | 那智山 青岸渡寺         | 和歌山県那智勝浦町 | 天台宗           | 如意輪観音     | 9   |
| 第二番        | 紀三井山 金剛宝寺 (紀三井寺) | 和歌山県和歌山市  | 救世観音宗         | 十一面観音     | 15  |
| 第三番        | 風猛山 粉河寺          | 和歌山県紀の川市  | 粉河観音宗         | 千手観音      | 18  |
| 第四番        | 槇尾山 施福寺          | 大阪府和泉市    | 天台宗           | 十一面観音     | 23  |
| 第五番        | 紫雲山 葛井寺          | 大阪府藤井寺市   | 真言宗           | 十一面観音     | 28  |
| 第六番        | 壺坂山 南法華寺 (壺坂寺)   | 奈良県高取町    | 真言宗           | 十一面観音     | 33  |
| 第七番        | 東光山 龍蓋寺 (岡寺)     | 奈良県明日香村町  | 真言宗           | 如意輪観音     | 41  |
| 第八番        | 豊山 長谷寺           | 奈良県桜井市    | 真言宗           | 十一面観音     | 45  |
| 第九番        | 興福寺 南円堂          | 奈良県奈良市    | 法相宗           | 不空羂索      | 50  |
| 第十番        | 明星山 三室戸寺         | 京都府宇治市    | 本山修験宗         | 千手観音      | 55  |
| 第十一番       | 深雪山 上醍醐准胝堂       | 京都市伏見区    | 真言宗           | 准胝観音      | 60  |
| 第十二番       | 岩間山 正法寺 (岩間寺)    | 滋賀県大津市    | 真言宗           | 千手観音      | 66  |
| 第十三番       | 石光山 石山寺          | 滋賀県大津市    | 東寺真言宗         | 如意輪観音     | 70  |
| 第十四番       | 長等山 園城寺 (三井寺)    | 滋賀県大津市    | 天台寺門宗         | 如意輪観音     | 75  |
| 第十五番       | 新那智山 今熊野観音寺      | 京都市東山区    | 真言宗           | 十一面観音     | 80  |
| 第十六番       | 音羽山 清水寺          | 京都市東山区    | 北法相宗          | 十一面観音     | 84  |
| 第十七番       | 補陀洛山 六波羅蜜寺       | 京都市東山区    | 真言宗           | 十一面観音     | 87  |
| 第十八番       | 紫雲山 頂法寺 (六角堂)    | 京都市中京区    | 天台宗           | 如意輪観音     | 90  |
| 第十九番       | 霊應山 行願寺 (草堂)     | 京都市中京区    | 天台宗           | 千手観音      | 93  |
| 第二十番       | 西山 善峯寺           | 京都市西京区    | 天台宗           | 千手観音      | 95  |
| 第二十一番      | 菩提山 穴太寺          | 京都府亀岡市    | 天台宗           | 聖観音       | 99  |
| 第二十二番      | 補陀洛山 総持寺         | 大阪府茨木市    | 真言宗           | 千手観音      | 103 |
| 第二十三番      | 応頂山 勝尾寺          | 大阪府箕面市    | 真言宗           | 十一面観音     | 105 |
| 第二十四番      | 紫雲山 中山寺          | 兵庫県宝塚市    | 真言宗           | 十一面観音     | 107 |
| 第二十五番      | 御嶽山 播州清水寺        | 兵庫県加東市    | 天台宗           | 十一面観音     | 112 |
| 第二十六番      | 法華山 一乗寺          | 兵庫県加西市    | 天台宗           | 聖観音       | 116 |
| 第二十七番      | 書寫山 圓教寺          | 兵庫県姫路市    | 天台宗           | 如意輪観音     | 120 |
| 第二十八番      | 成相山 成相寺          | 京都府宮津市    | 真言宗           | 聖観音       | 125 |
| 第二十九番      | 青葉山 松尾寺          | 京都府舞鶴市    | 真言宗           | 馬頭観音      | 132 |
| 第三十番       | 竹生島 寶厳寺          | 滋賀県長浜市    | 真言宗           | 千手観音      | 136 |
| 第三十一番      | 姨綺耶山 長命寺         | 滋賀県近江八幡市  | 単立            | 千手観音      | 142 |
| 第三十二番      | 織山 観音正寺          | 滋賀県近江八幡市  | 単立            | 千手観音      | 145 |
| 第三十三番      | 谷汲山 華厳寺          | 岐阜県揖斐川町   | 天台宗           | 十一面観音     | 150 |
| 番外         | 東光山 花山院菩提寺       | 兵庫県三田市    | 真言宗 (薬師瑠璃光如来) |           | 153 |
| 番外         | 豊山 法起院           | 奈良県桜井市    | 真言宗 (徳道上人像)   |           | 157 |
| 番外         | 華頂山 元慶寺          | 京都市山科区    | 天台宗 (薬師如来)    |           | 160 |
| (補遺) 三十三間堂 | 57               | おわりに      | 162           | 巡礼日程 (メモ) | 164 |



## (ご参考) 西国観音霊場三十三札所とその巡礼の起源

初っ端から若干煩瑣ではあるが、ご参考までに西国観音霊場三十三札所、及びその巡礼の起源などについて簡単に記しておきたい（本項は斜め読みで結構です）。

養老2年（718年）というから、今から1300年以上も前の8世紀のことになるが、奈良の長谷寺（奈良県桜井市、西国観音霊場第8番札所。鎌倉の長谷寺はじめ本邦にゴマンとある「長谷寺」の総元締め）の開基である徳道上人という僧が急病のために亡くなり、冥途の入り口で逢った閻魔大王から「特に許す。現世に戻り、観音信仰を世の中広めて衆生に三十三の観音霊場を巡拝させるように」とのお達しがあり、三十三所の宝印を託された。三十三という数字は、観世音菩薩が迷える衆生を済度するために33の観音様の姿に化身してこの世に垂迹され給うことからの故事によるが、観音霊場が33ヶ所に定められていることも同じこの故事による。

生き返った徳道上人は閻魔大王の言いつけを守って指定された33箇所の札所に宝印を持って廻り、衆生に観音信仰巡拝を勧めたが、日々のたつきにも困っていた当時の民衆に左様なことをする余裕は全く無かったのでこの観音信仰は一向に広がらなかった。

徳道上人は仕方無くこの宝印を中山寺（兵庫県宝塚市、西国観音霊場第24番札所）に埋めて閻魔大王から託されたこの使命を後世に託した。

それから270年の年月が経過した後、摂関家藤原兼家・道兼父子の陰謀により弱冠19歳で皇位を追われ上皇に退位させられた花山法皇が観音巡礼で中山寺を巡拝した折にこの宝印を掘り出して観音信仰を復活させたと伝えられている。それ故、花山法皇は観音霊場巡礼中興の祖と呼ばれる。下図は花山法皇の巡礼の様子を描いたものである（青岸渡寺看板）。



花山上皇(968-1008)は在位わずかにして一條天皇に御譲位なされ深く観音力を信じられ那智の山に籠って修業せられること三年、更に広く大慈大悲を求めて那智観音を第一番として西国三十三ヶ所へ、当山の弁阿上人等を先達として巡礼の旅に出られた。世に花山法皇を西国巡礼の祖とあかめ、今なおその心の旅がつづけられているのである。



観音霊場中興の祖・花山法皇の事蹟については、王朝権力の面でも信仰巡礼の面でも後白河法皇や後鳥羽上皇の威厳の陰に隠されてポピュラーではないが、往時の藤原一族の内紛に巻き込まれて天皇在任僅か2年、御年19歳で皇位を追われ、41歳で寂しい生涯を終えるまでの22年間の隠棲生活を観音信仰と観音霊場の再興だけで過ごされた生涯には些かの感動を覚えざるを得ないのは小生だけではなからう。

このことは、法皇が隠棲され入寂された花山院菩提寺（西国観音霊場番外札所、兵庫県三田市）に入山された際に法皇の徳を慕って女官11人も同行したが、女人禁制のため寺には入れず麓に庵を組んで尼僧となって法皇を慕った。寺への参道の途中に琴弾坂という場所もあり、女官達が法皇を想って琴を弾いた場所と言われている。法王はこの琴の音に過ぎし日々の栄華の頃の想いを重ねられたことであろう。

女官が庵を結んで過ごした麓の場所は現在は「尼寺」と呼ばれ、この11人に加えて法皇の愛妃・弘徽殿女御の冥福を祈る十二尼妃の墓が建っていて、法皇を巡る哀史を今に伝えていることから納得されよう。

花山院（法皇）の件が少し長くなったが、皇位を追われた花山天皇が出家・得度するために花山寺（現・山科元慶寺、西国観音霊場番外札所）に赴いた折に、途中の峠で月光に照らされている姿を描いた「花山寺の月」（月岡芳年画、上図）を観れば益々その感が強い。



（花山院菩提寺の麓「尼寺」にある十二尼妃の墓）



また、西国観音霊場縁起については「西国三十三所順禮縁起」（寛政元年刊）に詳しい。



扱て、西国観音霊場巡礼の縁起は上記のようなものであるが、実際の33札所は、西は姫路市から東は岐阜県揖斐郡谷汲村、南は和歌山県那智勝浦町、北は京都府宮津市までの近畿・東海の2府4県に跨り、巡礼古道の総延長距離は1,000kmに及ぶ（札所所在地はP.3地図参照）。番付巡に廻れば、紀伊半島潮岬近くの札所第1番「青岸渡寺」から廻り始め、紀州、南摂、奈良、京都、北摂、播磨、丹後、湖東（近江）にある札所を巡り経て、最後は美濃の第33番「谷汲寺」にて結願するという長い道中の巡礼となる。寺の所在地は、山中あり、田園地帯あり、街中あり、海沿いありで、海は、太平洋、紀伊水道、大阪湾、播磨灘、若狭湾を望み、また琵琶湖などを望める地にもある（琵琶湖の真ん中の竹生島宝巖寺、天橋立を眼下に望む丹後の成相寺、奥の院から若狭湾が望める同じく丹後の松尾寺等）。

冒頭でも書いたが、本邦の巡礼は四国八十八ヶ所遍路、西国を含む日本百観音霊場巡礼（西国の他に、坂東、秩父）が著名であるが、その中でも最も古い時代に出来た巡礼が本稿の西国観音霊場33札所巡礼である。因みに、著名な四国遍路の始まりは西国観音霊場巡礼に遅れること約百年後の9世紀に始まったと言われている。

日本百観音巡礼の内、坂東観音霊場は遠方の坂東から西国に参拝するには遠すぎるので、西国観音霊場の坂東版コピーを作ったものであるが、開創は西国に遅れること400年後の12世紀の頃であった。また、秩父観音霊場は坂東よりも更に百年後に開かれた。この時に、日本観音霊場の札所の数を切り良く百箇所にするために最後発の秩父の札所を本来の33札所から1箇所増やして34札所にするという細工がなされている。

現在は、各地に西国、坂東、秩父の観音霊場の写し霊場（ミニ巡拝霊場）が勧進されているが、これらの本地を辿れば元々は西国33観音霊場が嚆矢となっている。

観音霊場の巡礼は元来は山伏や修験僧の修業行道であったが、その後皇室や貴族が参詣する霊場聖地となった。やがて江戸時代になって町民・庶民の力が強くなってくると、巡礼の主力は庶民となり、物見遊山と合わせて現在に至っている。

なお、巡礼の札所の巡拝の順番であるが、巡礼が一般大衆に広がる前の時代の修験僧や貴族の巡礼では札所の番付どおりに一番から三十三番まで厳密に番付の順番で巡るのが基本であったが、大衆の巡拝が増えて来ると、参詣者が出掛けてくる土地土地によって参詣しやすい順番で廻るようになってきたし、一時に全ての札所を巡る（通し打ち）のではなくて何回かに分けて廻ること（区切り打ち）も普通になってきた。

因みに厳密に言えば、順番通りに巡ることを「順礼」（順打ち）と呼び、勝手な順に巡ることを「巡礼」と呼ぶ。序のことに、札所の番付は昔から今と同じではなく、地元の巡礼

者が多かった頃は地元の人びとが歩き易い順番に、また都会からの巡礼が多くなると都会からの参詣者に好都合のように番付が途中で変更されていることも覚えておいてよい。

因みに小生の場合も、観音霊場巡礼や四国八十八ヶ所巡礼は大抵は基本的に「順礼」（順打ち）で廻るが、今回の第二回目の西国霊場巡礼は日程の都合等で発願寺が第 27 番圓教寺（姫路）、結願寺が第 1 番「青岸渡寺」（南紀熊野）となり、結果的にはほぼ逆順の逆打ちとなった。

東日本の居住者から見れば、一番近い岐阜の第 33 番華嚴寺（順打ちでは結願寺）から廻り始めて、かつては補陀洛渡海の聖地であった南紀那智の第 1 番「青岸渡寺」（順打ちでは発願寺、東日本からは一番遠い札所）で結願とする方が自然と思われるが如何であろうか。

発願寺と結願寺は巡礼者にとっては途中の札所とは少々異なる意味を持っていて、発願寺で「発心」、途中の札所で「修行」、「菩提」を積み、結願寺で「涅槃」に入るという巡礼のサイクルがあると観念されている。そのような意味で言えば、最後の結願寺での結縁を目指して旅行くのが巡礼というものであろう。

どこの札所で結願するかは、それぞれの巡礼者の行程・日程・都合や各札所寺院の特徴、それぞれの寺院への巡礼者それぞれの思い入れなどによって自由に決めてもよろしかろう。むしろその方が巡礼の本来に叶っているように思われるが、如何であろうか。

さて、西国観音霊場 33 札所の巡礼路の総延長距離は上述したように 1,000km に及ぶが、第 29 番札所「松尾寺」（舞鶴市）の松尾心空師が往時の徒歩巡礼古道を調査・復活され昔の徒歩巡礼古道が蘇った。私もその囀に倣って第一回目の巡礼では 33 札所をオール徒歩で廻ったが、今回の第二回目は老化のため既にその体力無く、最寄りの駅までは電車で行き、そこから先の札所寺院までは歩いたり路線バスを使ったりした。因みに松尾心空師によれば、現在では全て徒歩で巡礼する人は年間で僅か 30 人居るか居ないかだそうであった。

本項の最後に、ご参考までに比較的容易に入手できて気軽に読める参考図書を紹介しておきたい。(iii) は若干理屈っぽい内容もあるが、宗教民俗学者による巡礼解題の好著でもある。

- (i) 杉本苑子著「西国巡拝記」 1980 年 中公文庫（初版は大法輪閣 1966 年発行）
- (ii) 白洲正子著「西国巡礼」 1999 年 講談社文藝文庫（初版は駿々堂 1974 年）
- (iii) 五来 重著「西国巡礼の寺」 2006 年 角川ソフィア文庫

また、西国観音霊場古道徒歩巡礼を志す人には下記の書籍が参考になろう。

- (iv) 松尾心空著『西国札所古道巡礼 「母なる道」を歩む』 1992 年 春秋社
- (v) 高木徳郎著『熊野古道を歩く』 2014 年 吉川弘文館 （熊野関係）

古道地図や古道のガイドについては下記がある。

- (vi) 松尾心空（アリの会）編集『西国三十三所古道徒歩巡礼地図』 2000 年 松尾寺
- (vii) 加藤淳子著『西国三十三所 街道を歩く』 2003 年 創元社



## 第一番 那智山 青岸渡寺（熊野那智）



（古色蒼然たる青岸渡寺本堂（如意輪堂））

西国観音霊場 33 札所巡礼の一番札所（発願寺）は南紀那智にあるこの寺である。普通に考えれば、寺院が最も多く、従って巡礼の参詣者も多いであろう地域の寺が一番札所になっていてそこから巡礼をスタートするのが順当と思われるが……。その伝でゆくなら西国観音霊場巡礼の場合には奈良か京都に一番札所があっても良いように思われるが、実際には巡礼の中心地から最も離れた紀伊半島最南端熊野灘に面した熊野那智にポツンと離れているこの青岸渡寺が一番札所となっている。因みに、隣の 2 番札所「紀三井寺」までは約 200km 程も離れていて昔の巡礼者が歩いて巡った西国巡礼古道を歩いて辿れば 10 日間も掛る距離である。

それでは、なぜこの最南端に離れているこの寺が一番札所となったのであろうか。南紀熊野は往古から熊野三山詣が盛んで、平安時代から鎌倉時代にかけて上皇や皇族が好んで熊野三山を詣で、また続いて室町時代以降になると地方武士や庶民も大勢が詣でる時代になった。いわゆる「蟻の熊野詣」と呼ばれた現象である。熊野三山とは、熊野本宮大社、熊野那智大社、熊野速玉大社（熊野新宮）を指すが、上古には神仏習合であって今の青岸渡寺はかつては熊野那智大社と一体であり、現在でも青岸渡寺と熊野那智大社は同じ境内に鎮座していて、柴木戸一枚で自由に往き来できる。

かような熊野詣や伊勢参りを終えてから序に西国観音巡礼に旅立つという巡礼のスタイルが確立し、特に東国からの旅人は最初に伊勢参詣、続いて熊野三山参詣後に更に西国観音巡礼に旅立つという習慣が出来上がった。また、この青岸渡寺に属している尊勝院とい

う塔頭（御師の館）が上皇や皇族、貴人が熊野詣をする際の宿所になっていた関係で皇室とも縁が深かったこと、更には本文「（ご参考）西国観音霊場三十三札所とその巡礼の起源」（P. 5）でも触れたが、西国観音巡礼中興の祖「花山院」が、落飾した後の3年間をここ那智の山に籠って修行し、那智観音を第一番札所として西国観音巡礼の旅に旅立ったという故事に拠ってここ青岸渡寺が発願寺（第一番札所）とされたのであろう。

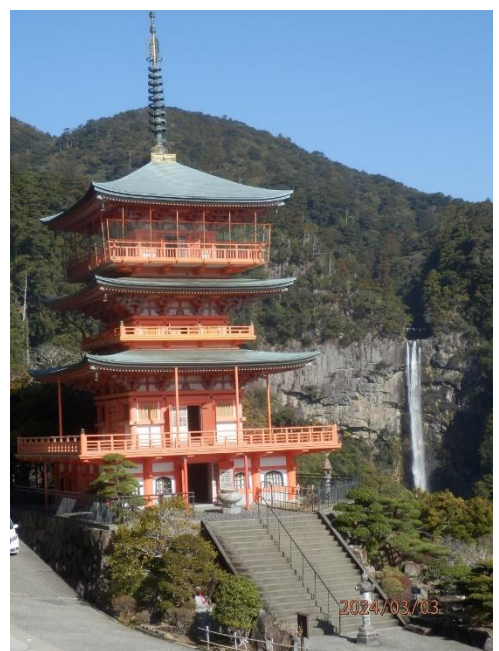
小生の西国観音巡礼の第一回目の巡拝はほぼ札所番付の通り（順打ち）に巡拝したが、今回の第二回目の巡拝は諸般の事情でほぼ逆回り（逆打ち）になったので、順打ちでは発願寺である青岸渡寺が今回は結願寺となった。「西国観音霊場三十三札所とその巡礼の起源」

（P. 7）でも触れたが、日本百観音札所巡礼や四国遍路などを巡拝する際の札所の順番は、通例は札所番付（札所番号）通りに巡るのが慣習となっているが（四国遍路では逆方向に巡る「逆打ち」もある）、どのような順番で廻るかは巡礼者それぞれの事情によって決めれば宜しいのではなかろうか（居所やスタート地点の違い、札所全部を通して廻るのか、何回かに分けて廻るのか、それぞれの札所と巡礼者それぞれの接点等）。

ただ、どの札所で発願し、どの札所で結願するかは（特に結願寺）は夫々の巡礼者にとって重要な仏縁であるが、これもそれぞれの巡礼者の事情や当該札所への思い入れなどによって札所番付にかかわらず巡礼者それぞれが自由に決めればよいと考える。

関東に住んでいる小生にとっては、西国霊場の札所の中で一番遠いこの青岸渡寺で満願（結願）とするのが一番素直なようで、また、深山幽谷が熊野灘まで突き出し、黒潮洗う熊野那智という場所は何となく神仏のおはします幽邃な土地柄のようにも見える。加えてこの地はかつての熊野詣と補陀洛渡海発祥の地でもあるから、青岸渡寺の境内に立って熊野灘を眺めつつ、遙か遠方の印度にあるという観音様が住んでおられる補陀洛浄土の須弥山を觀照して自分自身も恰も補陀洛渡海を行ったような気分に入れれば、それが西国観音霊場巡礼の仏縁でもあろうかと、今回はこの発願寺を巡礼の最後に廻って満願寺とした次第である。因みに、今回の第2回目西国観音巡礼は、西国札所の一番西の外れにある姫路の圓教寺を発願寺として、この寺に縁の深い平安時代の女流詩人和泉式部の（色事など）を想いつつ廻り始め、今回巡礼の終段は泉州河内の第5番札所「葛井寺」から巡拝を始めて、泉州和泉の第4番「施福寺」、紀州の第3番「粉河寺」、同じく紀州の第2番「紀三井寺」の順に逆打ち巡拝して、今回の巡礼の最後を最南端・那智の第1番「青岸渡寺」で結願し補陀洛渡海のトバ口を覗いて見たという訳である（P. 3 西国観音霊場札所地図参照）。

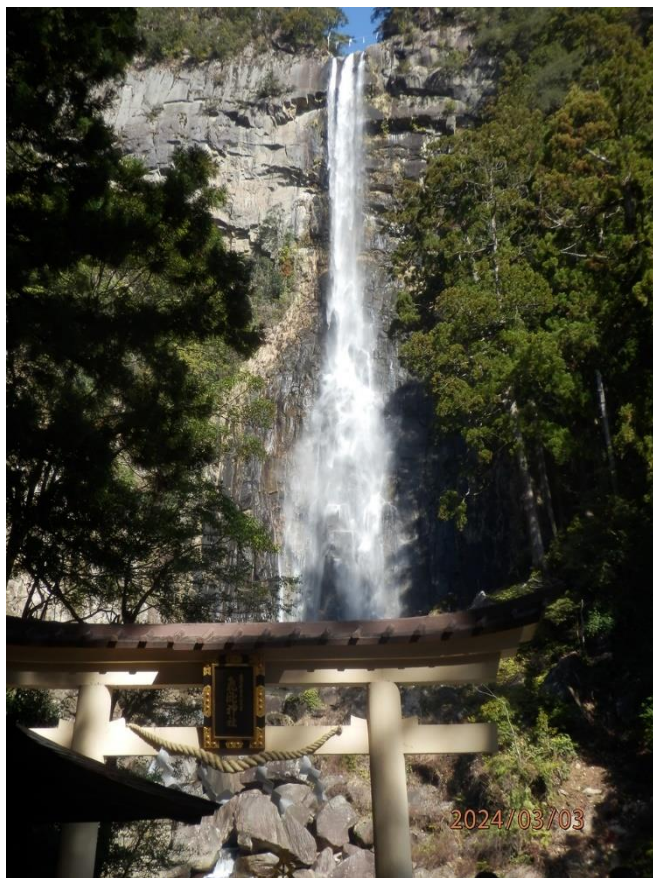
扨て、さて、前置きと道草がちょっと長くなった。本論に戻ろう。この青岸渡寺は開創1600年（仁徳天皇時代の4世紀創建）だそうだから、西国観音霊場33札所の中でも一番古い古刹である。古色蒼然とした如何にも風格ありそうな本堂に加えて境内や裏山、朱塗りの三重塔が那智大滝の本邦最大の落差を誇る水煙に映えている様はこれはやはり観音浄土の世界ではなかろうか。



（豪壮な青岸渡寺三重塔と那智大滝）



青岸渡寺は著名な寺院であり、またその紹介記事も世間に溢れているのでこの寺のことに  
関しては本尊如意輪観世音菩薩（秘仏、年に3日間だけ開帳。下の写真は  
お前立ち）を拝んで頂いて終わりとし、次に前述した補陀洛渡海について少し記しておきたい。



（滝壺近くの飛龍神社拝所から見た那智大滝）（本尊如意輪観世音菩薩（お前立）、同寺HPから引用）

補陀洛渡海とは、印度の南海にあると信じられていた観音浄土「補陀洛」を目指して那智の浜辺から船出した捨身行で、那智では平安時代から江戸時代に掛けて20数回行われたという。

補陀洛渡海の方法は、僅かな穀粒と水、及び経典だけを持たされて生きてまま小さい渡海舟（右写真）に乗せられて流され、補陀洛山（観世音菩薩が住む西方浄土）に赴くという寸法である。流されている途中で逃げ出せないように、舟に設えられた小さな御堂の扉は渡海者を入れた後に釘付けされて封印される。この宗教儀礼は、ここ那智が有名であるが、それ以外にも四国の足摺岬、室戸岬や薩摩半島の坊津などでも行われた記録がある。



（渡海舟。渡海者は四辺の鳥居で囲まれ、釘付けで封印された小御堂に閉じ込められて渡海する。  
那智「補陀洛山寺」祀蔵）



さて、青岸渡寺の麓の浜辺には同寺の別院である補陀洛山寺という古刹があり、那智での全ての補陀洛渡海を取り仕切った名刹である。この寺の住職はある年齢になったら渡海で補陀洛に赴くという不文律があったそうで、寺伝によれば、平安時代から江戸時代にかけて二十数名が渡海入水で往生したと記録されており、その墓（実際は西方浄土に入水したのであるから、墓がある筈は無いが・・・）が裏山にあった。私はこの種の話が大好きであるので、この寺にも立ち寄り渡海僧の墓も参拝した。下に示した「熊野那智参詣曼荼羅図」（熊野那智大社蔵）には、右下に補陀洛山寺の山門と渡海の様子が描かれている。絵図の上半分には青岸渡寺を含む神仏習合の熊野那智大社と那智大滝が描かれている。



上の曼荼羅図の渡海を描いた部分を拡大したものが右図であるが、赤い大鳥居前に描かれている右側の帆を張った小舟の方が渡海舟で、その左側の舟（人が乗っている舟）は流す時の随伴舟である。渡海舟を皆で押んでいる様子が描かれている。鳥居の右側に描かれている小さな御堂が補陀洛山寺の本堂であろう。





下左は現在の補陀洛山寺本堂。右は裏山の渡海僧の墓。チョット薄気味悪い場所だった。



さて、補陀洛渡海と言えど格好良いが、狭い舟の中に閉じ込められて浪間に沈むのはいくら高僧であっても堪えられないらしく、初期はともかくそれ以降は陸で往生した後に舟に積んで流すという擬似儀礼に変わってきたそうだ。この補陀洛寺の代々の住職は或る年齢になれば補陀洛渡海するという不文律があったそうで、初期には僧も信者もこれを嬉しがる風習だったが、中には補陀洛渡海を嫌がる僧も出てきたらしくて、井上靖の小説『補陀洛渡海記』には、未だ渡海する気になれないのに周囲の人々からのプレッシャーで渡海せざるをえなくなり、渡海することを決めた或る住職の死に向かう心の動き、恐怖、葛藤を描いた作品がある。

戦国時代のこと、或る僧が渡海舟に寄せられて船出したものの、途中で命が惜しくなって屋形を破り、舟から逃げ出して小島に上がってしまったが、役人に見つかって海に突き落とされて殺されてしまったという言い伝えもあるそうだ。補陀洛山寺は、JR 紀勢本線「那智駅」のすぐ前があるので、時間に余裕がある方は是非お立ち寄りを。

第2回目の西国観音霊場 33 札所巡礼は、ほぼ逆順廻りで令和5年6月に西国霊場最西端姫路の第27番札所「圓教寺」で発願して約9ヶ月間掛けてこの西国霊場最南端の第1番札所「青岸渡寺」で結願した。

前回の第1回目の巡礼は順打ちで廻ってこの青岸渡寺で発願し、美濃の第33番札所「華嚴寺」で満願したが、私にとっては今回の逆打ち巡礼で青岸渡寺で結願して補陀洛渡海の夢枕を那智の熊野灘に結んだのは正解であった。

順打ちの満願寺である華嚴寺は失礼ながら観音参りの後の精進落としの物見遊山を奨める“満願”臭に満ちているように感じられたが、ここ青岸渡寺は遥か西方印度沖にあると言われる須弥山へ船出する補陀洛渡海の漣と潮騒が聞こえて来るような静謐な雰囲気であった。青岸渡寺は4世紀の昔から那智大滝を中心とする神仏混淆の一大修験霊場（熊野三山）であり、8世紀創立の現世ご利益救済中心の華嚴寺に比べて格段に風格品格が高いと思われる。

今回の西国観音霊場札所第2回目の巡礼は、巡礼の終段を南摂・藤井寺市の第5番「葛井寺」から逆打ちで南下して和泉山脈の第4番「施福寺」、紀州に入って紀の川市の第3番「粉河寺」、和歌山市の第2番「紀三井寺」と廻り、その2週間後に残っていた最後の札所の結願寺、ここ那智の第一番「青岸渡寺」を参拝して満願となった。 —13—

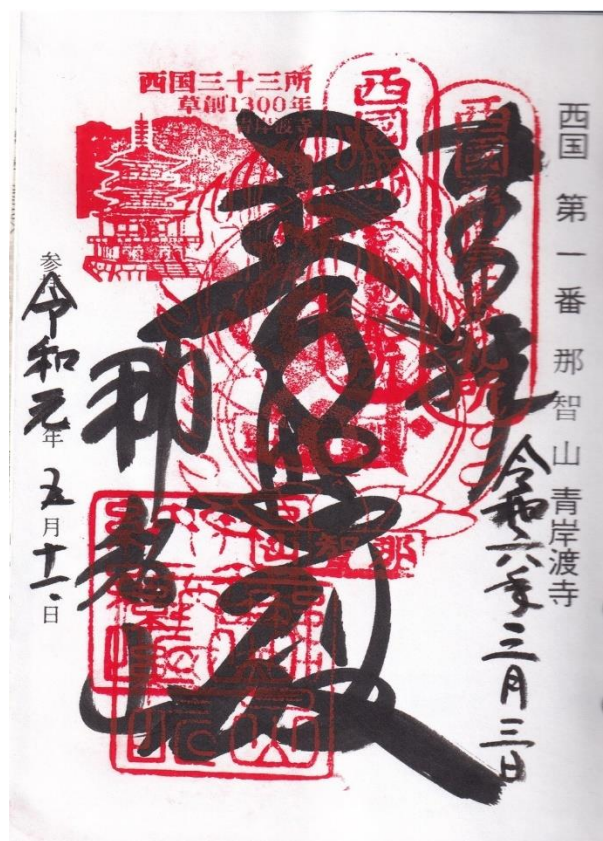
[第1番札所 那智山 青岸渡寺]

本尊：如意輪観世音菩薩

本尊真言：オン バラダ ハンドメイ ウン

御詠歌：補陀洛や 岸打つ波は 三熊野の 那智のお山に ひびく滝津瀬

参詣日：令和元年5月11日、令和6年3月3日（第2回西国観音霊場33札所巡礼 結願）



<余談>

今回は参拝札所が熊野の一寺だけであったので、名古屋から紀勢本線経由で紀伊勝浦まで往復したが、この路線は便数が極端に少なく、また乗車所要時間も名古屋駅から紀伊勝浦まで特急でも片道4時間という超ノンビリ路線であるから、関東組は新幹線始発で出発しても紀伊勝浦に着くのが夕方になり札所は既に閉門、当日の参拝は不可能である。

よって今回は、那智勝浦駅の近くの温泉民宿「小阪屋」に前泊して翌朝早く参拝し、帰路那智駅で途中下車して補陀洛山寺に立ち寄った。青岸渡寺は早朝の7時から開門しているので、早朝の清々しい境内から朝の陽光に輝く熊野灘の金波銀波を拝むのも悪くない。

小阪屋は若夫婦二人が経営している気さくで親切な温泉民宿で、料理や応対も心の籠った宿であった。青岸渡寺に参拝されるご同輩にオススメしたい。

~~~~~ お断り ~~~~~

「はじめに」でもお断りしたが、今回の巡礼はほぼ逆打ちで廻ったので、札所番付（札所番号）順にお読みになる場合には、巡礼の繋がりに順打ちの場合と時間的に前後逆の記述が生じている場合が多いことをお断りしておきたい。

第二番 紀三井山 金剛寶寺（紀三井寺、紀州）



開創 1,250 年の古刹であるので、本堂やその奥に建てられている大光明殿には平安～鎌倉時代に造られた国重文の千手観音像、十一面観音像（お前立）、薬師如来像、阿弥陀如来像、帝釈天像、梵天像、毘沙門天像などが安置されていて、古色蒼然たる格調高い諸仏を参観することができる。（本尊の十一面観音像は 50 年に一度開帳の秘仏）。



しかしながら、安土桃山時の建立になる楼門（冒頭の写真）、多宝塔、鐘楼や平成 20 年建立のコンクリート

（2023 年 9 月から大光明殿で常時開帳された諸仏。左から、毘沙門天、帝釈天、梵天、十一面観音菩薩（お前立）。同寺HPより引用）

製のけげげしい朱塗りの仏殿や、また、その中に納められている同年開眼の高さ四丈（12m）の総金箔貼り大千手十一面観音菩薩像などのキンピカの様相は、上記の格調高い仏像を見た目にはどこことなく場末の安遊園地の感があって感心できなかった。この大千手十一面観音を安置している仏殿には 3 階の展望回廊が造ってあって、観音様と同じ高さから拝顔できる丸窓が開いていて拝顔してみたが、キンピカが眩すぎて頭がクラクラとしてきた。

道理でコロナ禍解禁に伴うアジア系のインバウンドの海外観光団体客が薙めいていたのもディズニーランドやユニバーサルスタジオ見物などと同根ではあるまいか。

マ、本来から言えば彼等の民族の方が仏教はじめ宗教的な歴史でも先輩格であるから、彼等を邪魔者扱いにすることは失礼なことではあるが、彼らの傍若無人さにはいつも辟易する。

“郷に入れば郷に従え”を守って貰いたい。

しかし、この寺は和歌の浦からすぐの高台にあるので、境内からの海の眺めは素晴らしかった。和歌の浦はじめ、淡路島、四国まで見渡すことができるという。

(仏殿に祀られた大千手十一面観音菩薩立像⇒)



(仏殿回廊から和歌の浦を望む)

同行の潔ちゃんと紀三井寺駅近くの食堂で寿司と般若湯を一献傾けて西国観音霊場 4 札所巡拝の昼飯直会をした後、大阪経由で帰宅した。

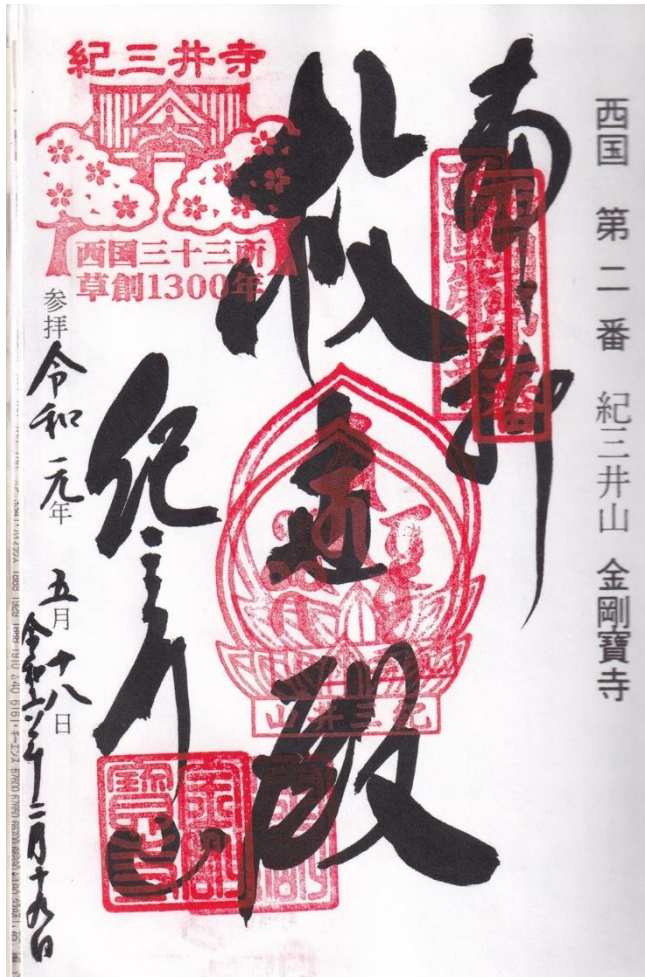
[第2番札所 紀三井山 金剛寶寺(紀三井寺)]

本尊：十一面觀世音菩薩

本尊真言：オン マカ キャロニキャ ソワカ

御詠歌：ふるさとを はるばるここに 紀三井寺 花の都も 近くなるらん
(花山法皇御製とも)

参詣日：令和元年5月18日、令和6年2月19日



(十一面觀世音菩薩お前立。平安時代)

(深い彫ながら気品に満ちた穏やかな顔が
印象的であった。同寺HPから引用)



第三番 風猛山 粉河寺（紀州）



（西国 33 観音霊場随一の規模を誇る本堂。一重屋根の礼堂と二重屋根の正堂とが結合した珍しい複合仏堂）

粉河寺は、和歌山市街から JR 和歌山線でたった半時間ほどの近さにあるが、周辺は紀ノ川を遡った和泉山脈の西端・葛城山の麓にあるせいか、何となく神さびた深山幽谷の気に満ち満ちた辺境の地のように感じられた。そのような辺境の地に西国観音霊場 33 札所随一の規模を誇る本堂伽藍が祀られていることは、この寺が相当の名利であることを伺わせる。

なるほど、最寄り駅の JR「粉河駅」前から始まる約 1km の参道は一大門前町を成していて、門前町の参道に順番に並べられているこの寺の縁起解説板を楽しみながらブラブラと見て歩くのも趣の深いことであった（下図。寺伝縁起は後述参照）。



また、粉河商店街では折から「粉河とんまか雛祭り」というイベントが始まっていて、商店や会社などのショーウィンドーには由緒ありそうな立派な雛飾りが飾られていてお雛様を見ながら歩くのもこれまたオツなものだった。因みに「とんまか」というのは山車を引き回す時に敲く太鼓の音に合わせて掛ける掛け声だそうだった。



(粉河とんまか雛祭りの幡旗、人物は潔ちゃん)



(店頭に飾られた雛人形。気品と風情があった)

さて、粉河寺は、鎌倉時代には 4km 四方の広大な境内に七堂の伽藍と五百を超える坊舎が立ち並ぶ栄華を誇ったが、後の秀吉の紀州攻めで全山焼失、江戸時代になって紀州徳川家の手で復興されたという。今でも広い境内に諸堂が立ち並び、本堂は西国 33 霊場では最大の建造物と言われている。粉河観音宗総本山。



(豪壮な大門)



(広い境内 桜の名所)



(境内案内図。同寺HPより引用)

本尊は十一面千手観世音菩薩であるが、本堂の井戸の中に祀られた永久秘仏のために、史上一度も開帳されたことが無く、従って過去誰も見たことがなく、未来永劫も誰も拝観することができないそうだ。お前立も秘仏で拝顔できなかった。

ところが、この寺の次に詣でた和歌山市の紀三井寺の境内には西国三十三霊場全ての写し本尊（石仏）が勧請されていたので、試みにこの粉河寺の写し観音像を拝顔してみるとちゃんとそれらしき十一面千手観音菩薩が刻まれていた（右写真）。

写し本尊を刻む時に限り石工にだけ開帳したのか、或いは石工が勝手に想像して刻んだのかは定かではないが、マ、そのようなことは深く詮索せずに、この石刻の観音菩薩様の優しそうなご尊顔を拝顔してご本尊のお姿を想像すればそれで結構とすべきではあるまいか。



さて、冒頭で触れたこの寺の縁起は、大凡以下のようなものらしい（「粉河寺縁起」）。

山中での狩猟中に光を放つ地を発見した或る猟師がそこに庵を構え、精舎建立と仏像安置を発願する。すると一人の童子の行者が現われて宿を乞い、その礼に仏像の建立を申し出る。行者は庵に入り、七日の内に仏像を作るのでその間は見てはならない、完成したら戸を叩いて報せると告げ、庵に籠る。七日目に庵に行ってみると、庵内には等身の千手観音立像が安置され、行者の姿は見えなかった。猟師は近隣にこのことを語り、人々はみな参拝して観音様に皈依していた。

或る時、大坂の長者の一人娘が悪臭を放つ皮膚病に侵され、祈祷を尽しても回復の兆し無く三年が過ぎたところへ童子が現われて七日間の祈祷を申し出た。千手陀羅尼による加持祈祷によって娘の病いは快癒し、喜んだ父母は蔵の財宝を寄付しようとするが童子は断わり、娘が幼少より肌身離さなかった提鞘（小刀）と紅の袴のみを形見として受け取った。

在所を尋ねられた童子は、紀伊国那賀郡の粉河と答えて消えてしまう。次の春、長者一家は那賀郡に赴き粉河の地を尋ねるが知る人がいない。山の方にあるだろうと行ってみると、粉を入れたような白い流れを発見し、喜んで辿ると上流に庵を見出した。庵の扉を開けると輝く白檀の千手観音像が立っており、その施無畏印を結んだ手に、童子に喜捨した提鞘と袴が掛かっていた。長者一家は童子が千手観音の化身であったと知り、剃髪、出家した。猟師の一家は粉河寺の別当となって今に伝わるという。

寺の縁起絵巻の一部には下記のような場面が描かれていた。童子行者に化けていた千手観音を長者一家が拝んでいる場面である。観音菩薩の左手には長者が童子行者に与えた見覚えのある提鞘（小刀）、右手には紅の袴が掛かっている（粉河寺縁起絵巻より）。



余談であるが、この長者一族の末裔は今も東大阪市の名家の塩川家で、財務大臣を務めた塩爺こと塩川正十郎もこの名家の出身だそうで、山門には正十郎の父である正三がこの寺に寄進したことが刻まれている石碑が残っているそうだ。

昨日は、今回の第2回目巡礼の最終段（巡拝区切り第9段）5札所の内の2札所である泉州河内の第5番札所「葛井寺」、及び泉州と紀州を隔てる和泉山脈の槇尾山（標高600m）にある第4番札所「施福寺」に巡拝した後、JR 阪和線&和歌山線で粉河駅に至り、門前町最奥の大門の横にある旅館「丸浅」に泊まって門前旅館の気分になり、今朝この粉河寺に参詣して次の第2番札所「紀三井寺」に向かった。

旅館「丸浅」は“気さくな女将の宿”という看板で売っているだけに、ホスピタリティーも料理もお値段もなかなか結構であった。紀州名物の高級魚クエと地元新鮮野菜を豊富に使った料理が自慢の老舗料理旅館ではあったが“お財布と身体に優しいビジネスコース”という宿泊（料理）コースも用意されていて、2食付きで福沢諭吉1枚でも野口英世1枚のお釣りが戻って来るといのが泣かせた。機会があれば是非泊まれることをお勧めしたい。



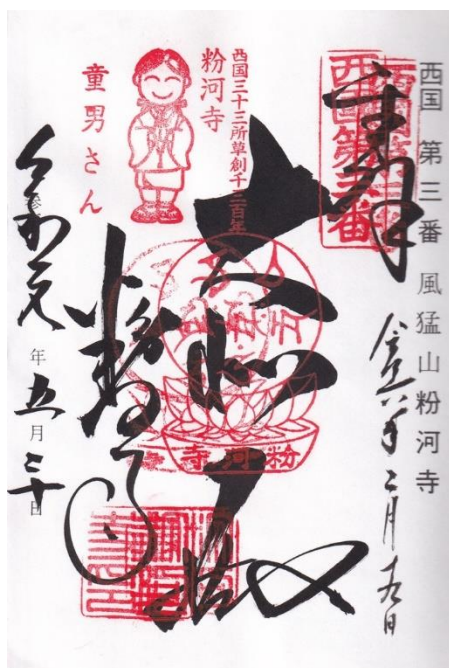
（粉河寺大門のすぐ向かいにある丸浅旅館）

〔第3番札所 風猛山 粉河寺〕

本尊：千手千眼観世音菩薩 本尊真言：オン バザラ ダラマ キリク ソワカ

御詠歌：父母の 恵みも深き 粉河寺 仏の誓ひ たのもしの身や

参詣日：令和元年5月20日、令和6年2月19日



第四番 槇尾山 施福寺（大阪・泉州、和泉）



第4番「施福寺」は、大阪・泉州・和泉市街地からバスを2本乗り継いで終点まで1時間、そこから更に徒歩で山坂道の参道を登って1時間、和泉山脈・槇尾山（標高600m）の山頂直下に建っている。バスが和泉平野を離れると途中には集落や民家は全く無い山また山の山中となり、ウネウネとした車道の終点は信徒会館（？）と古びた土産物屋の2軒があるだけの淋しい所であった。おまけに、バスの便数も少ないので、西国観音33札所の中でもかなり交通が難儀な場所にある。古色蒼然たる仁王門を潜ってからは本堂まで急坂の石段が連続する参道となり息が切れて10歩歩いては立休みという無様な恰好になった。



（仁王門）



（急な山坂道の参道に往生した）

実は、ここで白状しなければならないのだが、山門を少し登った先にある四阿で弁当代わりに持参したアンパンを食ったらエネルギー補給になるどころか、全身から力が抜けてしまって足が上に上がらなくなってきた。折から雨もパラついてきて濡れた石畳の道はよく滑り始めた。ここから本堂までは若者の足でも 30 分、我が足では 1 時間近くも掛かるであろうし、特に下山時には足が纏れて滑って石畳に顔面制動、悪くすれば全身骨折で“ハイさようなら”するのがオチであろうという体たらくと相成った。かつてはヒマラヤ、アンデス、欧州アルプスの海外高峰登山で鳴らした（と思いたい）ワタクシ奴にとっては誠に情けなくて涙がチョチョ切れるのであるが、これもここで三途ノ河を渡らせないようにという観世音菩薩サマの有難いお心遣いと考えるべきであろう。合掌。

という次第で、重ねて有難いことに、今回は例の悪友相棒の潔ちゃんと同行二人であるからして、小生はここでリタイア、彼に代参をお願いしたので、以下の記述は前回参詣した折のものであることをお断りしておきたい。

参道の途中には、弘法大師御剃髪所という御堂もあった。空海はここで修行して得度したのだそう。

本堂は山腹の僅かな平地に建てられていた。平地の余裕が無い為か、他の堂宇は無かった。この寺では本尊・阿弥陀如来坐像、札所本尊・十一面千手千眼観世音菩薩はじめ本堂の金色に輝く眩しいばかりの諸仏、馬頭観世音菩薩などの後堂の諸仏も全て常時公開されているのが誠に結構なことであった。

他の札所では、本尊は秘仏と称して平生は公開せず、中には 100 年に一回だけしか開帳しないというような寺もある。



(弘法大師御剃髪所)

文化財を破損などから守るために常に公開するのは困難なことは理解できるが、せめて観音様ご縁日の毎月 18 日だけでも公開されたら如何であろうか。或いは、国宝などに指定されている仏像などは東京や京都や奈良の博物館に寄託して一般に公開して頂くという手もあろう。

マ、歴史小説家の杉本苑子が『西国巡拝記』に書いているように、寺院の価値は壮大な伽藍や国宝の多寡や寺格、由緒によって決まるのではなく、そこの住職が如何に仏法に帰依し庶民の幸福を願っているかに依るということであろう。

その一例。京都府亀岡市にある西国 21 番札所「穴太寺」の老師は、その寺の寺宝である「釈迦涅槃像」などを文化財として登録して貰うように申請したら如何かという学者などの提案に対して、“寝釈迦像は、病気の参詣者が悪い箇所を撫でると快癒するという信仰が

あつて、重文などに指定されれば信者に撫でて頂くこともできなくなるから、誰でもいつでも触れるように今のままにしておくのがお釈迦様の本意であろうと言っておられるが、けだし名言・名僧であろう。

名僧の心意気をもう一例。盲人救済に心を尽くし盲人養老院を提供しておられる奈良県壺坂寺の老師は現在の仏教界の華美な風潮や仏教者の虚飾に触れて「釈尊がどんなに立派でも、その教えを实践、広通すべき我々僧侶が悪ければ釈尊の教えは消えてしまいます。仏の心、仏の言葉を殺しているのは誰でもない、坊主自身です。伽藍仏教の時代は去りました。美術的にどれほど価値のある仏像を擁し、千年の古刹に反り返っていても“魂”がなければ見世物にすぎません」(前記の杉本苑子本による)。

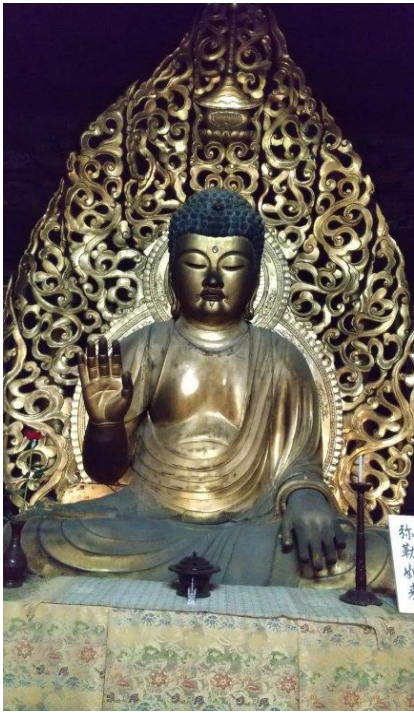
余談はさておき、上述の施福寺の後堂に祀られている馬頭観音には次のような言い伝えがある。西国観音巡礼の中興の祖・花山法皇がこの寺に行脚した折、余りの山深さから道を失ってしまって途方に暮れていた時に、馬の嘶きが聞こえて来たのでその方向に歩を進めてこの寺に無事辿り着くことができた。そこでお礼にこの馬頭観音を喜捨したと伝えられている。

本堂内陣の諸仏は撮影禁止となっている寺院が殆どであるが、この馬頭観世音菩薩は花山法皇の由緒深い仏像であるので、撮影をお許し願うべく、“私は西国観音霊場中興の祖・花山法皇を敬慕し、また、午歳で深く馬頭観音に帰依しているので、何とか撮影をお許し頂けないものだろうか”と納札所に居られた係の人をお願いしてみたところ、菅笠・白衣・杖の巡礼姿をお認めになったのか、或いは前回が一番札所の那智「青岸渡寺」から西国観音霊場巡礼古道を歩いて来たことが伝わったのか、いとも簡単に「こんな山奥までご参詣お疲れ様です。ご自由にどうぞ」という有り難いお言葉。やはり山奥にある鄙の寺は違うナア・・・。序に内陣のご本尊も撮影したかったが、これはさすがに手が出なかった。

今回我が分まで代参して下山してきた相棒によると、本堂の内陣、後堂に安置されている諸仏は今回は全てオールキャストで内陣に祀り直されていて、しかも全ての仏像が写真撮影 OK となっていた由。途中怠けてリタイアした小生は、残念ながら折角の大判振る舞いのご利益に浴する機会を失った。以下に彼が撮影して来た仏像を載せる。

(札所本尊：十一面千手千眼観世音菩薩⇒)





(弥勒菩薩)



(方違え観音菩薩)



(馬頭観世音菩薩)

(間違った考えを直して下さる) (足の裏を見せる座位は珍しい)

施福寺からの下山路は、5年前の今回は西国古道巡礼道に従って槇尾川から滝畑ダム經由で河内長野市に下ったが、今回は明日巡礼する予定の紀州の粉河寺、紀三井寺へ向かうために安直に往路をバスで戻って和泉府中駅から和歌山駅經由で粉河駅に至り、粉河寺門前の丸浅旅館という宿に投宿した。この宿は“気さくな女将の宿”で売っているそうで、ナルホド、素朴な雰囲気に加えてご主人夫婦の応対も料理も大変によろしかった。

紀州名物の高級魚クエと地元新鮮野菜を豊富に使った料理が自慢の老舗料理旅館ではあったが“お財布と身体に優しいビジネスコース”という宿泊（料理）コースも用意されていて、2食付きで福沢諭吉1枚でも野口英世1枚のお釣りが戻って来ると言うのが泣かせた。

早速、明朝参拝する粉河寺の門前で相棒の潔ちゃんと差し向いになって本日巡拝した泉州の葛井寺と施福寺のご本尊十一面千手千眼観世音菩薩さまに般若湯を差し上げ、二晩目の直会を供奉したのであった。これも仏縁。誠に結構。

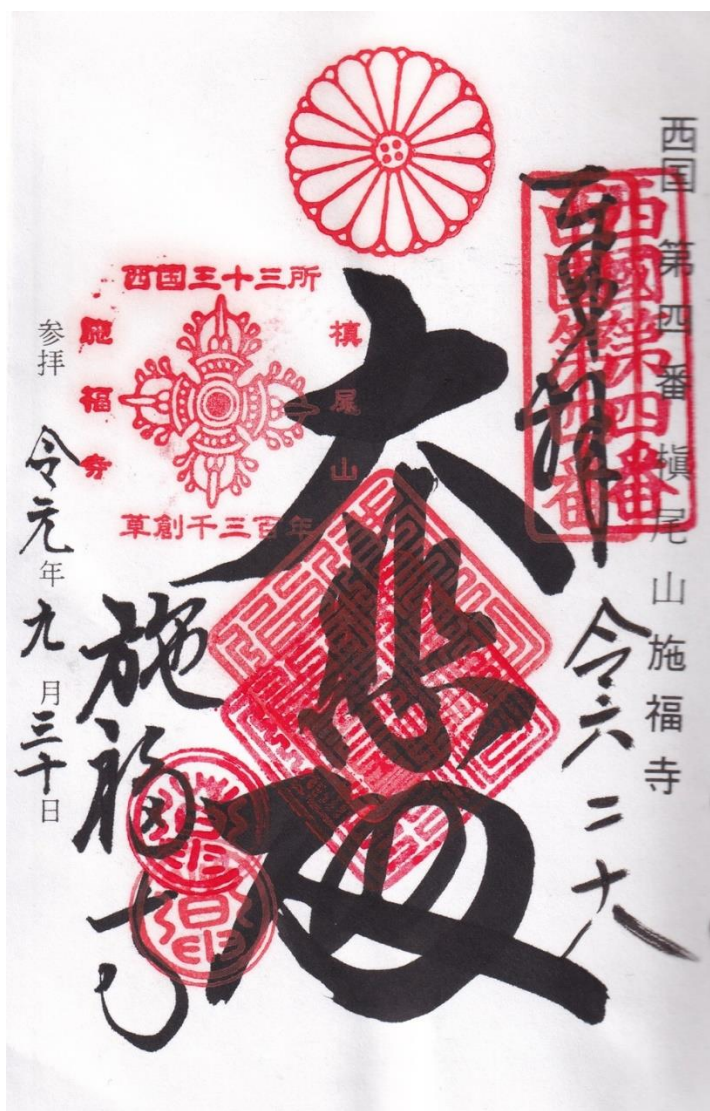
[第4番札所 槇尾山 施福寺]

本尊：十一面千手千眼観世音菩薩

本尊真言：オン バザラ タラマ キリク

御詠歌：深山路や 檜原松原 わけゆけば 巻の尾寺に 駒ぞいさめる

参詣日：令和元年9月30日、令和6年2月18日



第五番 紫雲山 ^{ふじいでら} 葛井寺（泉州河内）



第5番「葛井寺」（ふじい寺）は、泉州河内の藤井寺市中心街の真ん中にあり、地元の人々が気軽にお詣りしたり、境内を買い物や散歩の道に使ったり、オバサン達の井戸端会議やオジサン達の四方山話の場所に使われているような庶民の寺とお見受けした。山門の前では露店の花屋が店を出していて、ご近所のオバサン方で繁盛している様子だった。結構なことである。この山門（西門、四脚門）は豊臣秀頼寄進の桃山様式の国重文だそうだが、重文の遺跡のすぐ脇に露店が出せるということはやはりこの寺が庶民との仏縁を大切にしている証拠であろう。古刹・名刹を鼻に掛けず衆生に手を伸ばしている法道が心ニクイ。

また、藤井寺市の中心街はこのお寺の門前町として発展してきたが、西門に通じる西門筋商店街も庶民のための気取らない商店街で、古き良き時代のノスタルジーを感じさせた。



（国重文の山門前の露店花屋も繁盛していた）



（西門筋商店街。ちょっとノスタルジック）

この寺の本尊は日本最古の十一面千手千眼観世音菩薩像（天平期）であり、国宝に指定されている秘仏であるが、毎月 18 日の観音縁日には開帳される。びっしりと埋め込まれた 1,043 本の手は滅多に見られない真の千手観音像であるから、開帳日に合わせて巡拝されることをお勧めしたい。



（ご本尊「十一面千手千眼観世音菩薩像」。同寺 HP から引用）

この葛井寺は今でこそ金堂と阿弥陀堂だけの街中の狭い伽藍になっているが、往時（室町時代）には講堂や東西両塔などの多くの伽藍が建立され、境内が半里四方もあった大寺であったが、南北朝や戦国時代の騒乱の戦火で伽藍焼失、それに加えて永正の大地震（1510 年）では残っていた本堂も壊滅してご本尊の千手観音だけがかろうじて残ったと伝えられている。往時の姿を今に伝えているのが室町時代に描かれた「葛井寺参詣曼荼羅図」（次頁）であり、多くの参詣者が詣っている様子が描かれている。

また、この寺のすぐ近くには古墳や天皇陵などが沢山あり（世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」）、その他にも近くの道明寺天満宮には復元された修羅（大きな丸太で作られた古代の巨石などの運搬用具）も展示されているので、歴史や民俗に興味をお持ちの方は散策がてらに立ち寄られたら如何でしょうか（次ページに写真）。

余談であるが、この寺のすぐ近くには酒屋が出している立ち呑み酒場「谷酒店スタンド」というのがあり、全国の地酒やオカアさん手作りの美味しい肴を出してくれるので左党の方々にオススメしたい。葛井寺ご本尊「十一面千手千眼観世音菩薩」サマとご一緒に一献傾けるのも悪くなかろう。ただし、椅子席は無いので、小生のように足腰が弱っているご同輩には少々（かなり？）キツイかも・・・（次々ページに写真）。



(葛井寺参詣曼荼羅図、室町時代)



(百舌鳥・古市古墳群)



(古代の巨石運搬具「修羅」、道明寺天満宮)



(谷酒店スタンド)

さて、今回の第2回目巡礼の終段（巡拝区切り第9、10段）はP.9「青岸渡寺」の項でも触れたが、泉州河内の第5番札所「葛井寺」から巡拝を始めて、泉州和泉の第4番札所「施福寺」、紀州の第3番札所「粉河寺」、同じく紀州の第2番札所「紀三井寺」を巡拝して最南端・那智の第1番札所「青岸渡寺」で今回の巡礼を結願し補陀洛渡海のトバロを覗いて見るという巡礼行程で企画したが、この最終段の5札所巡礼は関東からの巡礼では2泊3日でもかなりキツイ日程となるので、前日に兵庫県西宮市在の例の悪友・潔ちゃん宅に一宿一飯の恩義に与り、その序に彼にも同道を誘ってみたところ、葛井寺から紀三井寺まで同行三人で行脚することと相成った（もう一人は言わずと知れた観世音菩薩さま）。

（結願寺「青岸渡寺」参拝は、生憎南紀地方大雨のため急遽中止して出直すこととした）。

今回は参詣日を開帳日の観音縁日の18日に合わせて参拝したので、本当に1,043本の手と眼を持つ真の千手千眼観世音菩薩像（国宝、現存する日本最古の千手観音、天平彫刻）の珍しいお姿を拝観できたことは嬉しいことであった。これも仏縁。

南摂地方は公共交通機関ネットワークが不便な場所柄で、この葛井寺からすぐ隣の第4番札所「施福寺」に廻るのに一旦大阪天王寺まで戻ってから再び別の鉄道で和泉府中という駅に南下しなければならないというスイッチバックの如き乗換を行って和泉山脈槇尾山の山頂近くにある第4番札所の山寺「施福寺」に向かった。

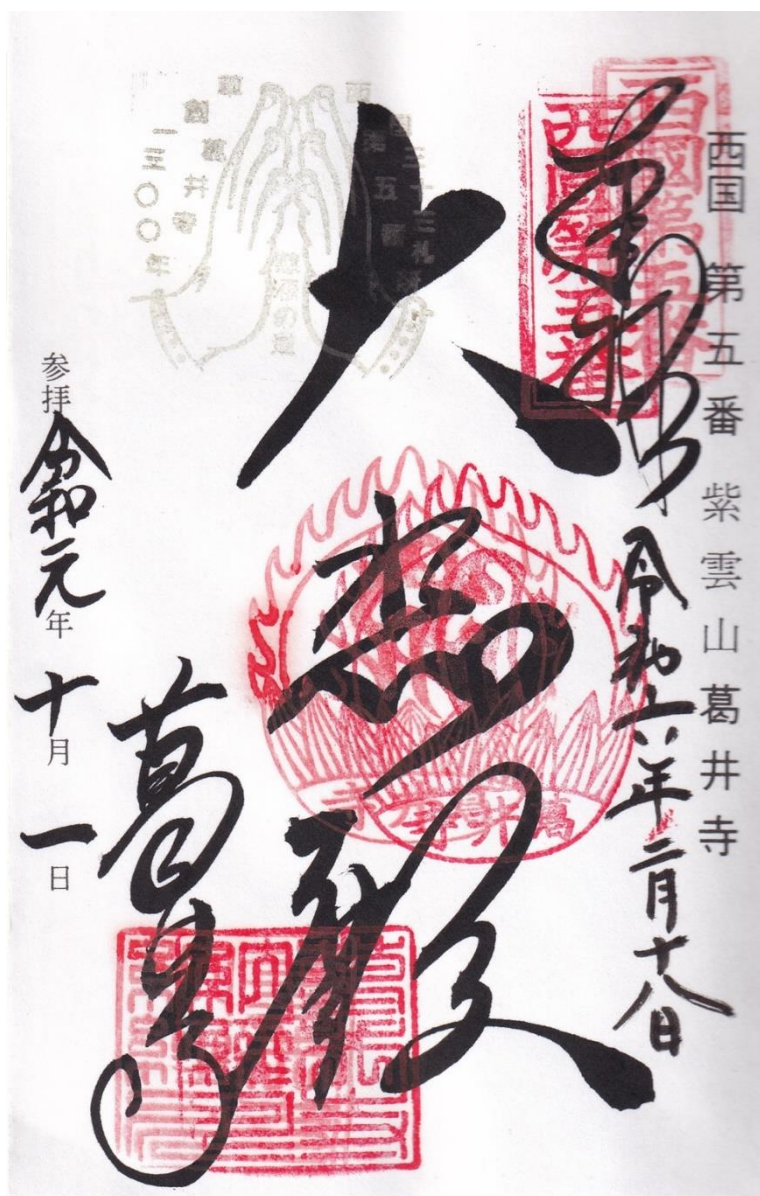
[第5番札所 紫雲山 葛井寺]

本尊：十一面千手千眼観世音菩薩

本尊真言：オン バザラ タラマ キリク

御詠歌：参るより 頼みをかくる 葛井寺 花のうてなに 紫の雲

参詣日：令和元年10月1日、令和6年2月18日



第六番 壺阪山 南法華寺（壺阪寺）（大和）



（壺阪寺境内伽藍。奥最左の本堂（八角堂）に本尊十一面千手千眼観世音菩薩が祀られている。
手前の石仏は天竺渡来大釈迦如来坐像、その右の四角な石造り伽藍は同じく天竺渡来の大石堂）

5年前の前は、近鉄吉野線「壺阪山駅」から車も人も全く通らない寂しい山中のウネウネとした山道を清水谷に沿って2時間ばかり歩いて登ったが、今回は駅から路線バスで安直に参拝した。門前の参道入口からは万葉の里、飛鳥が眼下に眺められた。遠くに見える小さなピラミッドは畝傍山であろうか？



（壺阪寺参道入口からの眺望。このような深山幽谷の中にある。後方には奈良盆地が霞んで見えた）

それにしても、人里遠く離れた山中にこんな大伽藍の寺をよくぞ造ったものと感心した。今は麓からの林道が通っているが、当時は道も無かったであろうから、御堂の柱や石材などの材料をどのようにして運搬したのであるだろうか。一つ前の札所「葛井寺」の項で触れた古代の重量物運搬具「修羅」(P. 30 参照)でも使ったのではあるまいか？

マ、それはさておき、この寺は巨大な石仏や石堂などの巨石だらけの寺であった。聞くところによれば、この寺はインド各地でのハンセン病患者救済、現地の学校運営助成、奨学金事業等の教育支援、地域開発支援などインドへの様々な国際支援交流を行ってきた社会活動に対して、インド政府より感謝の意を表して贈られた石仏群だそう。

例えば、右に掲げた天竺渡来大観音石像は、南インドカルカラの三億年前の古石がインド政府やインド国民の協力で提供され、延べ7万人のインド石工が参加してすべて手造りで製作された高さ 20m 全重量 1,200 トンに及ぶ石像で、観音石仏としては本邦最大であるそうだ。

余りにも大きいので、66 個に分割して彫刻し、日本に運ばれ組み立てられたそう。土台と胎内には数万巻の写経が納められている。

その他にも、巨石で彫られた印度渡来の石仏や仏堂は山程あり眼を瞠るばかりだが、白く輝く巨石ばかり眺めていると文字どうり眼が眩むので、以下に主要な物の写真だけ掲げておく。全てインドで彫られ部分部分に分割されて送られてきた印度渡来石像である。



(大釈迦如来石像、身丈 10m、台座 5m。お前立は左より普賢菩薩、十一面千手観世音菩薩、文殊菩薩)



(釈迦涅槃像 身長 8m)



(高さ 3 メートル、幅 50 メートル、重さ 300 トンの石壁に刻まれた釈迦一代記「仏伝図レリーフ」。
南印度カルカラにて延べ 7,000 人の石彫師の手によって刻まれたという)



(仏伝図レリーフの内「苦行・乳糜供養」の図、解説板は下記)

第5面

「苦行」と「乳糜供養」の二場面が描かれている。

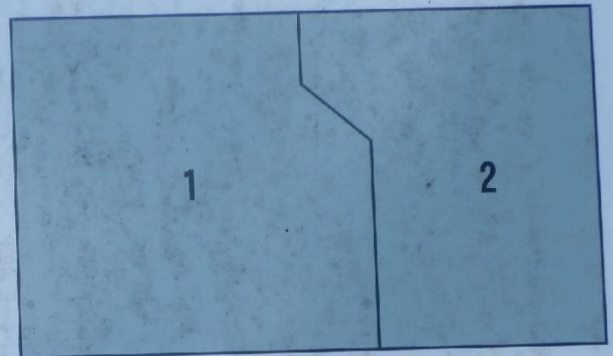
(1)「苦行」

多くの高名な沙門に教えを乞うたものの、満足な解答を得られなかった太子は、ウルヴィルヴァー村の近くの森に入り、今まで誰もしたことのないような激しい苦行を続けた。苦行とは肉体をさいなむ修行であって、古くから最も重要な修行の一つとされてきた。この苦行を6年間も続けたので、眼は落ちくぼみ、骨や血管が浮き上がって見えるまでにやせ細った。

図は、恐ろしい禽獣の棲む森の中で、醜悪な魔の誘惑にも動かされることなく苦行を続ける太子の鬼気迫る光景を描いている。

(2)「乳糜供養」

6年間の命がけの苦行によっても真の解決が得られないことを知り、太子は苦行を放棄した。先に王宮での豊かな生活を捨て、今後は苛酷な苦行を捨てたわけで、両極端を放棄したのである。苦行を放棄した太子は森を出て近くのナイランジャンナー川に入り、垢にまみれた身を洗い清めた。そして、村の娘



スジャーターから乳糜をもらった太子は、体力を回復していった。5人の従者は太子が苦行を捨てたのを知って、彼を見捨てて去っていった。

図では乳糜を受け取る太子を、5人の従者が輕蔑の目差しで見ている。



(天竺渡来「大石堂」、総重量 1,500 トン。印度アジャンタ石窟寺院をモデルに
延べ 12 万人の日本・インドの人々によって刻まれた石堂)



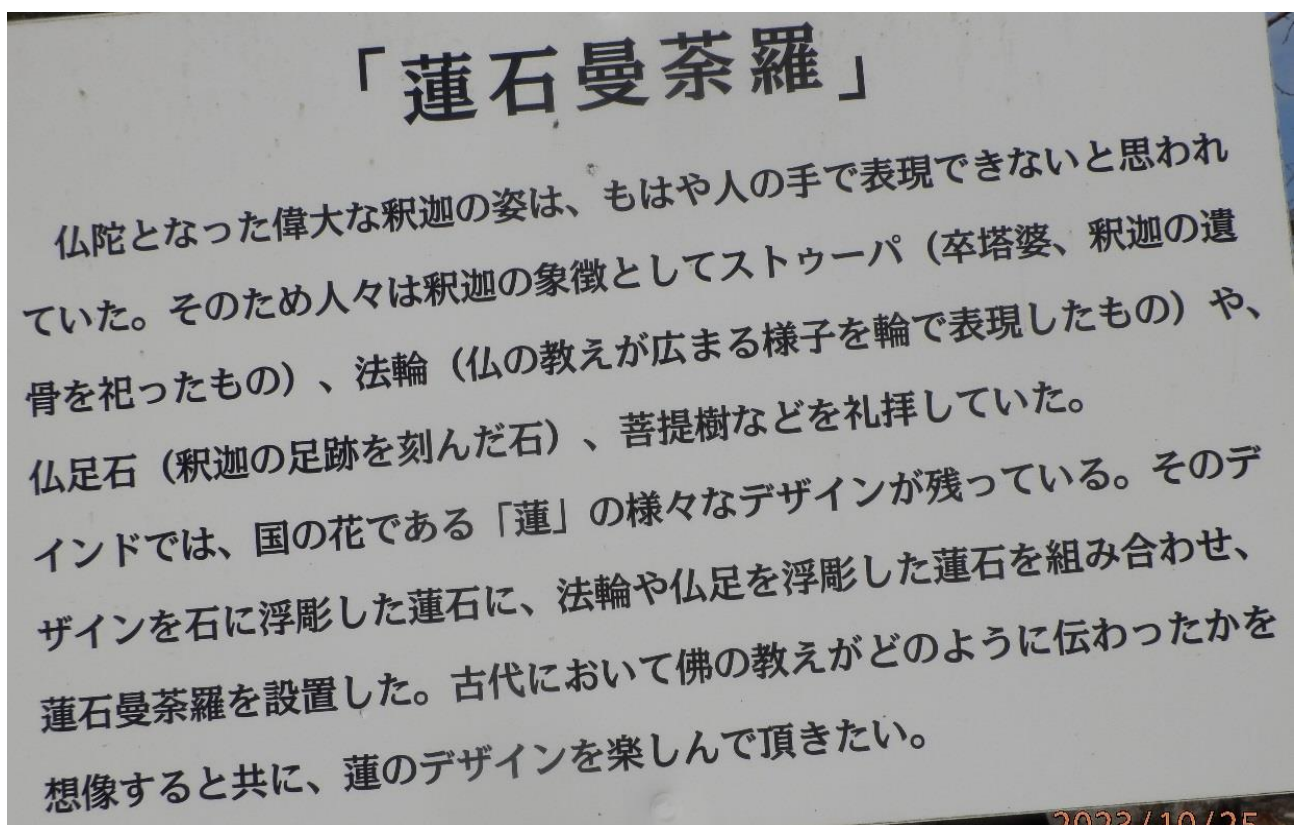
(大石堂内部の千手観音像)



(大石堂内部の仏舎利塔)



(このような彫石もあった。解説板は下記)

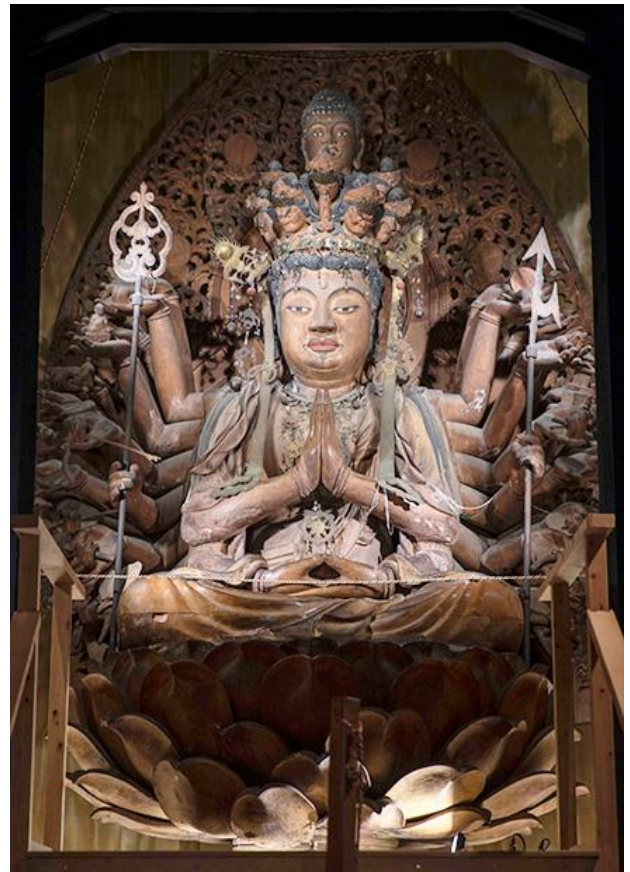


これだけの石仏を見させると、修行が足りない小生などは恐ろしくなってきたアタマの方も些かクラクラと眩暈がしてくるので、この辺で石仏の参拝は終わりにして、この寺の本来のご本尊「十一面千手千眼観世音菩薩」を拝顔して参拝完了としたい。

この観音様は迷える衆生にいつでも救いの手を差し伸べられるように常時開帳されている（右写真、同寺HPより引用）。

この寺がインドでの慈善事業に尽くされたことは前に触れたが、本邦で初めて盲人専用の養老院を開いたのもこの寺であった。今でも境内に盲人養老院「慈母園」を備えて盲人救済に一山の総力を結集されている。

この慈母園への入所資格は、全盲であること、60歳以上であること、身寄りの無いこと、貧者であることだそうで、この養老院の庭には盲人に残された嗅覚、聴覚、触覚の三感を生かして楽しんで貰えるように“匂いの花園”という花の庭園も設えられているそうだ。因みに、この寺が盲人への救済に尽力されているのは、この寺に伝わる「壺阪靈驗記」の故事に因る。合掌。





壺坂靈驗記

お里・沢市投身の谷

今より三百年以上昔、座頭の沢市は三つ違いの女房お里と貧しいながらも仲睦まじく暮らしていた。沢市は盲目ゆえ琴三味線を教え、お里は内職というなんともつましい暮らしであった。そんな沢市の胸中にひとつ不安が生まれていた。というの明けの七つ（午前四時）になると、お里が毎晩床を抜け出していたからだ。

「もしや好きな男が・・・」と問いたですと、お里は沢市の目の病が治るよう、この三年もの間欠かさず壺阪寺の観音様に朝詣でをしていると訴える。

疑った自分を恥じる沢市はともに観音様にお詣りすることにしたが、心の中は盲目がゆえに不遇な暮らしをしているのだと自分を責める。そして、一度お里を家に帰して、お里を自由な身にしてやろうと自分の身を投げてしまうのだった。

不吉な予感であわてて戻るお里は、非常な現実に遭遇し、自らも身を投げてしまう。

しかし、二人のせつない夫婦愛が、観音様の靈驗により奇跡が起こり、沢市・お里は助かり、沢市の目が開眼した。

この地は、そのお里、沢市が身を投げた、投身の谷と言い伝えられている。

2023/10/25

[第6番札所 壺阪山 南法華寺（壺阪寺）]

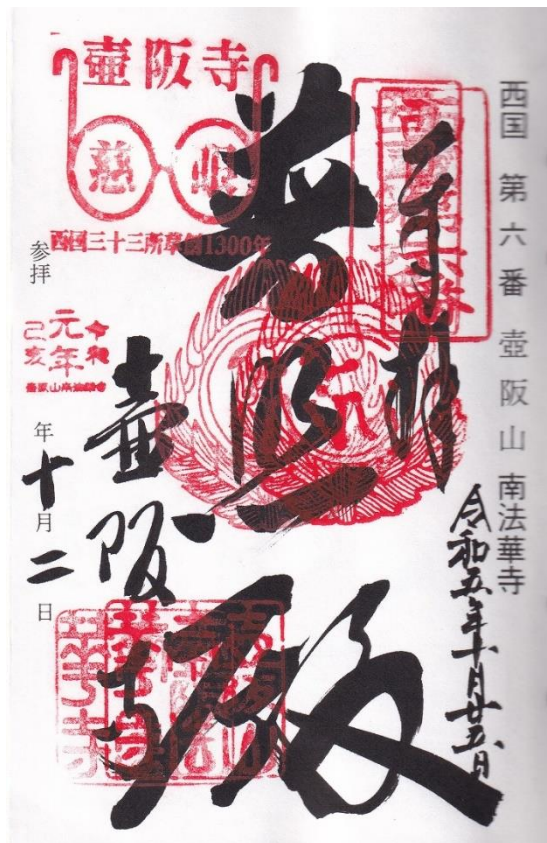
本尊：十一面千手千眼観世音菩薩 本尊真言：オン バザラ タラマ キリク

御詠歌：岩をたて 水をたたえて 壺阪の 庭の砂子も 浄土なるらん

参詣日：令和元年10月2日、令和5年10月25日



（紅葉が始まりだした壺阪寺の伽藍）



第七番 東光山 龍蓋寺（岡寺）（奈良飛鳥）



第7番「岡寺」は飛鳥時代の本邦の中心地飛鳥の地を見下ろす明日香村の丘陵地にある。小高い“丘（岡）”にあるから昔から“岡寺”と呼ばれた。天武天皇の子・草壁の皇子の宮殿を貰い受けて開創された古刹だそう。



（岡寺境内 右奥が本堂）

本堂も三重塔にも何か奥床しさが感じられた。特に三重塔は小ぶりながら厳として建っている姿には威厳があった。

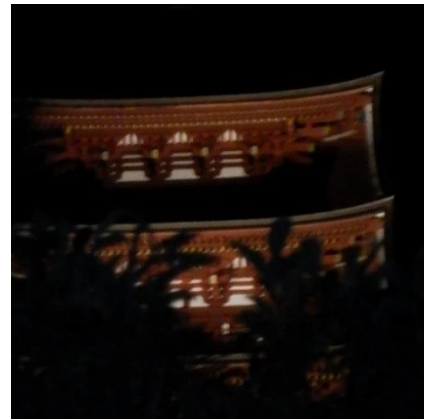


(本堂) (小ぶりながら厳として建つ三重塔⇒)
(右下は、夜間は全山真っ暗闇の境内で
唯一ライトアップに浮かんだ三重塔が
奥床しかった)



ご本尊は、塑像の如意輪観世音菩薩（国重文）で、日本三大仏の一つに数えられている（他の二仏は、東大寺の大仏、奈良長谷寺の十一面観世音菩薩 10m の巨像）。塑像の仏像としては本邦最大の仏像だそう（座高 4.85m）。

寺伝によれば、弘法大師が印度、中国、日本の土砂を捏ね合せて造ったとか・・・。如意輪観世音菩薩は普通は六臂（6本の手）を持つが、ここの如意輪観音は二臂という非常に珍しい仏像だそう。前の札所（壺阪寺）の観音様と同様に、眼を大きく開けられて衆生の様子を観ておられるお姿が頼もしい。



この寺の寺号「龍蓋寺」というのはちょっと変わった寺号であるが、寺伝に因れば昔飛鳥の地を荒らし回っていた暴れん坊の龍をこの寺の僧正がその法力を以って池の中に封じ込め、梵字の「阿」の字を彫り込んだ大石で蓋をしたので、龍は改心して以後は悪事を働かなくなったという故事に因るそうだ。
(龍蓋池⇒)

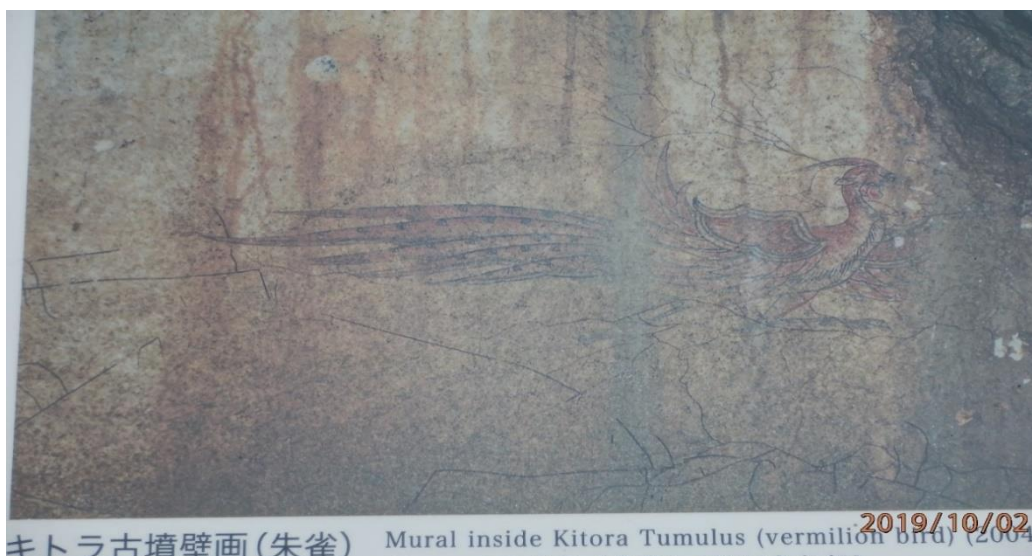


境内の高みからはかつての我が邦の政治・文化の中心地だった飛鳥京の地が足下に見下ろせた。

(梵字「阿」⇒)



さて、この札所がある明日香村には、キトラ古墳、高松塚古墳、石舞台古墳などの旧跡、飛鳥寺や橘寺などの古刹、高松塚壁画館、キトラ古墳体験館「四神の館」、奈良県立万葉文化館、犬養万葉記念館などの博物館などもあるので、ゆっくりと明日香野の散策を兼ねて古代の面影に浸るのも一興ではなかろうか。



キトラ古墳壁画(朱雀) Mural inside Kitora Tumulus (vermilion bird) (2004)

岡寺門前では5年前の時と同じ民宿「若葉」に泊まった。設備は古いが、ご主人夫婦のホスピタリティーは抜群だった。庭で放し飼いにしている烏骨鶏の卵の目玉焼きも飛鳥名物の飛鳥鍋もご主人夫婦の心が籠っているようで頗る美味かった。飛鳥に泊まる機会があれば、是非この民宿にお泊りになることをお奨めしたい。

[第7番札所 東光山 龍蓋寺（岡寺）]

本尊：如意輪眼観世音菩薩

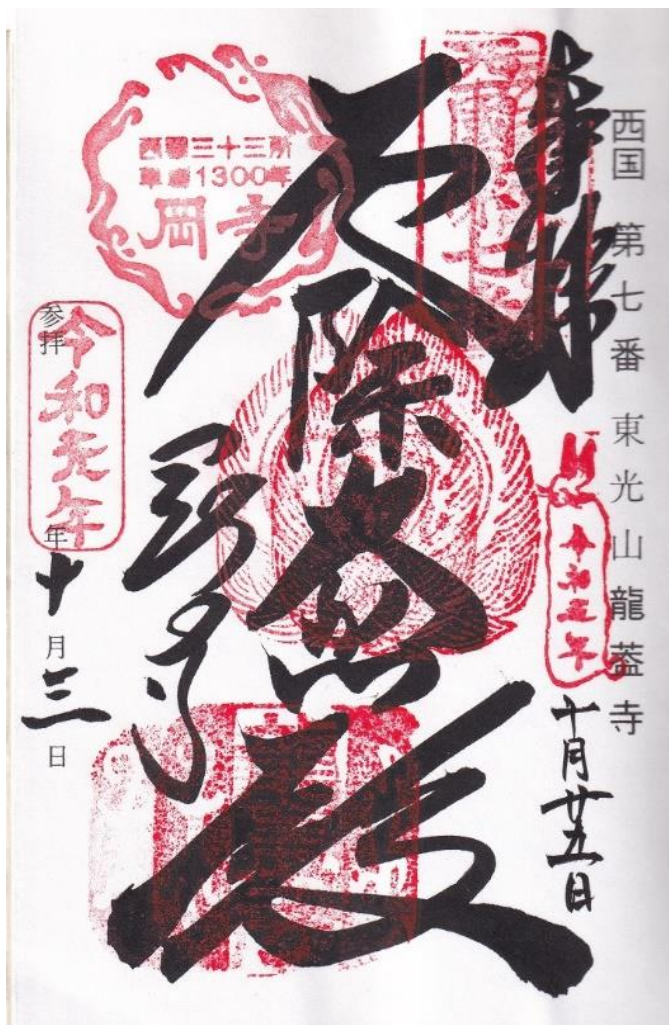
本尊真言：オン バラダ ハンドメイ
ウン

御詠歌：けさ見れば つゆ岡寺の
庭の苔 さながら瑠璃の
光なりけり

参詣日：令和元年10月3日、
令和5年10月25日



（岡寺門前 民宿「若葉」）



第八番 豊山 長谷寺（大和 初瀬）



（舞台付懸崖造りの本堂、東大寺の大仏殿に次ぐ大きさ、国宝）

第8番「長谷寺」は大和平野から東側に離れて大和川（初瀬川）を少し遡った初瀬丘陵にある。この寺は日本全国に末寺3,000を有する真言宗豊山派の総本山だそうで、平安時代には都の貴族の参詣も多く、清少納言や紫式部の作品にも描かれているそうだ。「長谷（はせ）」は「初瀬（はつせ⇒はせ）」に由来する。

仁王門（重文）から本堂に掛け渡されている有名な長い登廊（のぼりろう、重文）をヒイヒイ言いながら登ると、本堂（国宝）の広い外陣（礼堂）に登り着いた。

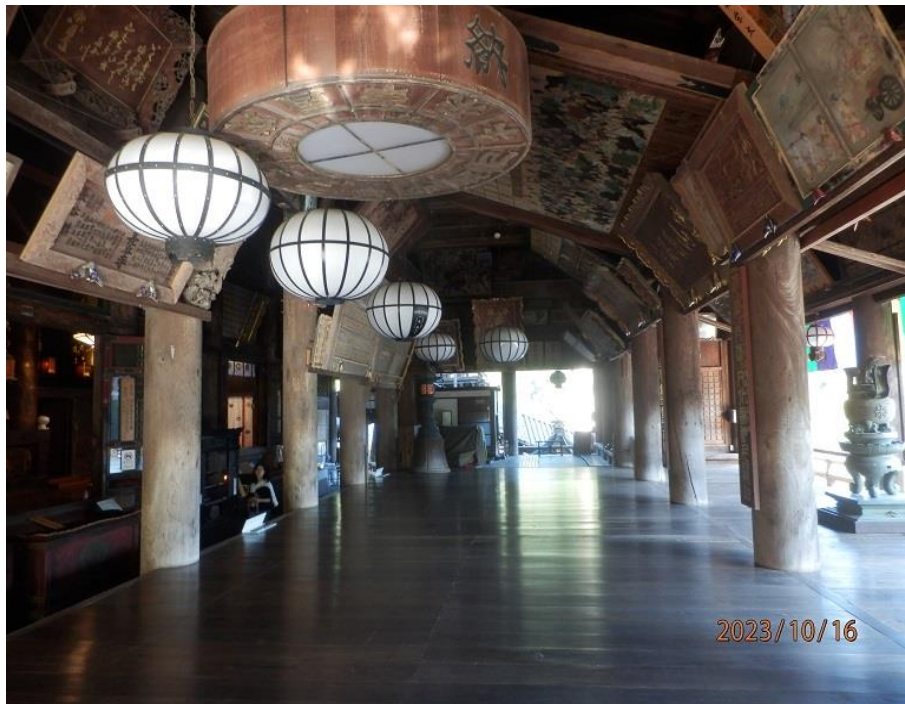


（豪壮な仁王門、重文）

磨き抜かれた板張りの礼堂は、大きな外陣に大香炉が一つ置かれただけの単純明快な伽藍であったが、それだけに格式高い静謐さに満ちているようだった。そこから拝む内陣の奥にはご本尊の十一面観世音菩薩の金箔が黄金色に輝いていた。



（仁王門から本堂に続く399段の登廊。釣灯笼が趣深い）



（磨き抜かれて塵一つ落ちていない本堂の外陣（礼堂））

その内陣奥の暗がりにはひっそりと安置されているご本尊は、像高 10m、楠一本彫り、木造仏としては本邦最大級で日本最大仏の一つに数えられていることは前項でも触れた。周囲に参拝者が誰もいない折に独りで拝んでいると、モロモロの煩悩に苛まれている小生でも心の中を何か爽やかな風が吹き抜けて行くような心持になった。しかし同時に、この十一面観世音菩薩さまに見詰められると気が竦むような怖いような気がしてくるのは、脛に様々な瑕を持つ身であるからであろう。



（礼堂は大香炉一つが置いてあるだけの静謐さ。その奥の内陣に金色に輝いているのが本尊）



(本尊：十一面観世音菩薩立像、木造漆箔、高さ3丈3尺、重文。同寺HPより)



(本堂舞台)



(本堂舞台から見た本堂礼堂)



(←舞台からの展望)

初瀬山 458m の裾野斜面に設えられた境内は広大な広さで、奥の院（陀羅尼堂）や五重塔を巡ればそれなりの良い功德が積めるのであろうが、足腰が弱った身には登廊の周辺しか歩けなかったが、下記のような旧跡もあった。



（紀貫之 故里の梅 歌碑）

〔人はいさ 心も知らず ふるさととは
花ぞ昔の 香ににほひける〕



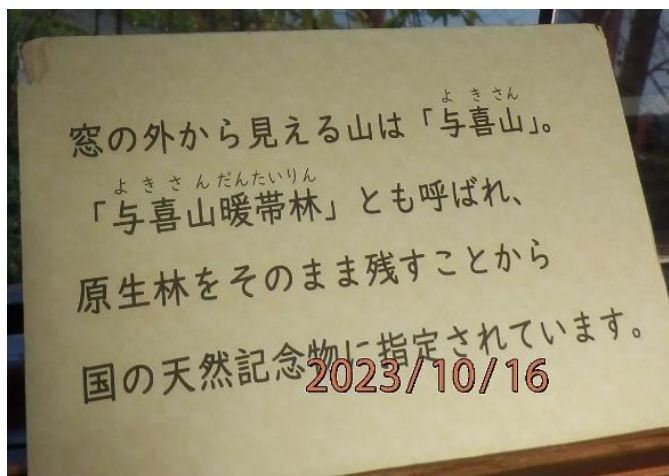
（藤原定家 塚、藤原俊成 碑）



（宗寶蔵から見える与喜山。姿・形の良い山だった。
原生林の樹叢にも風格があった） ↑ ↑



（長谷寺錦秋 菊回廊）



本夜は長谷寺門前の宿に泊まって般若湯を頂いた。大和屋旅館。5年前の前回にもここに泊まったが、設備は古いものの応対も料理もサイコーであった。宿泊料金が格安なのも年金生活貧乏暮らしの小生には大助かり。



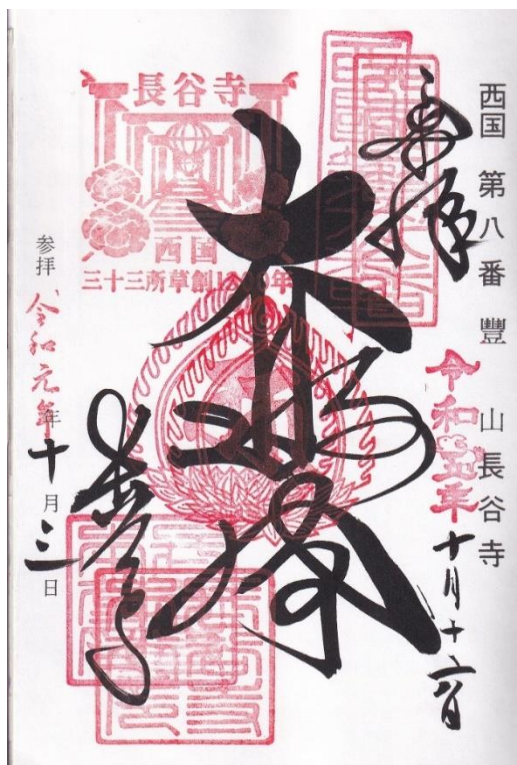
(長谷寺門前 大和屋旅館。奥が長谷寺)

[第8番札所 豊山 長谷寺]

本尊：十一面観世音菩薩 本尊真言：オンマカ キャロニカ ソワカ

御詠歌：いくたびも 参る心は はつせ寺 山も誓いも 深き谷川

参詣日：令和元年10月3日、令和5年10月16日



第九番 興福寺 南円堂（大和）



（八角堂の興福寺南円堂。本日は年一回の特別開扉日、大般若経転読法要）

第九番札所「興福寺南円堂」は、奈良最大の観光地「奈良公園」の中にあり、近くには東大寺、正倉院、二月堂、薬師寺、興福寺、春日大社などの社寺、奈良国立博物館などの施設もあるので興福寺はいつも人混みで混雑している。

しかし、この第九番札所は興福寺全山ではなくその中の一つの御堂である「南円堂」だけが西国観音霊場第9番の札所となっている。興福寺は往時は平安時代に権勢を振るった藤原一族の菩提寺であり、北嶺の比叡山延暦寺と並ぶ南都の僧兵の根拠地で、常に数千人の僧兵を抱えていた大寺であった。

その中の南円堂は藤原冬嗣が父の菩提を弔うために寄進した八角堂で内陣には本尊不空羼索觀世音菩薩坐像、四天王像、法相六祖像の国宝仏像 11 体が納められているが、残念ながら年間で秋の特別開扉「大般若經轉読会（・・え）」の 1 日しか開扉されず普段は固く閉扉されているので仏像はおろか堂内を拝観することもできない。

興福寺の同じ境内でも東金堂、中金堂、五重塔、宝物館の辺りは人出で賑わっているのに比べてこの南円堂の辺りは普段はひっそりとしていて、納経所も何となく寂しい雰囲気である。

そのような訳で前回は扉が閉ざされた御堂の前で鰐口を叩いただけで退散したが、今回は年 1 回の轉読会の開催日（10 月 17 日）に合わせて参拝したので、納経所前には早朝から特別参拝券を求める参拝者の行列ができて大混雑していた。少なくとも 1 万人は下るまい。



（拝観券を求めて並ぶ参拝者の大行列）

今回は轉読会の法会と南円堂の本尊他の秘仏を是非拝観したいものと、この轉読会特別開扉日に巡礼の日程を合わせて、前日に奈良に入って初瀬の長谷寺、番外の法起院を巡拝した後、長谷寺の門前旅館に投宿、翌早朝に近鉄電車で近鉄奈良駅に戻り朝 8 時に例の西宮市在の悪友（巡礼同行友）と待ち合わせて南円堂の納経所前に並び何とか拝観券を手に入れて、滅多に参観する機会のない大般若經轉読会を拝観し、また、これも年 1 日だけしか拝観できない本尊不空羼索觀世音菩薩坐像等の国宝秘仏を拝むことができた。

大般若經という經典は唐の玄奘三藏法師が天竺から持ち帰り、4 年の歳月を掛けてサンスクリット原典から漢訳した全 600 卷、文字数 500 万字という仏教最大の經典だそうだ。正式名称は大般若波羅蜜多經。

これを僧侶一人で唱えると丸二日間飲まず食わずで読経し続けねばならないほどの量だそう。これを略儀の読経方式にして 12 人の僧侶が一人 50 卷ずつ分担して大声で經典の題目・真言だけを読み上げながら折本經典を空中に乱舞させ、全經典を読経したことにしたのが大般若經轉読会であり、平安時代からは国家の勅会法会として重んじられたらしい。



（大般若經轉読会 毎日新聞より引用）

力強くも賑やかなこの法会の時間は約 1 時間、珍しい法要を見せて頂いた。しかしながら、この法会を見ようと狭い御堂に詰め掛けた参拝者で身動きもとれず、法会開始の時刻まで 2 時間、法要が始まって 1 時間、合計 3 時間の長い時間を御堂の固い床に同じ姿勢で座り続けていることは膝が悲鳴を上げて骨が折れそうになり、これはもう苦行以外の何物でもなかったが、マ、何某かの功德が積めたのではないかと思いたい。 —51—

さて、この南円堂の本尊は西国 33 観音
霊場札所では唯一の不空羂索観音である。
運慶・康慶父子の作で大変に厳かな国宝仏
であり、その重量感のある丈一（座高 3.3m）
の仏像には威厳があった。不空羂索観音は
手に持たれている羂索（索紐）で迷う衆生
を救い上げる仕掛けとなっているが、その
顔には深い理知が感じられた（と思いた
い）。



この観世音菩薩を護るための四天王像が
菩薩の四隅を囲い、また法相宗の興隆に貢
献した学僧 6 人の高僧が刻まれた法相六祖
坐像も同じ須弥壇に安置され、その雰囲気
は、この南円堂の小さな八角堂の内陣もは
るか西方の大海に浮かぶ須弥山浄土の广大
無辺な仏の住まいかと思われた。

（国宝 南円堂本尊・不空羂索観音 引用：同寺パンフ）

因みに、須弥山の大きさは縦横高さ共に
8 万由旬（ヨージャナ）、即ち 200 万キロメートルである。



（国宝 南円堂四天王像 左から広目天、増長天、多聞天、持国天 引用：同寺パンフレット）

これだけの見応えがある仏像を年にたった一日だけの公開とするには勿体ないから、毎日公開は無理としても例えば毎月の観音縁日には公開する等の方策を考えて貰いたい。

大般若経転読会が終わって南円堂を出たところで読売新聞記者からインタビューを受けた。

例の西宮在の悪友が応対したが、翌日の読売新聞奈良版に記事が掲載されたので、下に引用しておきたい。



(国宝 法相六祖坐像 引用：同寺パンフレット)

奈良市の興福寺で17日、南円堂（重要文化財）が特別公開され、参拝者が本尊の不空羂索観音菩薩坐像（国宝、高さ約3・4メートル）に見入った。

南円堂は813年に建てられ、過去に3度焼失。現在の建物は江戸時代に再建されたもので、毎年、600巻に及ぶ大般若経を扇のように次々と広げて読経する「大般若経転読会」の営まれるこの日だけ堂内が公開される。

堂内中央に安置される本尊は、鎌倉時代の仏師・運慶の父、康慶と弟子が1年3か月をかけて制作した坐像。8本の手に、人々を救うための羂索（縄）や錫杖などを持っている。

初めて拝観したという兵庫県西宮市の山本潔さん（82）は「大きさに圧倒された。とても穏やかな顔を残っているのが印象に残りました」と話していた。

穏やかな顔 印象深く

興福寺・南円堂 特別公開

公開された南円堂の不空羂索観音菩薩坐像（奈良市で）

2023年10月18日付
読売新聞奈良版

(読売新聞[奈良版] 2023年10月18日朝刊)

扱て、日本の国宝登録の仏像の2割近くは興福寺のものだそうで、ナルホド、興福寺の国宝館には有名な阿修羅像、銅造仏頭、十大弟子像、金剛力士像、十二神将像等などの国宝がズラリと展示されていて、像の姿だけでなく、よくもこれだけの多種多様な顔の表情を彫り込んだものと感嘆した次第。

薄暗くて深海の底のような静謐な館内で拝観していると、脛に瑕持つ身にはそら恐ろしくなってきた。未だ未だ修行が足らんワイ。



(阿修羅像 引用：NHK)



(銅造仏頭 引用：文春 HP)

今回は仏像だらけで抹香臭過ぎたかも知れないが、乞うご容赦。

[第9番札所 興福寺 南円堂]

本尊：不空罽索観世音菩薩

本尊真言：オン ハンドマ ダラ アボキヤ ジャヤデイ ソロソロ ソワカ

御詠歌：春の日は 南円堂に かがやきて 三笠の山に 晴るるうす雲

参詣日：令和元年10月5日、令和5年10月17日



↑ ↑

(大般若經転読会で撒かれた散華)

第十番 明星山 三室戸寺（京都・宇治）



この札所は奈良時代末期開創勅願の古刹だそうで、5,000坪の広大な境内には枯山水や池泉回遊式庭園などが配置され躑躅、紫陽花、蓮など四季の花々が咲き誇る極楽浄土でもあるらしいが、今回は真冬の最中であつたから花の彩は何も無かつた。5年前の前回に参拝した折には紅葉の盛りだったので、これは目の保養になった。



（躑躅 2 万本、紫陽花 1 万株、石楠花 1 千本。
しかし真冬の今は花は何も無かつた）



（前回は紅葉の盛り、斯くの如し）



（夏には斯様な趣向（蓮酒）もある。同寺HPより）



境内には斯様な石像もあった。
ちょっとユーモラス。

前夜は宇治・平等院の傍の宇治川河畔の民宿旅館に泊まった。60年ほど前からやっている古い旅館で設備も古く、料理も極めて“素朴”ではあったが、独りで切り盛りしている話好きの大將のホスピタリティーは抜群であった。今は主に長期出張者や学校運動部生徒の合宿などに利用されているそうだった。一泊二食付7,500円の安価が何よりである。「民宿旅館ふくや」。宇治は宿泊施設が意外と少なく、それ故満席になっていて宿の予約ができない場所でもあるので、オススメしたい。大抵はいつでも空いているそう。

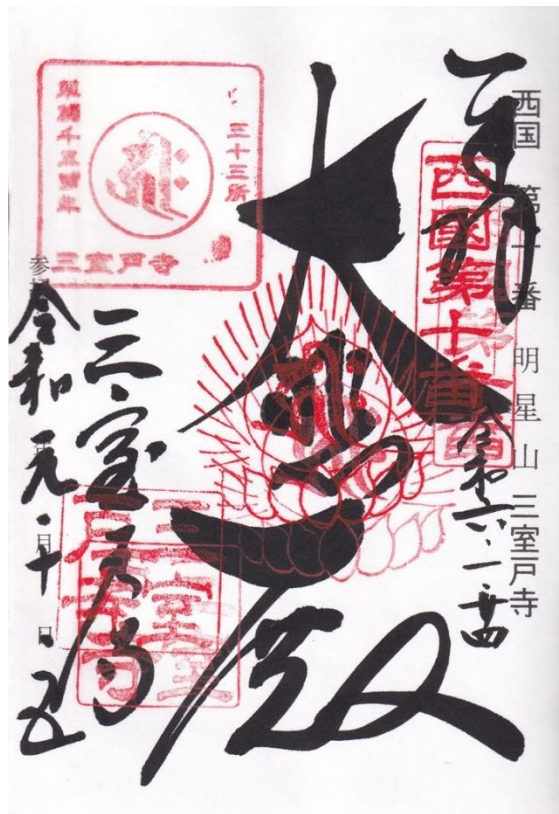
[第10番札所 明星山 三室戸寺]

本尊：千手観世音菩薩

本尊真言：オン バザラ ダラマ キリク

御詠歌：夜もすがら 月を三室戸 わけゆけば 宇治の川瀬に 立つは白波

参詣日：令和元年10月6日、令和5年1月24日



補遺 三十三間堂（京都東山）

西国観音霊場の札所にはなっていないが、三室戸寺の帰りに京都駅に戻った時にちょっと足を延ばして三十三間堂に行ってみた。

若い頃に7年間ほど京都西山に住んでいたのであるが、三十三間堂には行ったことがなかった。住んでいたアパートが阪急電車の沿線にあったので、買い物などで京都中心街に出かけるのも大抵は四条通り近辺が多く、一度は三十三間堂を参観したいものと思っていたが、三十三間堂のある七条東山辺りには滅多に行く機会も無かった。

通称「三十三間堂」は正式には蓮華王院と呼ばれ、鳥辺山麓にあった後白河法皇庁の一角に平清盛が造進した観音堂である。現在は中尊を中心に合計1,001体の十一面千手千眼観世音菩薩像、また、最前列には風神雷神像、観音二十八部衆像が展示されていてそれは壮観なものだった（全て国宝）。これだけの数の国宝の仏像が一堂に祀られた荘厳さに圧倒された。特に風神雷神像には圧倒的な迫力があつた。また、観音像は全て等身大の十一面千手千眼観音菩薩像で、よくもこれだけの数の同じ仏像を集めたものよと感心させられた。

昼間のしかも参拝客が多い時はさておき、夕暮れ時などの参拝者が居なくなった時の堂内は静謐を越して畏怖の異境となるであろうと思われた。



（三十三間堂の堂宇と内陣の様子。次頁の仏像写真も含めて何れも同寺HPから引用） —57—



(最上段中央に祀られている千手千眼観世音菩薩坐像)



(雷神)



(風神)



(二十八部衆 左：那羅延堅固、右：摩喉羅)

折角だからと御朱印を頂戴した。
当然の事ながら、これは西国観音霊場
33札所の御朱印ではなく、平安時代
に後白河上皇が定めたとされる「
洛陽三十三観音霊場札所」第十七
番札所としての御朱印である（右
上の印）。

寺号の記載箇所にかかれた文字
は達筆過ぎて読めないが、皆さん
は何と読まれるであろうか？

（小生の巡らないアタマを巡り廻
したところでは、この寺の正式寺
号「蓮華王院」と読んだが、さて、
当たっているかどうか）



第十一番 深雪山 上醍醐准胝堂（京都醍醐）



（上醍醐寺本尊「准胝観世音菩薩」が移転安置されている下醍醐寺観音堂）

西国観音霊場第11番札所は、本来は上醍醐寺の准胝堂であった。その准胝堂が平成20年の落雷火災により焼失したので、札所の本尊「准胝観世音菩薩」は下醍醐寺の観音堂に移転安置されている。よって現在の札所はこの下醍醐寺の観音堂で、参拝も納経もここで行われているので、態々上醍醐寺まで登らなくても下醍醐寺で用が足りる仕掛けとなっている。もっとも現在は、上醍醐寺は無住となり、全ての伽藍は閉扉されて下醍醐寺に合併され寺号も「醍醐寺」に統一されているので、これはこれで良いのかも知れない。

さて、醍醐寺といえば豊臣秀吉が一族郎党や女房等1,300名を引き連れて盛大な「醍醐の花見」を行った場所として有名で、京都屈指の大寺であり、往古から皇室、貴族、武家などとの関係が深かったらしい。

ナルホド、総門を出入りしている参拝者はご近所の檀家のオジサン・オバサン達ではなく、しかるべき上流階級の門徒の団体やどこぞのセレブの奥方然とした檀家などの“優良顧客”ばかりのようにお見受けした。

境内も広大で伽藍も国宝級の御堂が建ち並んでいるので、古刹大寺には相違ないだろうが、庶民が参る仏縁の寺とは言い難く、小生如き衆生には縁が無いようにお見受けした。

例えば、総門を潜るとすぐ左手にある固く閉じられた豪壮な「唐門」の佇まいは凡そ衆生を迎え入れる雰囲気ではなかった。金箔の菊の御紋が威圧的でさえあった。

また、霊場巡礼の場でお布施の額を云々するのははしたないことではあるが、入山料の野口英世1枚に加えて上醍醐寺への参拝は更に桐硬貨1枚を供奉しなければならないこと、三寶院庭園などその他の伽藍への参観料も別途それぞれ大枚が必要であることはこの寺のやりかたに何やら“阿弥陀の光も銭次第”という腹が見え隠れしているようで凡そ感心できなかったが、マ、斯様な雑念が浮かぶようでは未だ人間ができていないのかも知れない。



(固く閉じられた唐門、チョット寄り付き難い)

マ、伽藍や参道などの維持修繕費用も掛るであろうから、伽藍参拝や上醍醐寺への特別参詣料を別途喜捨するに吝かではないが、やはりここは参詣者が喜んで喜捨する心が起きるような志納の方法が必要なのではなかろうか。ご本尊さまも喜捨の無理強いは望まれるところではなかろう。

このことにも関係するが、5年ほど前の前回に巡拝した折には、前の札所である宇治の「三室戸寺」から志津川沿いの東海自然歩道沿いに西国古道を歩いて上醍醐寺へ抜けるコースを辿ったが、途中の集落で道を聞いた時に、“上醍醐寺迄はもうすぐではあるが、境内に入るハイキング道に柵が設置されて物理的に上醍醐寺に入ることはできなくなった。ご苦労様だが宇治駅まで引き返して下醍醐寺から登り直すしかない”とのことだった。

教えて下さった人の話では、柵が作られた表向きの理由はハイキングコースが土砂崩壊で通行が危険になったという理由らしいが、実は 上醍醐寺がある醍醐山へのハイキングコースは宇治からの人気ハイキングコースなので通行するハイカーが多く、彼等を下醍醐寺経由&上醍醐寺経由で醍醐山へ誘導して上記の入山料（通過料）を徴収する為ではなかったのかという噂が絶えなかったとのことであった。

他人の土地を通らせて頂くのであるから通行料を要求されれば応じるしかないが、徴収されるについても喜んで喜捨する気持ちが起きるような方法があるのではなかろうか。それが仏縁というものであり、衆生を済度される観音様の功德を生かす道ではないか。

このようなことは住職はじめ寺の関係者は重々ご承知の筈であろうが、今を時めいている大寺院では往々にしてお忘れになることなのかも知れない。

チョット苦言が過ぎた。本題に戻ろう。

上述のような訳で、この下醍醐寺の佇まいについてこれ以上記す気持ちは無いが、有名な太閤の「醍醐の花見」の画像だけ以下に補足しておきたい。

槍山といのは「醍醐の花見」が行われた醍醐寺の境内の小高い山であり、上醍醐寺へ登る参道の途中にあった。看板に拠ればこの花見が如何に豪壮なものであったかが分かる。





喜多川歌麿作「太閤五妻洛東遊観之図」)

扱て、肝心な西国観音霊場札所参拝の話題に戻ろう。

野口英世1枚と引き換えに貰った案内パンフレットには、この寺（下醍醐寺）が如何に往時の皇室、貴族と深く結びついていたかという寺歴が誇らしげに縷々と記載されているだけで、上醍醐寺のことや元来「上醍醐寺」が西国観音霊場第11番札所であった由緒などには全く触れられていないので、寺としては実入りが少ない（?!）西国観音霊場札所の件などは我関せずということかも知れないが、西国巡礼者にとってはここは下醍醐寺だけの参拝で安直に済まらずに、やはり醍醐寺の本家本元である醍醐山山頂の上醍醐寺境内まで徒歩2時間（往復3時間）の山道を登って巡拝することが本来であろう。

5年前の今回は上醍醐寺に登拝し、そのまま西国古道の山道を歩き続けて次の札所の岩

間寺へ詣でたが、今回も下醍醐寺から上醍醐寺への登り口にある“関所” 女人堂で関銭を払い登り始めたが、昨日大津の札所 3 寺を急ぎ歩き巡って足がパンパンになっていたためか、半分ほど登った道半ばでダウン、仕方なく重くなって動かなくなった足を引き摺って引き返すというみっともないことに相成った。我ながら不甲斐なくて涙が出てくる。

ところで、この上醍醐寺の本尊「准胝観世音菩薩」を本尊とする札所は、全国観音霊場百札所の中では、秩父 5 番「語歌堂」とこの上醍醐寺の 2 寺のみ。坂東 33 札所には無い珍しい観世音菩薩である。

准胝観世音菩薩は、悟りを開き病氣平癒、子授け、安産などの現世利益をもたらす。六道の闇夜では人間界を導く仏母とも言われ、一説にはヒンドゥー教のシバ神の女妃ドゥルガーの化身とも。このドゥルガーは日本にも渡来して九尾の尻尾を持つ妖狐となり、妖艶な傾城「玉藻前」に化けて往時の名君達の人心を色で迷わせた妖怪であるとも言われている。准胝観世音菩薩の理知的なご尊顔とは裏腹に、あな、恐ろしや、恐ろしや。

上醍醐寺の本尊・准胝観世音菩薩は秘仏で年一回 5 月の一週間だけ法要で開帳される。



(歌川国貞作「安倍泰成調伏妖怪図 玉藻前」)



(下醍醐寺観音堂の開帳法要。同寺 HP から引用)



(上醍醐寺 准胝観世音菩薩御影)

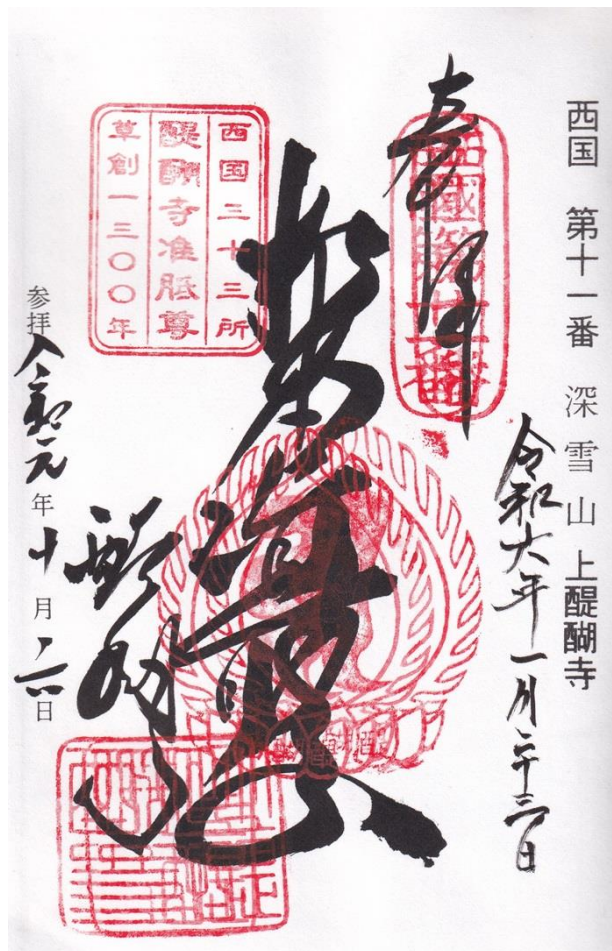
[第 11 番札所 深雪山 上醍醐寺准胝堂]

本尊：准胝観世音菩薩

本尊真言：オン シャレイ ソレイ ソンデイ ソワカ

御詠歌：逆縁も もらさで救う 願なれば 准胝堂は たのもしきかな

参詣日：令和元年 10 月 6 日、令和 5 年 1 月 23 日



第十二番 岩間山 正法寺（岩間寺）（近江・大津）



（岩間寺本堂。周りには集落も民家も全くない山中の伽藍であったが、幽邃の気が満ちていた）

5年前の第1回目の巡礼の折に、このお寺には思い出があった。前項でも触れたが、第1回目の西国観音霊場巡礼は西国古道を徒歩で巡るのを基本としたので、この札所「岩間寺」には一つ前の札所である上醍醐寺から山を越え谷を渡って歩いて巡拝した。ここの西国古道は趣がある山坂道で、例えば途中にあった笠取という集落は山あいの鄙びた農山村であったが、日本の農山村の原型が未だ残っているような佇まいの集落でなかなか味があった。



（上醍醐寺から岩間寺への途中の笠取集落）

しかしながらその日は、もう一つ前の札所である宇治の「三室戸寺」から谷伝いの山越えで上醍醐寺の手前まで歩いて来て想定外の入山禁止柵に阻まれ、止む無く宇治に引き返して来て下醍醐寺経由で上醍醐寺迄登り返したというオマケが付いたので、この岩間寺への京都府側からの入山口である笠取集落に辿り着いた時にはもう足腰がフラフラの体とな

っていた。時刻も夕方近くになっていたのも、住職が麓から通いで務められているこの札所（無住）はそろそろ閉山時間になるのではないかと電話で確認してみたところ、女性の方（住職の奥様）が電話に出られて“今貴方が居られる場所からなら、なんとか閉門時刻にギリギリで間に合うと思うので元気を出して歩いて来て下さい。お着きになるまでお待ちしています”という返事だった。時計を見ると、閉門時刻までは残り1時間弱しかなかった。入山口からお寺がある岩間山を見上げると、どこまでも急斜面が続いているようで、あの急坂を上るのかと思うと気が滅入ったがここはただ黙々と登るしかなかった。

かなりの時間を歩いたような気がしたが、寺はなかなか現れなかった。やっと急傾斜が終わって平坦な場所に出た所が境内であったが、既に夕闇が迫っていた。境内が広くて本堂を探すのに手間取り、何とか本堂に辿り着いた時には辺りは真っ暗闇となっていて、本堂の灯りも消えていた。既に閉門されてご住職も下山された後だったかと落胆したが、念のために納経所のベルを押してみると、灯りが燈って窓口が開き「閉門を半時間ほど延ばしてお待ちしていたが来られなかったので、本堂も閉扉して下山しようとしていたところだった」と仰って態々本堂も開けて下さった。有難かった。これも仏縁。合掌。

参拝後石山方面に下るためにタクシーを呼びたいと尋ねたところ、「タクシーを呼んでも道が危険な林道の為にこの山寺には登って来てくれない。我々（ご住職と奥様）もこれから石山方面に下るので、麓のバス停まで乗せて行ってあげます」という有難いお言葉。山中の無人の寂しい山寺で一晩ビバークしなければならないかと覚悟していたが、助かった。仏縁に心から感謝申し上げて同乗させて頂いたのであった。

日本百観音霊場札所 100 ケ寺、四国遍路 88 ケ寺、同別格本山 20 ケ寺をそれぞれ2回、通算で合計 400 回ほど参拝したが、お寺のご住職に車で送って貰ったことはこの寺以外には坂東観音霊場の2寺（第33番結願寺「補陀落山那古寺」（千葉県館山市）、第10番「巖殿山正法寺」（埼玉県東松山市））だけだった。お寺のご住職が参詣者を送迎するようなことはまず無いから、このような仏縁は奇瑞というべきであろう。小生は信仰心も無く、前世の因縁も悪く、今世でも悪事の限りを尽くしてきたので、仏様から見れば極悪人であろうが、悪人にも等しく救いの手を差し伸べられるのが観世音菩薩さまでもあろうか。

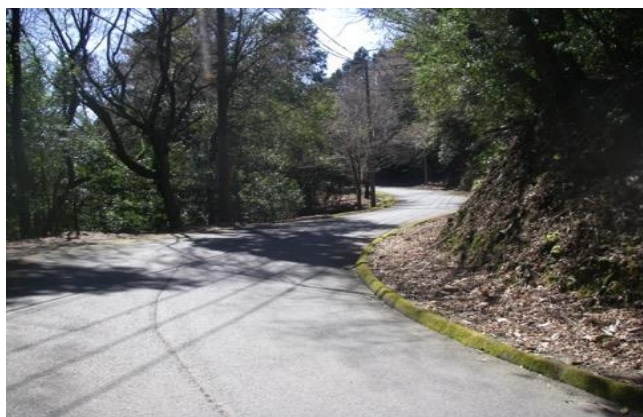
扨て、過去の前置き道草が長くなった。
5年前の第1回目の巡礼の折には一つ前の札所京都伏見の上醍醐寺から西国古道を歩いて来たが、足腰が弱くなった今回は大津側の入山口からの安直ハイキングコースを利用して往復した。湖南・大津にはこの札所を含めて西国観音霊場の札所が3ケ寺あるが（他の2寺は第13番石山寺、第14番三井寺）、先にすぐ手前の石山寺を参拝してから同寺山門前バス停から中千町というバス停まで10分間ほど路線バスに乗り、



（岩間寺の麓の長閑な田園風景。左の山が岩間山、左側の鉄塔のある辺りが岩間寺）

田園風景が広がる長閑な里道を登山口まで歩きそこからは林道（東海自然歩道）を岩間寺まで徒歩で往復したが、この林道歩きが曲者で、次に参拝を予定していた大津の三井寺の拝観時間迄に間に合うように急いで往復したこともあって、脚がパンパンになり、麓のバス停に帰り着いてベンチに座ったらへたり込んでしまって立ち上がれなくなる始末。

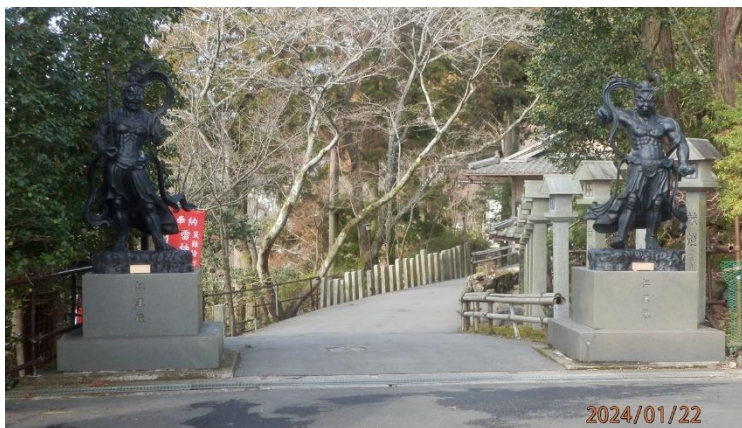
若者なら急げば往復1時間半というコースタイムらしいが、小生は3時間掛った。老化してからは、山道では標準タイムの1.5～2倍掛ることは今迄も経験上分かっていて特に気落ちすることでもなかったが、今回のような歩きやすい林道（しかも舗装された車道）でさえこの体たらくに落ち込んだことにはガックリと落ち込んでしまった。全く情けない。



（岩間山山麓大津側からの岩間寺への林道）



（林道から琵琶湖南畔・石山方面の眺望）



（やっと境内に登り着いた。露座の仁王像が迎えてくれた）



（本堂の観音堂）

岩間寺からの帰途は別な山道の奥宮神社経由で石山に下りたかったが、残念ながら斯様な我が脚では山道では二進も三進もいかなること必定であるから往路のアスファルト林道に戻った。

息切れと脚の笑いに苦しめられながら、何とか3分間のタッチ差で予定のバス便に間に合い、次の札所である大津の三井寺に向かった。

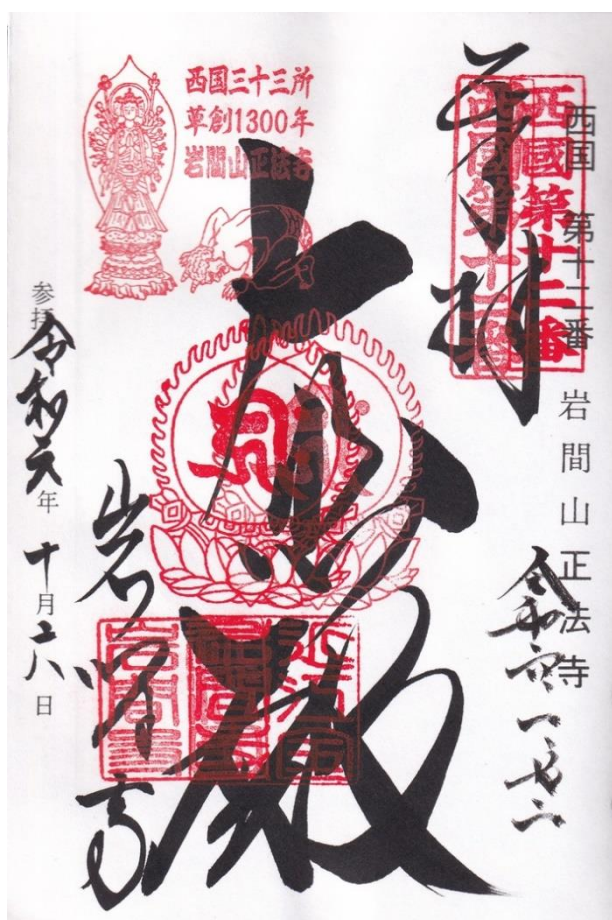
[第12番札所 岩間山 正法寺(岩間寺)]

本尊：千手観世音菩薩

本尊真言：オン バザラ タラマ キリク

御詠歌：水上は いずくなるらん 岩間寺 岸打つ波は 松風の音

参詣日：令和元年10月6日、令和6年1月22日



第十三番 石光山 石山寺（近江・大津）



（石山寺山門）

今回の第二回目の西国観音巡礼は発願した令和5年中に結願したかったのであるが、暇を持て余している瘋癲老人にも何やかやと野暮用もあって、大津・京都の6札所、大阪南摂の2札所、紀州和歌山の3札所、合計11札所が令和6年に持ち越しとなった。

これらの11札所は、大津では石山寺、岩間寺、三井寺、京都では伏見の上醍醐寺、東山の今熊野観音寺、宇治の三室戸寺、大阪南摂では葛井寺、施福寺、紀州では西国第一番札所「青岸渡寺」、二番「紀三井寺」、三番「粉河寺」である。

今回はほぼ逆打ちで廻っているので、南摂の2札所から紀州の3札所を最後に廻って第一番「青岸渡寺」で結願する計画であるので、とりあえず令和6年の新年事始めは初詣も兼ねて上記の大津・京都の6札所を2泊3日で廻ることとした。

ところが、この令和6年の始まりは、元旦の夕刻に能登半島で大地震が発生し、家屋倒壊に巻き込まれた死者2百名以上、安否不明者3百人以上、各所で土砂崩れによる道路寸断、ライフライン断絶という大災害となった。

また、翌日の正月2日には羽田空港を離陸しようとしていた海上保安庁機と着陸した日航機が衝突して双方炎上、満席状態の日航機の乗客乗員350人は炎上する旅客機から危機一髪脱出シュートで全員脱出して無事であったが、海上保安庁機の乗員は6名中5名死亡という悲惨な大事故となった。海保機は大地震発生の際に能登半島に緊急支援物資を送り届けるためのフライトだった。亡くなられた乗員のご冥福を心からお祈りする次第である。

更に、私的なことで恐縮であるが、正月松の内明けのすぐ、仲人もして頂いた大学のゼミの恩師が数え103歳で鬼籍に入られ、学生時代から60年間に亘って公私供共々親しくお世話になった恩師とのお別れもあって、何やかやと心が痛む年明けの巡礼始めとなった。

さて、この石山寺は琵琶湖湖南にある風光明媚な境内と、紫式部の故事で余りにも有名な古刹である。境内は琵琶湖から流れ出す瀬田川を見下ろす高台にあって、よく手入れされた植え込みと庭園の諸所には由緒ありそうな伽藍が沢山建っている。この寺の縁起や見所などについては世情よく知られているので割愛して今回はその主な風光だけを記したい。

この寺は、天然記念物の硅灰石という珍しい巨岩の上に建てられた伽藍で寺号もこの石山から名付けられたそうだ。国宝の多宝塔も見事なものだった。



(↑ 硅灰石の岩盤の境内、後ろは多宝塔)

(伝・頼朝寄進、本邦最古の多宝塔、国宝 ⇒)



境内の天辺には「月見亭」と呼ばれる懸崖造りの四阿があり、歌川廣重の近江八景「石山の秋月」にも描かれている有名な観月台だそうで、後白河法皇以下歴代の天皇の月見の玉座になっていたという。中天に掛った満月が瀬田川のせせらぎにも揺れ映って中秋の名月の情緒満点だったことであろう。

小生も一度でよいから死ぬる前の冥途の土産に、この月見亭に上って女御更衣をあまた侍らせて酌をさせつつ、脇息などに凭れてアッ〜とかウ〜ンとかノタマイながら月を眺めるなどという芸当をしてみたいものだ。



(石山寺からの瀬田川、奥は琵琶湖)

(←月見亭)



(安藤廣重筆 近江八景之内「石山秋月」)

この寺は京都に近いので平安時代の昔から朝廷や貴顕の石山詣が流行し、大奥の女房達の参詣も多く紫式部もその例に洩れずここに一週間ほど参籠した折に源氏物語の着想を得たと言う。そのことから境内には源氏物語や紫式部に纏わる記念碑などが沢山建っていた。



(↑ 境内にあった紫式部の像)

しかし、本堂の横の外陣に設えられていた「紫式部源氏の間」には、紫式部が机に向かって物を書いている珍奇な蠟人形が置かれていて、古色蒼然たる国宝の本堂には全く不似合いな珍奇なシロモノだったが、幸いな？

(次頁写真)。



(石山寺で瀬田川を見下す紫式部 歌川廣重筆)

とに現在は修理中とのことで展示されていなかった。

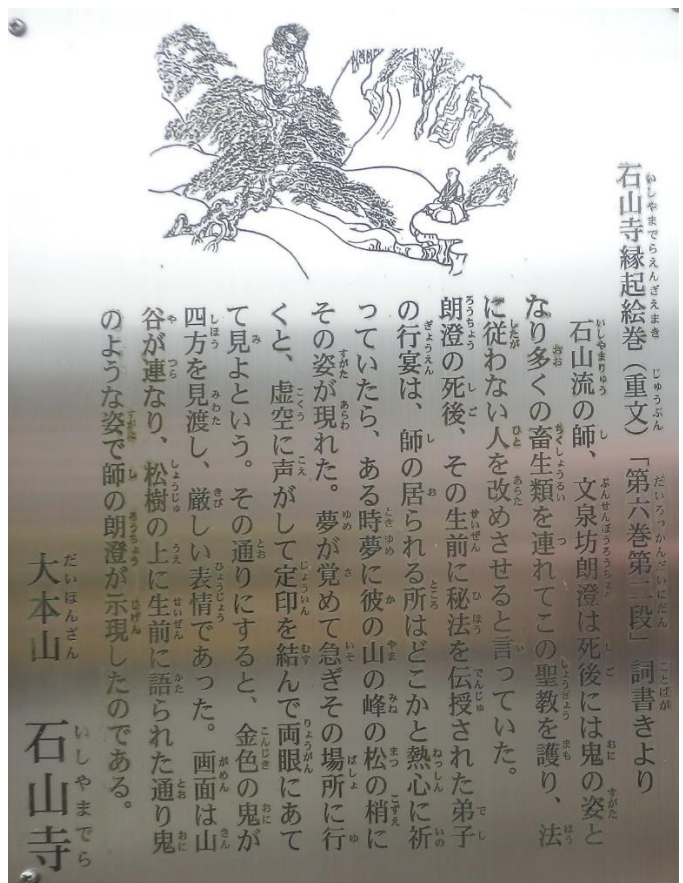


(「紫式部源氏の間」の珍奇な蠟人形)



(錦秋が見事な秋の頃の本堂、滋賀県最古の寺院建造物)

石山寺の山門右手には下のような石碑があった。この寺の中興の祖と称されている某大徳の顕彰碑だそう。姿形や顔の彫刻に味があって、ほのぼのとさせられた。



石山寺を参拝してから、山門前バス停から中千町というバス停まで10分ほどバスに乗り、次の札所「岩間寺」(岩間山正法寺)へ歩き始めたが、これは何とも苦行であった。

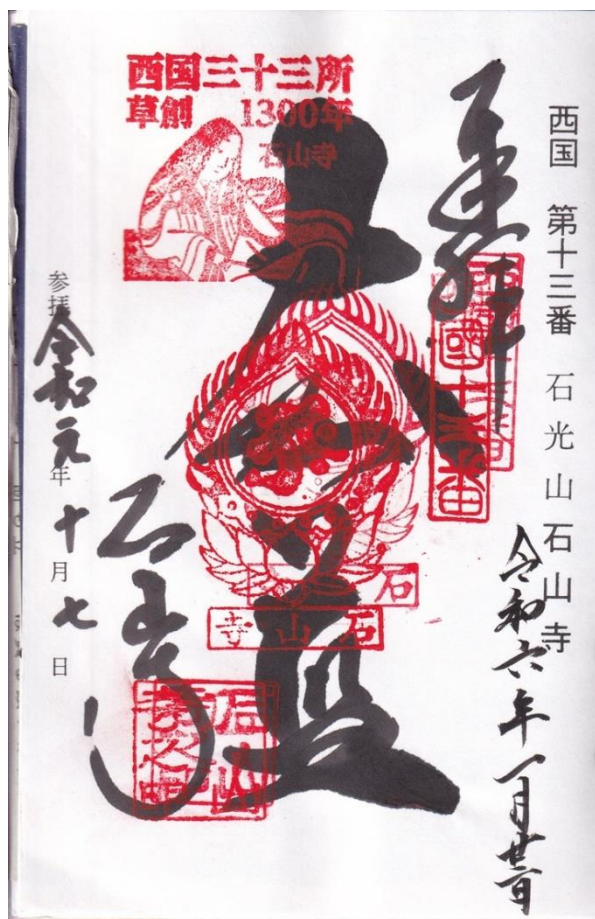
[第13番札所 石光山 石山寺]

本尊：如意輪観世音菩薩

本尊真言：オン バラダ ハンドメイ ウン

御詠歌：後の世を 願うところは かろくとも 仏の誓い 重き石山

参詣日：令和元年10月7日、令和6年1月22日



第十四番 長等山 園城寺（三井寺）（近江・大津）



（仁王門）

園城寺（通称・三井寺）は「三井の晩鐘」で有名な天台寺門宗総本山の古刹・大寺である。天台宗（叡山）は昔から山門派と寺門派に分裂しており、同じ天台でも延暦寺が前者、この三井寺が後者である。

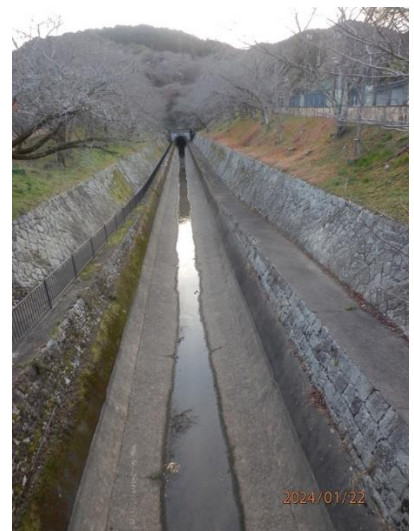
宗教本来の「^{まつりごと}祀治」がキナ臭い方の「^{まつりごと}政治」に悪用されるのは、今も昔も洋の東西を問わず同様で、^{くだん}件の事情も世に広く知られているように、天台宗は開祖最澄の後継を巡って直門と客分の二派の争いがあり、この時から延暦寺を山門、三井寺を寺門と称し、それぞれ僧兵を増やして天台宗は二分されてしまった。この後の延暦寺は園城寺のみならず南都の寺院とも争いを始め、また、御輿を担いで朝廷にも強訴を繰り返した。奈良・興福寺の僧兵も平安京で大暴れした。所謂僧兵の乱である。

このような由来から延暦寺と園城寺は本来は一体であったものが、長年にわたって闘争を繰り返し、それぞれ武装して焼き討ちなどの苛烈な戦いを繰り広げてきた経緯がある。因みに、この三井寺は東大寺・興福寺・延暦寺と共に「本朝四箇大寺（しかたいじ）」の一つに数えられ南都北嶺の一翼を担ってきた古刹である。

さて、余談はさておき、この寺の前に詣でた同じ大津の観音霊場「岩間寺」から石山駅に下山して京阪電車石山坂本線というローカルな路面電車でこの寺の最寄り駅「三井寺駅」に降り立った時は既に夕暮れが迫っていて寺の拝観時間も残り少なくなっていた。

駅からは琵琶湖疎水の傍を三井寺まで登って行った。琵琶湖疎水というのは、琵琶湖の水を上水や発電、水運の為に琵琶湖浜大津から京都に流すために構築された運河で

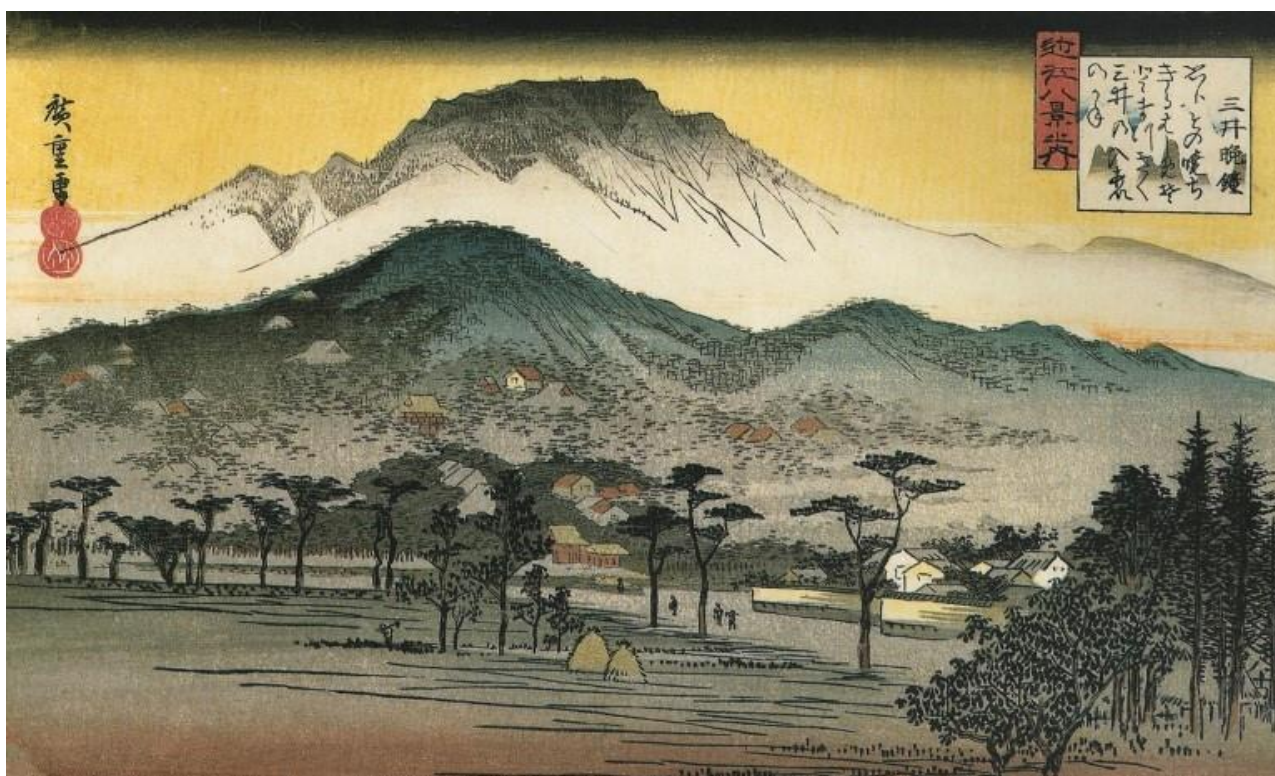
—75— （琵琶湖疎水の運河、今は水は枯れていた⇒）



あり、途中の山はトンネルで抜ける構造になっているが、未だ土木技術の発達していない頃の明治初期によくもこのような大工事が完成出来たものと感心させられた。

さて、この古刹の名所は何と言っても「三井の晩鐘」であろう。宇治の平等院、高雄の神護寺と共に日本三名鐘に数えられ、その荘厳な鐘の音が天下一品であると言われている。

小生も大枚ウン百両を志納して敲かせて頂き、名鐘の音を殷殷と大津の街に響かせたかったのであるが、誠に残念なことに閉門時刻が迫っていて参拝客の打鐘時間は終了した後だった。



(安藤廣重筆 近江八景之内「三井晩鐘」)

前回の5年前の巡礼の折は、秋霖の最中だったのでこの寺の伽藍参拝は三井の晩鐘を打ただけで参拝御免とし、雨合羽を着て寺の裏山から古関越の落ち葉の山道を越えて山科に下り、番外札所の「元慶寺」や東山「清水寺」まで徒歩で巡拝したが、今回も閉門時間が迫っていたために大急ぎで伽藍を巡拝しただけであった。

昼間に参拝すれば、陽光に輝く琵琶湖の漣や大津、瀬田、坂本の街並みなども眼下に望めたであろうが、残念ながらそれらの風光は夕闇に溶け込んでいた。以下、境内の写真を少々載せてお茶を濁すこととしたい。



(風格ある檜皮葺の金堂 国宝。閉門時刻が迫り参拝者は皆さん下山した後で誰も居なかった。伽藍の戸を閉めるガラガラという音が聞こえて来た。金堂の本尊は天智天皇持仏の弥勒菩薩。大きさは10 cmに満たないが、勅封の絶対秘仏なので厨子も塗り込められていて将来とも開帳されることは無い)



(こちらは観音堂。本尊は如意輪観世音菩薩、重文、秘仏。こちらも33年に1回しか開帳されない)



（観月舞台。満月の夜にでも能が演じられたのか？）



（衆生観音。右手を岩に突き、左手を立膝に置いて
いる姿は非常に珍しい形だそうな⇒）



（晴れている昼間なら境内から大津市街、琵琶湖が一望できる。右上に広がっているのが琵琶湖）

今晚は京都四条大宮に出て、ビジネスホテルに投宿した。安価であったが、交通至便、綺麗で清潔な宿であった（「ザ ワン ファイブ 京都四条」、シングル料金 5,150 円）。夜巡礼はホテル近くの裏路地にあった赤提灯「美味酒房 ちらん」。料理も大将ご夫妻のホスピタリティーもよかった。

[第 14 番札所 長等山 園城寺（三井寺）]

本尊：如意輪観世音菩薩

本尊真言：オン バラダ ハンドメイ ウン

御詠歌：いで入るや 波間の月を 三井寺の 鐘の響きに あくる湖

参詣日：令和元年 10 月 8 日、令和 6 年 1 月 22 日



第十五番 新那智山 今熊野観音寺（洛東）



（月輪の山並みを背にした今熊野観音寺の本堂。ここから奥は魍魎魍魎の異境）

この寺は紀州熊野在の寺が間違って山城ノ国に飛んできたのではないかと思わせる山号寺号であるが、縁起によれば、弘法大師がこの地を巡錫していた折に熊野権現に出会って観音像を託された。弘法大師は早速十一面観音像を刻みその胎内に観音像を納めて、一字を建立した。これが今熊野観音寺の始まりである。その後、熊野詣でを38回も行った後白河法皇がこの地に熊野権現を勧請して新熊野神社を建立、熊野詣でに行かれない庶民に渴迎されて栄えたという。新熊野神社の本地仏が今熊野観音寺の本尊だからである。

さて、この寺の隣にある同じく洛東の札所「音羽山清水寺」の大混雑・大雑踏に比べれば、この今熊野観音寺は気味悪いほどの静謐さであった。本通りから小さな赤い鳥居橋を渡ればそこはもう鬱蒼とした深山幽谷の別世界で、特に往時はこの辺りは鳥辺野の葬送の地であったから、有象無象の靈魂や悪霊・怨霊・魍魎魍魎が潜んでいるであろうと感じさせる不気味さもあった。



（今熊野観音寺に入境する今熊野鳥居橋）

そういえば、我が邦の怨霊の首領となった崇徳上皇、平将門、菅原道真などの怨霊達が集まって往時の朝廷を滅ぼすための作戦会議をやった場所もたしかこの今熊野ではなかったか。ここ鳥辺野の辺りは葬送の地だけあって淋しい所である。今でこそ大谷本廟などの巨大な霊園墓地として整備されているが、平安時代の昔は風葬で捨てられた庶民の死骸・白骨がごろごろしていた鬼気迫る山中だったであろう。

ただ、本堂の前には苔蒸した古色蒼然たる石仏が祀られていて、その顔には何やら心が安らぐような気持ちにならされた。名は無いが相当の腕の石工の鑿であろう。



さて、話は飛ぶが、一条帝の後だった中宮定子（ていし）の墓所「鳥戸野陵」もこの今熊野観音寺の裏山の葬送の地「鳥辺野」にある。定子は聡明な中宮で一条帝に寵愛されていたが、関白跡目争いを巡って藤原一族のすさまじい近親争いが起こり、藤原道長が勝って、その娘彰子が中宮に送り込まれ、道長と争った定子の出自である藤原道隆系は遠流、定子も中宮から退けられて19歳で尼になり悲涙のうちに25歳の儚い生涯を閉じた。

この定子に仕えていたのが清少納言で、彼女の実家もこの辺りの月輪と呼ばれる地にあり、晩年は彼女の実家があった月輪に隠棲して主人であった定子を供養しながら老後を送ったと伝わっている。因みに彰子に仕えたのが紫式部である。

清少納言が亡き中宮定子を偲んで詠った一首。

憂き身をば やるべき方もなきものを いづくと知りて いづる涙ぞ。

前回5年前にこの札所に詣でた折にもこの鳥戸野陵の中にある定子陵を拝観したかったのであるが、陵墓への道が分からず、また道を聞くような人通りも無く、辺り一面は鬼気迫るような寂しい場所でもあったので怖くなって退散したが、今回は事前に案内図で道を調べておいたので勇を鼓して訪ねてみた。

参道や鳥戸野御陵は鬱蒼とした樹叢が茂っていて、確かに鬼気迫るような雰囲気もあったが、御陵からは京都駅などの下界も見下ろせてのびやかな場所でもあった。（「鳥辺野」の中の一地域を「鳥戸野」と呼ぶ。何れも“とりべの”と読む）。

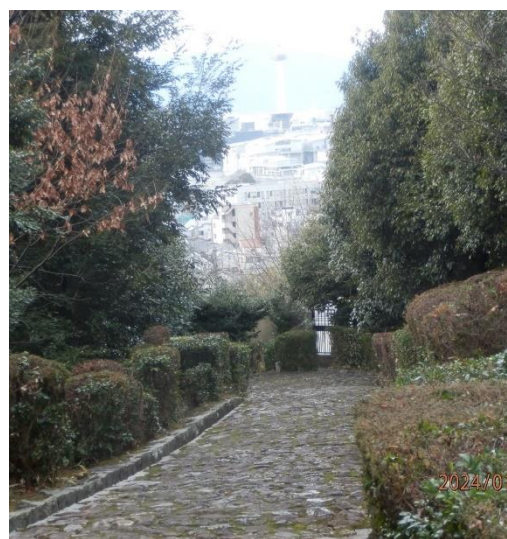
普通は滅多に行かない場所なので、今熊野観音寺に参拝された折には序に足を延ばされたら如何であろうか（今熊野観音寺から往復：歩 30 分）。



（鳥戸野陵への参道入口）



（宮内庁 鳥戸野陵）



（鳥戸野陵から京都駅方面を望む、
奥中央に霞む白い塔は京都タワー）



（鳥戸野陵に掛っていた宮内庁の陵札）

物の本によれば、清少納言の墓も月輪のこの辺りの何処かにある筈という説もあるが、種々調べてみたが分からなかった。今熊野観音寺のご親切な寺男氏が「隣の泉湧寺には清

少納言の歌碑が建っているよ」と教えて下さったので、尋ねてみた。確かに本堂の横にその碑は建っていたが、刻字は苔に埋もれていて小生の眼力では全く読めなかった。前頁に載せた中宮定子を偲んで詠った一首と思って拝んだ。下写真右側の標札には、薄れて見えかかっていたが「清少納言歌碑」と記されていた。そのすぐ左側の自然石が歌碑であった。



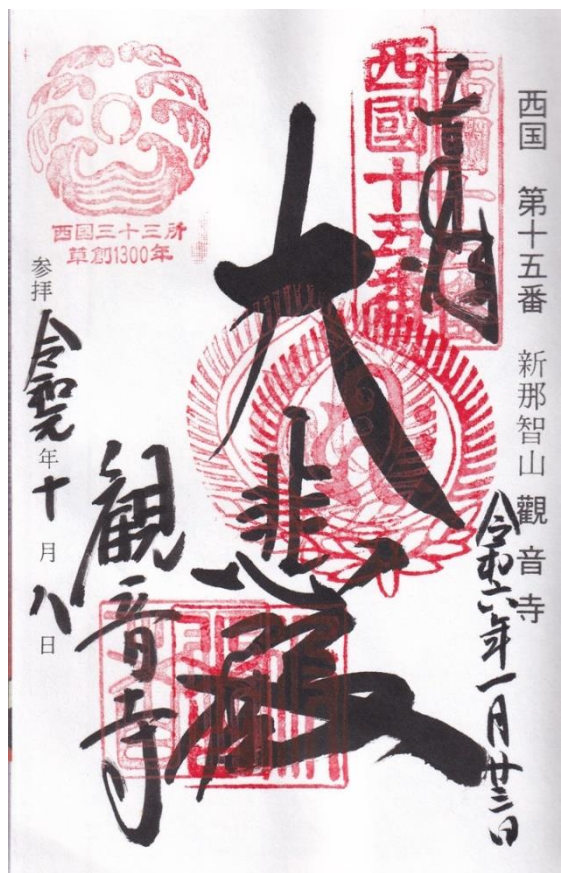
(隣の泉湧寺にある清少納言歌碑)

[第15番札所 新那智山 今熊野観音寺]

本尊：十一面観世音菩薩 本尊真言：オン マカ キャロニキャ ソワカ

御詠歌：昔より 立つとも知らぬ 今熊野 ほとけの誓い あらたなりけり

参詣日：令和元年10月8日、令和6年1月23日



第十六番 音羽山 清水寺（洛東）



2023 年 11 月に岡山県児島半島の鷺羽山であった大学研究室の同窓会の帰りの駄賃に京都で途中下車して、京都山科の番外札所・元慶寺、洛東の清水寺と六波羅蜜寺の 3 札所を巡ってきた（行きの駄賃は琵琶湖竹生島に浮かぶ寶巖寺を参拝）。

懸崖造りの舞台で有名な清水寺は年間 5 百万人の人出で大繁盛だそう。私が巡拝した時も上の写真のような大混雑で境内もおちおち歩けなかった。インバウンドの海外観光ツアー客に加えて修学旅行の団体で境内も本堂も立錫の余地も無く、早々に退散した。

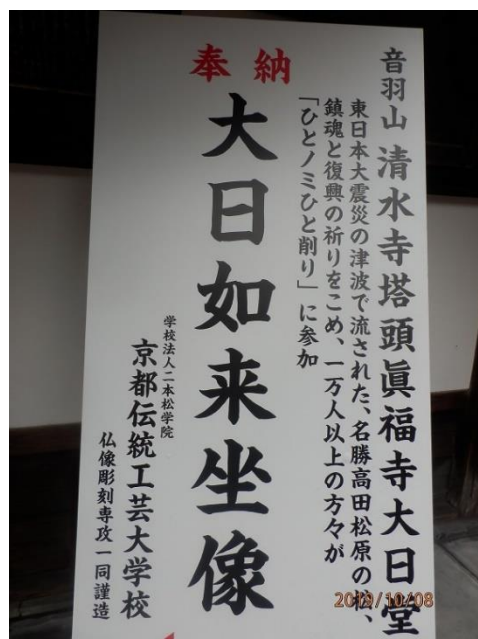


（手前の舞台も奥の舞台も観光客で大混雑）



（清水坂の参道もご覧のとおり人の行列）

境内の脇にあった塔頭の一寺（眞福寺）には、2011 年の東日本大震災の津波で流された名勝・高田松原の松に鎮魂と復興の祈りを込めて一万人以上の手で「一鑿一削り」で刻まれた大日如来座像が祀られていた。このような祀り方こそ仏への功德と慰霊への供養に叶う方法ではなかろうか。大寺・名利も金儲けばかりに走らずに少しはこのようなお手本を見習うべし。



清水寺は紅葉の名所にもなっているが、未だ少し早いようであった（右写真）。

清水寺を早々に退散後、人の行列で大混雑している清水坂を歩いて下って六道の辻から次の札所「六波羅蜜寺」へ廻った。



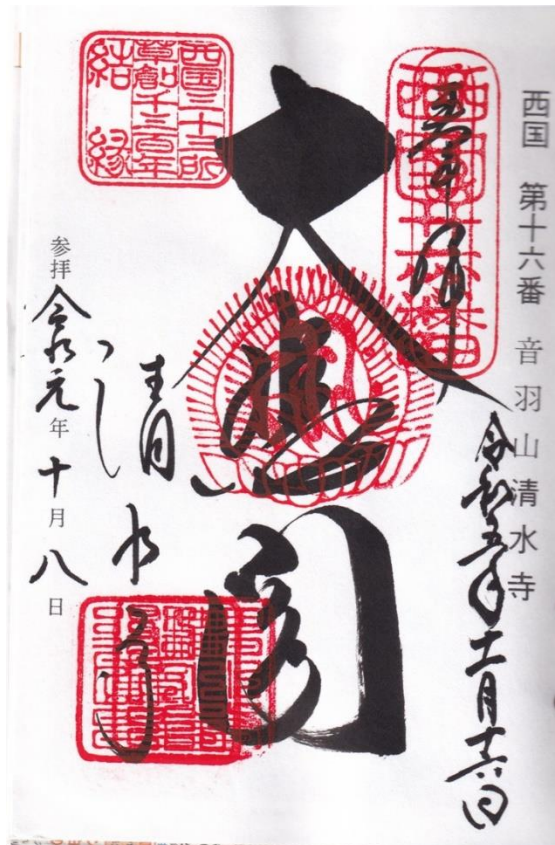
[第16番札所 音羽山 清水寺]

本尊：十一面千手千眼観世音菩薩

本尊真言：オン バラザ タラマ キリク

御詠歌：松風や 音羽の滝の 清水を 結ぶところは 涼しかるらん

参詣日：令和元年10月8日、令和5年11月16日



第十七番 補陀洛山 六波羅蜜寺（洛東）



六波羅と聞けば、鬼気迫る葬送の地「鳥辺野」の荒野や奢る勝者平家の根拠地、さらには滅びた平家の末裔を監視するための源氏の六波羅探題など暗くて陰気な場所を想像するのが普通であろう。また、六波羅の地には冥府に通じていると言われた「六道の辻」もあり、ここを境に東山側は葬送の冥界、西側は現世と考えられていて、古来から気味悪い場所とされていたのであろう。この六波羅蜜寺は、そのような場所に建立された。

この辺り六波羅の地は、元々京都の三葬送地のひとつ鴨川から鳥辺野の辺りにあり、往時は蕭殺たる野風の中に倒れた石塔や打ち捨てられた死骸の白骨髑髏が散乱している鬼気迫る荒野であった。また後には平家の根拠地にもなった。平家全盛の頃には、この辺りには平家一族の居館が5千以上も建ち並び、六波羅密寺も平家の庇護を得て栄えた。

平家が滅亡すると、鎌倉幕府の源頼朝はここに六波羅探題を置いて朝廷や貴族、京の庶民などを監視したために、六波羅という地名には何となく怖くて気味悪いイメージが付き纏う。しかし、元来、仏法の教義では「波羅蜜」というのは「悟りを開く方法」という意味であり、「六波羅蜜」というのはそのために修行すべき六つの実践、即ち檀・戒・忍辱・進・禅・智である。この六つを纏めたものを「般若」といい、これをお経で解いたものが般若（波羅蜜多）心経である。この寺の名前の由来もこの辺にあるのではなかろうか（註：檀＝旦那の布施、戒＝戒律、忍辱＝忍耐、進：精進、禅＝瞑想、知＝これらの総和）。

この寺は、念仏聖・市の聖として庶民から敬慕された空也上人の創建である。天歷年間、京に流行した疫病により日ごと夥しい死者が鳥辺野に運び捨てられて行くのを憐み、空也上人は一体の十一面観音像を刻んで死者の冥福を祈るとともに、この仏像を手押し車に載せて市中に牽き出して多くの人々に結縁させた。また梅干しと昆布で邪気払いの茶を沸かして病人に飲ませ、不安に塗り潰されていた民衆の心を念仏踊りで救って廻ったのである。

さて、六波羅は洛中から洛東に出た境の東山山麓にある。今では、付近の路地には小さなお寺や地蔵堂やこまごまとした商店やら内職店やら町工場などがゴチャゴチャと並ぶ庶民の町の一角となっていた。

同じゴチャゴチャとした下町でも洛中の札所には、六角堂及び革堂（札所番付では次の2札所）があり、これらの寺がご近所の庶民日常の詣り寺であるのに比べると、この六波羅蜜寺は別格霊場の如きやや孤高の雰囲気を感じられるが、この古刹の開山である空也上人が醍醐天皇の皇子であったという朝廷の出自に因るのであろうか。

狭い境内には下のような石仏もあった。何の仏様かは知らないがなかなか趣のある鑿ではないか。台座に「六波羅堂」と刻まれていたので、きっと由緒のある仏様ではなかろうか。また、境内には平清盛の塚と称する塚塔と平景清の愛人で五条坂の遊女であった阿古屋の塚と称する塚塔が並んで祀られていたが、塔も鞘堂も清盛のものよりも阿古屋の方が大きいのが泣かせる。



（空也上人立像。口で唱えた“南無阿弥陀仏”の称名が六体の阿弥陀仏となって口から顫れている。
同寺HPから引用）



（平清盛と阿古屋の塚塔。左＝清盛、右：阿古屋）

境内の宝物館（令和館）には空也上人立像はじめ、平安・鎌倉期の貴重な仏像が展示されているので、時間がある方は拝観されたら如何であろうか。

平清盛の像も安置されていたが、経巻を手にしたその姿は悪党だったという世評が専らの清盛の傲慢さは無く、仏者としての気品に満ちた姿だったのに驚かされた（右写真。同寺HPから引用）。



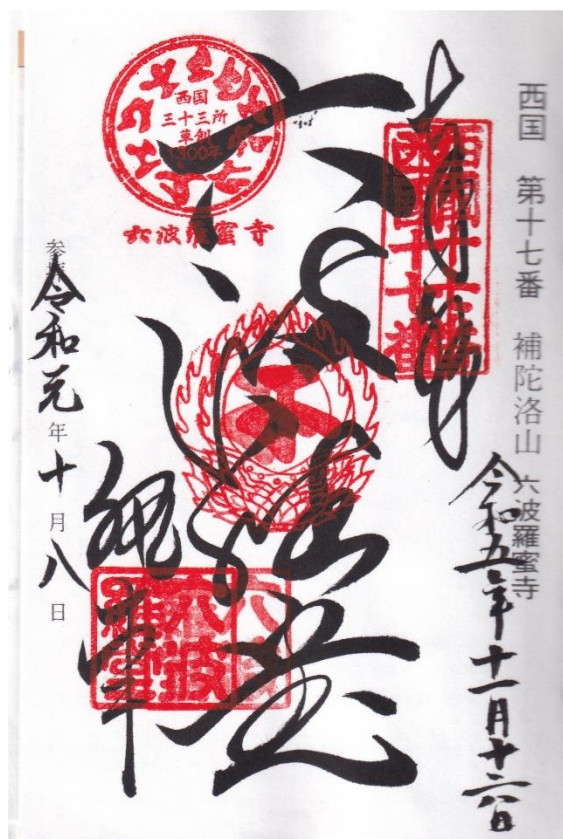
[第17番札所 補陀洛山 六波羅蜜寺]

本尊：十一面観世音菩薩

本尊真言：オン マカ キャロニキャ ソワカ

御詠歌：重くとも 五つの罪は よもあらし 六波羅堂へ 参る身なれば

参詣日：令和元年10月8日、令和5年11月16日



第十八番 紫雲山 頂法寺（六角堂）（洛中）



六角堂は京都市役所近くの街中のビルに囲まれた谷間の一角に埋っていた。隣接する大きなビルは華道家元池坊の本部だそう。寺の由緒によれば、聖徳太子が念持仏をこの寺に安置し、小野妹子に毎日花を供えるように命じたので、高級官僚（遣隋使）でもあった小野妹子は一方では華祖と呼ばれ、池坊華道の開祖となった。その縁で、今でもこの六角堂の住職は代々池坊の家元が務める慣いだそう。

また、境内には「へそ石」という六角形の礎石が置かれていた。由緒書きによれば、桓武帝が都を平安京に遷都した時、都大路の真ん中にこの六角堂が蟠踞していて都市計画の邪魔になっていて帝も頭を悩ませていたが、尊い観音菩薩を勝手に移動させる訳にもいかずその処置に弱っていたところ、濃霧が垂れ込めたある夜六角堂は自分で数十メートル路傍に移動し、後にはこの礎石だけが残っていたのだという。京都の町人はこの礎石を京の中心として崇拝しているのだそう。現在でも京都の町の中心は「洛中」であり、洛中の中でもこの六角堂境界が更に洛中の真ん中とされている。



（へそ石）

狭い境内には、用事が有りそうで無さそうなお近所の老夫婦やらお詣り組やら、ちょっと線香を上げに門を潜ったという風情の通行人やら、何かオモロイことは無いかと入ってきたようなアベックなど、気取らない庶民の寺の風情が誠に結構であった。次の札所の第

19 番「行願寺」（革堂）と共に、この二寺が洛中の庶民が日々お参りし、また井戸端会議や世間話に興ずることができる“おらが寺”であったのであろう。



（本堂の六角堂。右の大きなビルが池坊会館）



（境内隣のビルの高みから六角堂を見下ろす）



（六角堂 本堂。如何にも街中の庶民寺の風景が現れている）

因みに、華道家元の池坊という家名は、この六角堂の境内に池があり、その池の横に六角堂を管理する寺僧の小さな御堂があって、この御堂を池坊と呼んだが、聖徳太子の念持仏に花を供えるように命じられた小野妹子もこの池から水を汲んで供えた故事に因って、池坊と呼ばれるようになったと考えられる。

(朱色の御堂が池坊、
左側に白鳥が泳ぐ池泉⇒)



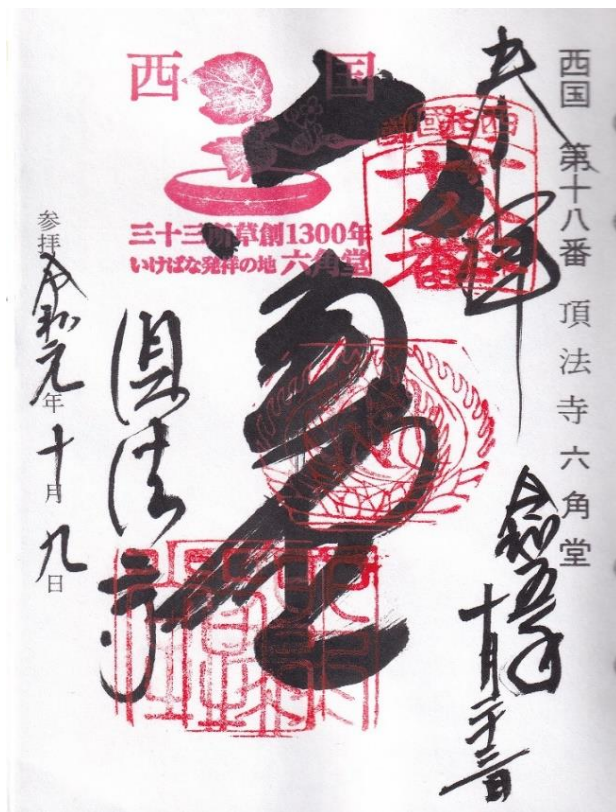
[第18番札所 紫雲山 頂法寺(六角堂)]

本尊：如意輪観世音菩薩

本尊真言：オン バラダ ハンドメイ
ウン

御詠歌：わが思う 心のうちは 六の角
ただ円かれと 祈るなりけり

参詣日：令和元年10月9日、
令和5年10月23日



(六角堂 外陣)



第十九番 ^{れいゆうざん} 霊麁山 ^{こうどう} 行願寺 (革堂) (洛中)



この札所は京都御所に近い街中の町家の通りに面していた。「革堂」(こうどう)とは珍しい寺名であるが、下記のような縁起があるそうだ。

昔々、ある若い獵師が射た子持ちの雌鹿から子鹿が生まれたのを見て殺生を悔い仏門に入った。死んだその母鹿の鹿皮にお経を書いて身に纏い衆生の救済に尽くしたので、いつしか人々は革聖と呼ぶようになり、革聖が建立した御堂を革堂と呼ぶようになったという。

革堂は衆生がお詣りする町堂として繁盛したそうで、ナルホド、今でもご近所のオバサンやオジサンが買い物や犬の散歩の序に気軽に立ち寄るような雰囲気のある寺であった。

^{れいゆうざん} ^{こうどう}
[第 19 番札所 霊麁山 行願寺 (革堂)]

本尊：千手観世音菩薩

本尊真言：オン バサラ タラマ キリク

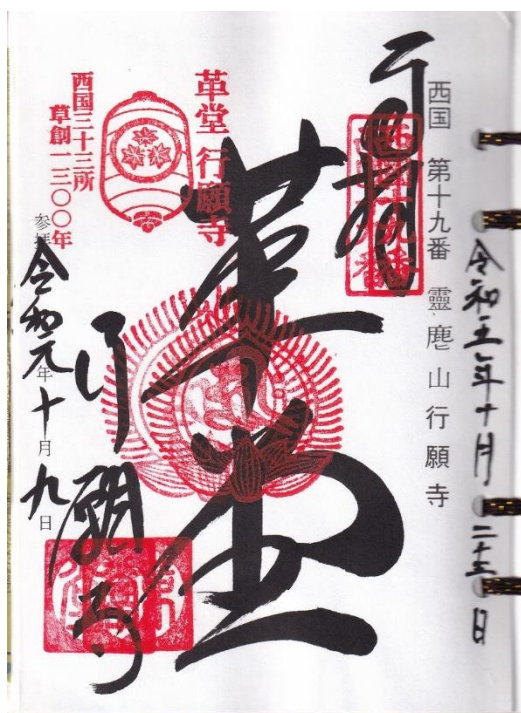
御詠歌：花を見て いまは望みも 革堂の 庭の千草も 盛りなるらん

参詣日：令和元年 10 月 9 日、令和 5 年 10 月 23 日



（立て込んだ町家の中の狭い境内にしては風格のある本堂。

外陣の天井を彩る 171 面の花鳥の透かし彫りも見所のひとつ）



（右標柱⇒）山門の横に建てられていた標柱。「一条 かうだう」。
写真では「一条」の「一」が飛んでいるが、昔は草堂が平安京
左京北辺の一条油小路に有ったことから一条が冠せられていた。
銘によれば慶応 3 年建立。刻字の字体に味があった。



第二十番 西山 ^{よしみねでら} 善峯寺 (洛西)



(豪壮な山門)

京都の洛西には「西山三山」と言われる古刹が三寺ある。京都市西京区大原野の「善峯寺」、京都府乙訓郡長岡町（現長岡京市）の西山浄土宗総本山「光明寺」と「楊谷寺」（柳谷観音）である。この3寺は洛中にある寺ではないのでポピュラーではないが、街中から見れば鄙の地にあるにも関わらず、知る人ぞ知るの庶民寺でもある。

実は小生は、既に半世紀以上も前のことになるが、所帯を持って初めて住んだのがこの光明寺の門前にあった安アパートで、ここで子供も生まれ6年間ほど住んだ場所であったので、これらの3寺にはハイキングがてらよくお参りしたものだ。この辺りは大原野と言われる洛西丘陵の麓で、のどかな田園地帯であった（次ページ写真）。

夏にはアパートの裏の光明寺の涼しい風が吹き抜ける広い本堂に子供を寝かせて貰って消暑昼寝をさせて頂いた。このお寺は法然上人の故地であり、今では洛外の紅葉の一大観光名所として大繁盛しているが、当時は近所の人々はゴザを持参して各自勝手に本堂に上がり込んで自由にヒルネなどをした庶民の寺であった。

間もなく東京に転勤したのでこの界限に行くことも無くなったが、定年退職して時間の余裕ができてからは、西下する機会を捕まえてちょくちょくこの界限に立ち寄って昔を偲んだものだった。

なだらかな西山の麓に広がる大原野は古くからの歴史を持つ里である。桓武帝の長岡京遷都にあたり、藤原氏出身の皇后が春日大社（奈良）への参拝が不便になるため春日大社の分霊を祀ったという「大原野神社」や、西行ゆかりの花の寺「勝持寺」、今昔物語にも描かれる山寺の「金蔵寺」、在原業平伝説が伝えられる「十輪寺」などが長閑な山裾に点在している。



（洛西・大原野の稲刈りが済んだ長閑な田園風景。奥の山稜の左鞍部辺りの中腹に本項の善峯寺がある）

また、楊谷寺は、日本で最初に花手水を活けた寺として、花のシーズンになればこの花手水を見に観光バスでツアー客が押し掛けるそうだ。



（楊谷寺の花手水）

さて、前置きが長くなったが、本論に戻ろう。コロナ禍で中断されていた大学のサークル(ESS)の同窓会が5年ぶりに京都嵐山で開催されたのを機に、この善峯寺や亀岡の穴太寺、洛中、奈良飛鳥の諸寺などの6札所を巡ってきた。

ここ善峯寺には同窓会の2日目の行事の保津川下りが終わって嵐山で解散してから阪急電車で東向日町に行き、そこから1時間に1本運行している阪急バスで山門前まで行った。山門前のバス停から山門までの参道は急坂のヘアピンカーブの連続で息が切れて往生した。

この札所寺院は後鳥羽天皇、白河天皇、後花園天皇、後嵯峨天皇、後深草天皇など皇室の崇敬を受けて発展し、青蓮院門跡より多くの親王が住して、室町時代には僧坊52に及んだが、応仁の乱により大半の坊が焼失した。その後、江戸時代には徳川5代将軍綱吉の生母である桂昌院の寄進を得て伽藍が再建された。境内は綺麗に整備されているが、やや手が入り過ぎていて箱庭的になっているのが玉に瑕であって、やはり山寺は山寺風である方

が趣がある。マ、下界の洛中にはきらびやかな諸寺が沢山あるから、これらに劣らないように対抗して桂昌院からの寄進の贅を尽くしたのかもしれない。

特に主幹が地面を這っている推定樹齢600年と言われる五葉松の「遊龍の松」

(国天然記念物)は綺麗に剪定されていて龍が這う姿に整形されていたが、これは奇形に育てられた盆栽であって、本尊の観音様も目を背けておられるのではなかろうか。

歴史小説家の杉本苑子によれば、この寺は人工美による“箱庭”で、その贅沢さや気品は歴代皇室の庇護の基、西山宮としての寺格も上がったために齎されたものであり、あえぎ、苦しみ、血みどろ

になって今日を闘っている庶民の眼からすれば全て風化した死物であり、生命力を失ってしまった形骸に過ぎない。法灯の真の輝きを失った貴顕の別天地でしかない。見事な遊龍の松も、このようなモノが存在すること自体、この寺の貴族的性格の顕れであると手厳しい(杉本苑子『西国巡拝記』による)。

杉本苑子と同時代に同じく西国霊場を巡礼した随筆家の白洲正子も『西国巡礼』で、「(遊龍の松は)名木というよりも奇木といった方がふさわしい。こういうものは盆栽の化物みたいで、私は好かないが一種の名物には違いない」と書いている。私も全く同感である。

マ、それは兎も角として、この寺の境内からの眺望は素晴らしいものだった。山城の眺望が随一だそうで、なるほど、北は京都盆地の北端、北山から東山三十六峰の連嶺のうねり、中京区などの中央市街地、南は鳥羽伏見、淀川が流れる大阪平野まで一望であった。



(箱庭の極み“遊龍の松”)



バスで JR 向日町駅に下山し、翌日奈良明日香の岡寺、壺阪寺に巡拝するために近鉄電車で京都駅から奈良県明日香村に向かった。

飛鳥での今晚の宿は、岡寺門前の民宿「若葉」に泊まった。5年前の第一回参拝の折にも泊まったが、夫婦二人でやっておられる頗る応対の良い宿であった。

[第 20 番札所 西山 善峯寺]

本尊：千手観世音菩薩

本尊真言：オン バサラ

タラマ キリク

御詠歌：野をも過ぎ 山路に向かう

雨の空 善峯よりも

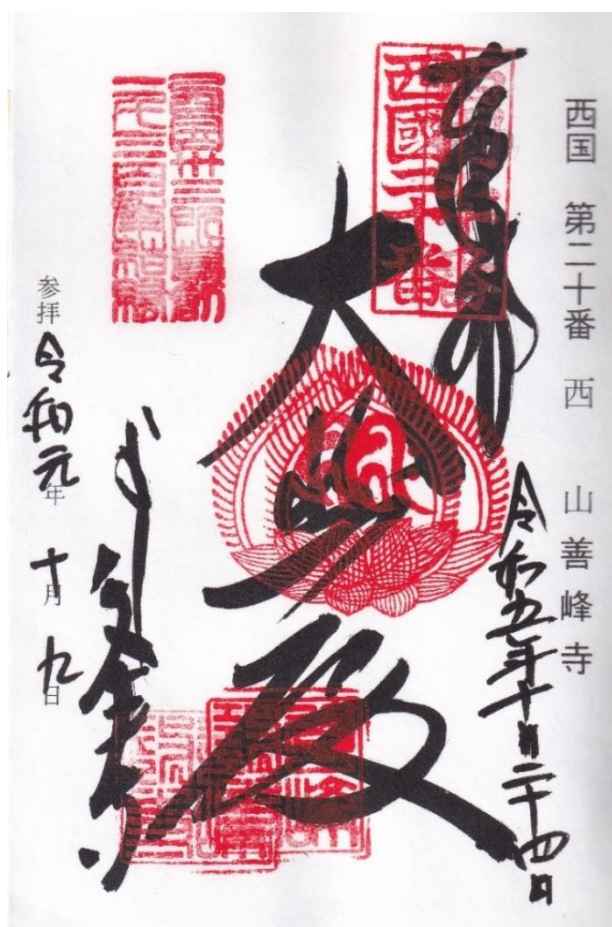
晴るる夕立

参詣日：令和元年 10 月 9 日、

令和 5 年 10 月 24 日



(善峯寺 本堂[観音堂])



第二十一番 菩提山 ^{あなおじ} 穴太寺（丹波亀岡）



5年前の前は、ひとつ前の札所である洛西の「善峯寺」から山を越えて徒歩で丹波のこの札所に参加したが、途中で道を失ったり、脚が音を上げたりして往生した。その距離 20 km、約 7 時間掛った。今回は大学時代のサークル同窓会で昨夜泊まった京都嵐山の宿（角倉了以の別邸を改装した旅館）を小生一人だけ早発ちして、今日の同窓会の予定行事である保津川下りの乗船場所である亀岡駅近くで所定時刻に皆さんに合流すべく山陰線の嵯峨嵐山駅から亀岡駅まで 10 分ほど電車に乗りそこから路線バスでこの札所を往復したので、歩く場面は殆ど無く開山時刻の午前 8 時前にはお寺に着いた。折から亀岡盆地には盆地特有の濃い朝霧が立ち込め、バス停からお寺迄の田圃の中の里道はこれぞまさに浄土門で謂うところの「二河白道」※ではないかと思わせるような一面の霧の中であった。

暫時山門で待っていたらお世話係の女性の方が入山され、境内や本堂の掃除を始められて境内に敷かれた石畳には塵一つ、落ち葉一枚落ちていなかった。煩惱に苦しみ続けている小生でも見ている心も洗われたような静謐な気持ちになった。

[註] ※「二河白道」：人が此岸から彼岸に渡る際に、火の河と水の河が並んで流れている真ん中に白い細い道が一本通っている。この白い道を最後まで辿れば極楽に行けると信じられている。浄土門ではこれを「二河白道」という。火の河は人の貪欲、水の河は人の怒りを表しているが、人が渡らねばならない白い道には火と水以外にも魑魅魍魎が襲い掛かって来て渡る人を苦しめる。しかし、釈迦と阿弥陀を一心に信じて念仏一筋に勤めて渡れば煩惱に塗れた凡夫でも極楽浄土に迎えられるという。参考までに、二河白道の様子を版画家・棟方志功画伯の画を借りて次ページに示しておく。左下が火の河、右上が水の河、その境目を白衣姿が渡っている所が白道である。



(棟方志功謹寫「二河白道」)

さて、この寺は亀岡随一の名刹だそうで、ナルホド境内の多宝塔は小ぶりながらバランスが取れた重厚な存在感を見せていたし、本坊書院の池泉築山式の石庭は京都府史跡に指定されている名庭で池泉の向こうに立つ多宝塔が見事な借景となっていた。しばし書院の廊下に座って庭を眺めさせて頂いた。ご近所のご老人が日課の朝のお参りに来ておられただけで他には参詣者は誰も居ない静かな境内に朝霧が流れていた。静かなものだった。



(書院の築山池泉 借景は多宝塔)



(小ぶりながら重厚な多宝塔)

本堂には涅槃姿の寢釈迦様（釈迦如来涅槃像、なで仏）が祀られていた。通例の釈迦涅槃像は大体が画像で、この寺に安置されているような等身大の彫像は珍しいのだそう。お顔は誠に円満で安らかな表情であった。小生は、アタマは出来過ぎるほど出来ているし、弱った足腰を今更撫でも始まらないので、白内障で最近とみに視力が弱ってきた眼の周りを撫でさせて頂いた。

岡部伊都子の『みほとけの対話』には、「・・・この御像は人目をしのぶ罪の意識もなく、心ゆくまで触れさせて貰いたいおおらかで慈悲に溢れた涅槃像である・・・」と書かれているそうだが、まさにそのような撫で仏であった。



（釈迦如来涅槃像）

さて、杉本苑子著『西国巡拝記』よれば、仏像や伽藍などを重文などに指定して貰えるように申請すれば、何某かの補助金も入り、保存管理も容易くなると学者や役所の人などがご住職に働きかけた際に、ご住職曰く「当寺は無檀、無縁の寺でございましてな、弟子坊主も寺男衆も居ません。観音様との二人連れで何もかも和尚がやっとります。毎日を気張ってやっとならば、無檀でも無縁でも、寺は自然と良うなると思ひます。仏像なども文化財に指定して貰えるように申請せよというご意見も聞いておりますが、早い話が「なで仏」の釈迦涅槃像でも文化財に指定されればお詣りの皆さんに撫でて頂けなくなります。これでは仏様とお詣りの衆生を繋ぐ縁がなくなります。ことほど左様に、お詣り下さった皆さんが心ゆくまで仏様とご一緒できるように仏縁をお手伝いするのがお寺や住職の役目と思っております。云々」。寺宝と称する何やかにやを煌びやかに並べ立て集客に忙しい札所霊場が多い中でこのご住職のご意見は誠に卓見であろう。

山門を出ると稲刈りが終わった田圃が一面に広がっていて、この穴太寺も抱き込んで丹波愛宕山の山並みに溶け込んでいた。誠にのんびりとした山里の風景であった。

バスで亀岡駅に戻り同窓会のメンバーと合流して舟で保津川を下った。この保津川下りはこの年の春に転覆事故を起こし船頭二人が亡くなった遭難事故があったばかりであったが、事故があった後だけに一層操船に注意するであろうからと安心して保津川下りを楽しんだ。保津川の狭い切り立った激流を右に左にと大岩を見事に避けながら下る舟下りは見事なものだった。船首2人、船尾1人で棹と櫓を操る船頭3人の操船技術は見事なものだった。亀岡市の無形文化財だそうな。大枚4,500円ナリを払った価値は十分あった。



丹波亀岡のその他の見所には、明智光秀の居城であった丹波亀山城址がある。廃藩置県後、所有者が転々と変わったという数寄な運命を辿った城址であるが（今は新興宗教の大本教の本部が置かれている）、亀岡駅の目の前であるので、電車の時間待ちにでも見学されたら如何であろうか。

保津川下りの終点嵐山で同窓会の皆さんと別れて、また観音霊場巡拝に戻り、京都西山の第20番「善峯寺」を巡拝してから近鉄で奈良飛鳥の岡寺門前町に走り、門前の民宿「若葉」に投宿した。5年前の第1回目の巡拝の折にも泊まったが、設備は古いながら対応の良い宿だった。翌日は岡寺、壺阪寺を巡拝して帰宅した。

[第20番札所 菩提山 穴太寺]

本尊：聖観世音菩薩

本尊真言：オン アロリキヤ ソワカ

御詠歌：かかる世に 生まれあう身の

あな憂やと 思わで頼め 十声一声

参詣日：令和元年10月10日、

令和5年10月24日



第二十二番 補陀洛山 総持寺（北摂）



（山門から本堂を見る。人物は同行の我が悪友）

第23番札所の箕面「勝尾寺」からの帰途、茨木市に立ち寄ってこの寺にも詣でた。茨木市街地のど真ん中にあるこの寺には境内の樹叢も無く札所の風情も無かったが、ご本尊が霊亀に乗った珍しい千手観世音菩薩であること（寺縁起）、開基が包丁道の祖であることから毎年4月の観音縁日には古式豊かな包丁式が披露されることくらいが特記事項であろうか。



（包丁式の様子 同寺HPから引用）

開山堂（庖丁式殿）

開山堂は総持寺を開いた中納言藤原山蔭卿を祀る。現在の開山堂は、旧堂が平成7年(1995)の阪神淡路大震災により被災後、平成18年(2006)に再建された。大阪府下では数少ない「懸け造」の建築である。

堂内に祀られる藤原山蔭卿の尊像は正保2年(1645)仙台藩主伊達公の寄進によるものである。

山蔭流庖丁式 毎年4月18日執行

総持寺開山・従三位中納言・藤原山蔭卿は総持寺本尊造立の時、仏師に千日の間毎日違う料理を饗し、「中納言の千日料理」として知られる。また光孝天皇の命により宮中料理の諸作法を整えたことから山蔭卿は庖丁道の祖とされ、庖丁の神、料理・飲食の神として全国の調理師から信仰を集めている。

藤原山蔭卿が庖丁道の祖であることから、当山では毎年四月十八日に、古式に則り「山蔭流庖丁式」が執り行われる。庖丁式は古来宴席において、当主が賓客を前にして、座敷に俎板を設え、料理して見せたことに由来する。現在「庖丁道山蔭流」を継承する全国の調理師により、山蔭卿の菩提所である総持寺に於いて、庖丁式が奉納されている。庖丁式には厳しい修業を重ねた調理師が臨み山蔭流免許の許し状が総持寺より授与されている。





(寺標も亀に乗っていた)



(山門)

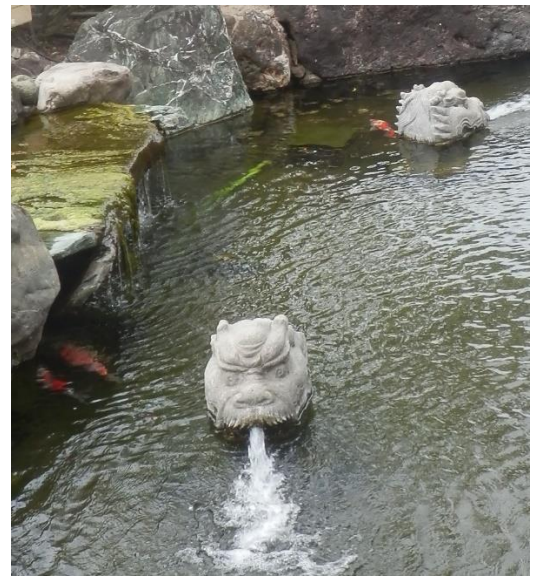
[第 22 番札所 補陀洛山 総持寺]

本尊：千手観世音菩薩

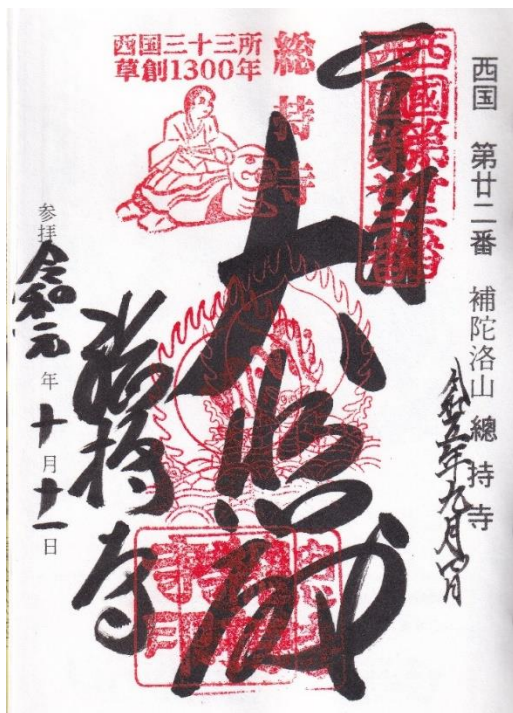
本尊真言：オン バラザ タラマ キリク

御詠歌：おしなべて 老いも若きも 総持寺の
ほとけの誓い 頼まぬはなし

参詣日：令和元年 10 月 11 日、令和 5 年 9 月 4 日



(境内の池泉で水を吐いていた像の頭部。
何の顔か分かりますか？)



第二十三番 応頂山 勝尾寺（北摂）



この寺は寺号に因んで勝運祈願（ダルマ祈願）で繁盛しているそうで、大阪駅から車で1時間ほどの箕面の山中にあるにも関わらず参拝客でごった返していたが、その殆どはコロナ禍緩和に伴うインバウンドのアジアからの観光客で、ダルマと一緒に写真撮影や国元へのお土産（転売？）目当てのダルマ購入が目的らしく、巡礼姿は殆ど居なかった。

山門を潜ると目の前が大きな泉池（弁天池？）になっていて、そこに掛かっている「清めの橋」を渡って境内に入る仕掛けになっている。この橋には人工霧が流れる仕掛けが設置されていて、なかなかの演出であった。秋には境内全山が紅葉一色に染まり、そこに霧が流れるという構図はこれはもう極楽浄土の世界である。第1回目に参拝した時は丁度紅葉の真っ盛りで池泉の上を霧が流れていて西方浄土はかくやと思われたが（右下写真）、今回は霧発生装置が故障していたのか霧は出ていなかった。

境内には勝ちダルマがそこら中に奉納されていて、その風景は些か異様に感じられたが、達磨に託した勝負祈願は商都大阪の慣習であろうから、マ、それはそれでよろしかろう。





(勝尾寺境内、池泉の石垣に並べられた小さなダルマにご注目)



(奉納ダルマ也大混雑)

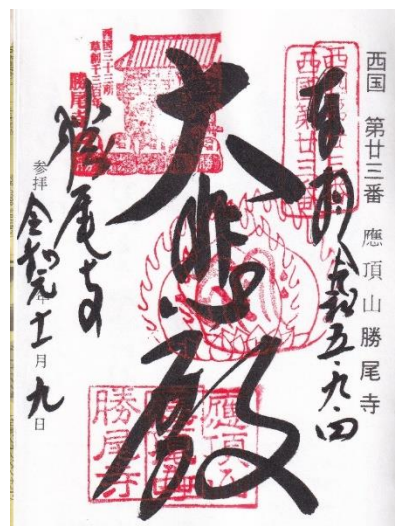
[第23番札所 応頂山 中山寺]

本尊：十一面千手観世音菩薩

本尊真言：オン マカ キヤロニカ ソワカ

御詠歌：重くとも 罪には法の 勝尾寺 ほとけを頼む 身こそやすけれ

参詣日：令和元年11月9日、令和5年9月4日



第二十四番 紫雲山 中山寺（播磨）

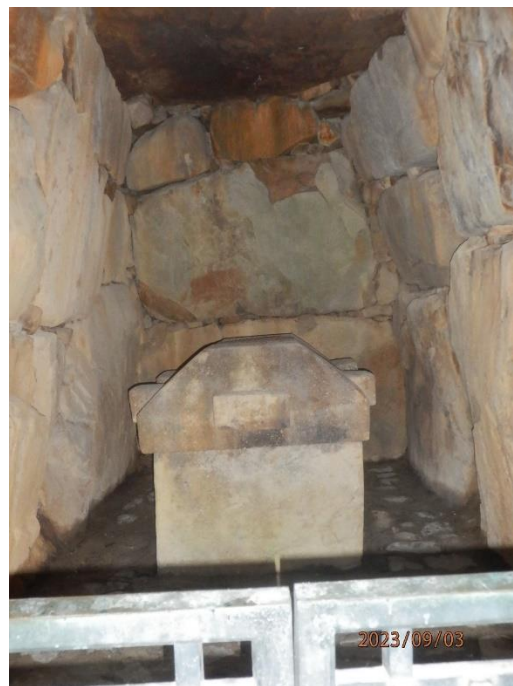


この寺は、聖徳太子が 1400 年程前に開いた日本最初の観音霊場と言われている。本尊は古代インドのアユジャ国王妃シュリーマーラー夫人（勝鬘夫人）をモデルにしたと伝えられている十一面観世音菩薩で、本邦の仏像には珍しい異国的な特異なお姿であるらしい（右写真。同寺HPから引用）。

インド・アール系系の御顔立ち、豊満な体、肉感的な腰のヒネリやしなやかな左手、優美な指の曲げ方、等々そのお姿を拝みたかったのであるが、秘仏厨子の奥深くお隠れになっていて叶わなかった。マ、ヘンな妄想を逞しくする輩にはおいそれとお姿をお見せにならないのであろう（毎月 18 日の観音縁日にだけ開帳）。



また、この寺は西国巡礼再興の舞台となった寺でもある。伝説によれば、西国巡礼開創の長谷寺の徳道上人の夢のお告げに閻魔大王が現れ、西国観音霊場巡礼の普及を図るようと霊場三十三所の宝印を授けられた。しかし、当時はなかなか思うように普及せず、困り果てた徳道上人はこの宝印を取りあえずこの中山寺の境内にある古墳の石棺に埋めて後世に託した。時代は過ぎて 270 年の後、西国観音霊場巡礼中興の祖となった花山法皇がこれを掘り出して巡礼を復活させたということになっている。



(境内にある古墳と石棺（石の櫃））

この石棺（石の櫃^{からと}）には実はもう一つの伝承があつて、悲劇の王妃第 14 代仲哀天皇の妃「大仲津媛」の陵墓と伝えられており、このことは古事記や日本書紀にも書かれているそうだ。その伝承は下記のようなものであった。やや煩瑣になるが、往時の宮廷の様子を生々しく伝える伝承なので以下に記す。

仲哀天皇と大仲津媛はいとこ同士の間柄で仲睦まじく王子も二人もうけていた。当時の朝廷内部には朝鮮半島の動乱に乗じて新羅ノ國を掠め取り、技術が進んでいた彼の国の武器や人を略奪する計画が進められていて、そのためには新羅の内情に明るい渡来民の豪族である「丹波ノ主家」の協力が欠かせなかった。仲哀天皇が丹波ノ主家から息長足娘^{おきながたらしひめ}を後に迎えさせられたのもこのための政略結婚であった。

朝廷内部は新羅侵攻派と穏健派に分裂して争うようになり、娘を后として入内させた息長足姫の父・息長宿祢が強大な勢力を持つようになり、仲哀天皇は息長宿祢によって謀殺され、その王子も一人は暗殺、もう一人は近江の琵琶湖畔に追い詰められて自殺し仲哀天皇一派は壊滅した。仲哀帝の後の后・足媛が自らも新羅に出陣した神功皇后である。因みに、神功皇后が新羅から九州に凱旋して産んだ男児が後の応神天皇である。

夫帝と二人の子息を一拳に失った悲劇の王妃大仲津媛がその後の孤独な生涯をどのように閉じたのかは不明であるが、聖徳太子が大仲津媛母子の冥福を祈ってこの地に建立した

慰霊の寺がこの中山寺であった。その後、聖徳太子の子息や孫が、息長宿禰の子孫の蘇我蝦夷、入鹿らに虐殺されて滅亡しているのも何かの巡り合わせかもしれない。

さて、この寺は聖徳太子創建の古刹というだけあって広大な境内に沢山の伽藍が建てられているのでどこを参拝すべきかに迷うが、上述の「石棺」以外に羅漢堂に安置された羅漢像も見ものである。言う迄もなく、羅漢というのは釈迦の弟子の中で最も位の高い高弟のことであるが、ここの羅漢堂には何と七百体もの羅漢が安置されている。

一般的に羅漢像は喜怒哀楽種々の表情を示していて見応えがあり、特に笑ったり皮肉ったりしているユーモアたっぷりの顔を見ているとこちらの心も愉しくなってくるというシロモノである。また、よく探すと自分や知り合いに似た顔が必ず見つかるそうだから、これらを探すのも一興であろうが、これだけ多くの羅漢像を並べられると眼も草臥れるし、アタマもオカシクなってきた。



(羅漢堂)



(貴方に似た羅漢、居ませんか?)

広大な伽藍に相応しく、朱に映えた多宝塔や鮮やかな紫紺に塗られた五重塔も壮大なものだった。



(鮮やかな朱が映える多宝塔)



(紫紺が美しい五重塔)

この寺は古来から子授け、安産祈願の寺であるから夫婦連れや家族連れの参拝者が多い。今日は9月に入ったばかりの未だ猛暑厳しい気温 37 度の日であったが、生まれたばかりのような嬰兒を抱いた七五三姿の若夫婦も大勢参っていたが、子供も親も熱中症にならないければ良いかと願うばかりであった。

幼児を抱いた若夫婦や妊婦のために、参道にはエレベーターやエスカレーターまで設置されているという念の入れ方であったが、年寄りにも大変有難かった。

また、宝塚市街地の真ん中にあり、阪急電車の最寄り駅から徒歩1分という交通至便な場所にある。マ、阪急電車はこの寺への参拝客を見込んで駅を作ったのであろう。門前町も大繁盛で、土産物屋、レストラン、仏具屋が軒を並べていた。

参拝後、ちょうど夕刻の良い時刻になったので、同行の例の西宮在住の悪友と西宮駅前の紅灯「安居酒屋どんがめ」で勝鬨夫人の十一面観世音菩薩に一献差し上げてそのお零れに与った。ビール生中一杯 198 円、腹一杯呑み喰いしても野口英世 2 枚でお釣りが来た。大変結構なお値段であったが、かような喜捨では果たして功德が積めるのかどうか？

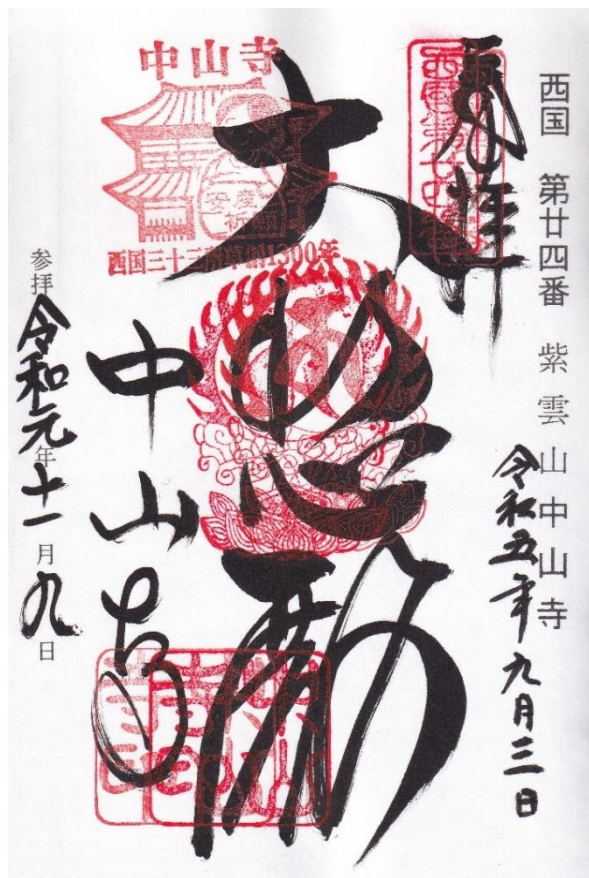
[第 24 番札所 紫雲山 中山寺]

本尊：十一面観世音菩薩

本尊真言：オン マカ キャロニカ ソワカ

御詠歌：野をもすぎ 里をもゆきて 中山の 寺へ参るは 後の世のため

参詣日：令和元年 11 月 9 日、令和 5 年 9 月 3 日



第二十五番 御嶽山 播州清水寺（播磨）



（昭和時代に再建された仁王門）

西国観音 33 霊場のうち、播州にある札所は東からこの第 25 番札所「播州清水寺」（兵庫県加東郡社町）、第 26 番札所「一乗寺」（同加西市）、第 27 番札所「圓教寺」（姫路市）の 3 ケ寺であるが、それまでの洛中・洛外や摂津の札所寺間の距離が比較的短いのに比べて、この播州の 3 ケ寺の寺間距離は数十キロあるから、ちょっと一絡げで回るといふ芸当はできない。おまけに、次の札所第 28 番「成相寺」（天橋立）は日本海沿岸にあり、同じ近畿地方でも瀬戸内海沿岸から日本海沿岸まで 120 キロほど離れている。しかも、南北縦断方向の鉄道は極めて便数の少ない路線であるから、マ、謂わば、この 3 ケ寺は播州という西国観音霊場の西の飛び地のような位置にある訳である。しかし、いずれの寺も人里離れた奥深い山中にポツンとあるという訳ではなく、山中ではあるが郊外の人里近い低山丘陵にあるので、鄙という感じはしない。しかし、どのお寺も境内は山中の深い樹叢に囲まれているので深山幽谷の気に満ちている。これで播州 3 札所の凡その様子を理解頂けたと思う。

扨て、その一番東側にある播州清水寺は、J R 福知山線で大阪駅から 1 時間の山間の駅「相野」からさらに 1 時間弱路線バスに乗車した終点のバス停にある。この路線バスが日に 2 本しか無いので公共交通機関利用の参拝者には大変に不便なお寺である。因みに、折

から梅雨明けの酷暑に見舞われ「用事のない人は外出自粛」の熱中症警戒アラートが全国に発令されていたこともあってか、参詣者には一人も会わなかった。

相野駅でバス待ち時間が1時間半ほどあったので、駅前の一膳飯屋で外気温 38 度の酷暑の喉をビールで潤した。5 人も入れば満員となるような小さな飯屋であったが、店主ご夫妻のホスピタリティーもサイコーであった。機会があれば寄って見られたし。「松尾亭」。

さて、この播州清水寺は縁起によれば、インドからの渡海僧法道仙人により 1,800 年も前に開かれたという。西国観音霊場 33 札所巡礼の開設が 1,300 年前であることを考えれば、この寺の開基はそれよりも 500 年も古い超古刹ということになる。伽藍の様子は、推古朝創建と伝わる根本中堂が古色蒼然たる貫録を見せている以外は他の御堂は近年の再建であるから明るくて暗さが無い。境内の参道には苔むした石垣が連なり、石垣の上の伽藍には鬱蒼と茂った樹林が陽光を遮っていて猛暑から逃れられた。



放生池の傍には平清盛の義母である池の禪尼によって創建（昭和時代に再建）された薬師堂があり、十二神将が祀られていたが、この十二神将は通例は勇ましい武将の姿であらせられるが、ここのそれは十二支になぞらえた人身獣頭のお姿になっておられた。

（薬師堂⇒）



因みに作者は東京芸大教授とのことである。拙者の干支の午の頭をした神将は珊底羅（さんてら）という神将であった。拙者に似て？、馬鹿の馬面であったのが愛嬌であった。



（薬師堂に祀られている人身獣頭の十二神将）

（↓干支が午の珊底羅神将）

石段を上った境内の最上部・御嶽山の頂上近くには多宝塔（大塔）の礎石だけが残っていたが、この多宝塔は平清盛の武運長久を祈念して祇園女御によって建立されたそうだが、以降度々の大火や山火事で焼け、最後には昭和 40 年の台風で倒壊、今は再建待ちとのことで礎石のみが残っていた。

「はじめに」の末尾でも触れたが、女流作家の杉本苑子の「西国巡拝記」にも、また白洲正子の「西国巡礼」にも多宝塔の上層から見た景色が聞きしに勝る絶品だったと書かれている。幾重にも重なる山なみの彼方に播磨灘が霞み、淡路島、小豆島、さらには四国の山々も浮かんでいる。東にはかすかに京都の東山まで眺められるそうだ、白洲正子の描写を借りると、「・・・塔の真っ暗な内部を怪しげな梯子を手探りで登って行くと、明り取りのような入口があつて、その扉がきしみながら開かれたとたん、私は思わず息を呑んだ。想像もつかないような景色が目前にあつた。・・・」

彼女たちが巡拝したのは多宝塔が台風で倒壊する少し前であつたからかような景色を見ることができたが、礎石だけが残っている現在では如何ともし難いのが残念である。

寺伝によれば、この寺は近在に住んでいた征夷大將軍坂上田村麻呂の熱い帰依を受けていたが、蝦夷を征伐して凱旋した坂上田村麻呂は武官として京都に駐在することになり、彼がこの播州清水寺を京都の似たような土地に勧請して作ったのが京都東山の清水寺である。晴れた折には播州清水寺から京都の清水寺が見えるという。現在では清水寺と言えば京都の方が有名になっているが、実は播州の方が本家本元であつて、そのような意味から言えば、京都東山の清水寺はここ播州清水寺の遥拝所、即ち播州清水寺は京都東山の清水寺の奥の院ということもできよう。



京都の清水寺はいつ行っても観光客で立錫の余地も無いほど大混雑していてゆっくり参拝できるような霊場ではなくなっているが、こちらの播州の方は参拝客も少ないので、広い境内をのんびりと逍遥・参拝できる。

因みに、京都の清水焼は、坂上田村麻呂が京都に移る折に連れて行った当地の立杭焼の陶工が京都東山で新たに開いた窯であるそう。播州清水寺の麓には、日本六古窯に数えられる伝統工芸・丹波焼の原型となった立杭窯があり、その一帯は丹波伝統工芸公園「立杭 陶の里」となっていて、焼き物に興味をお持ちの方々は巡拝の帰途立ち寄られればこれもまた仏縁となろう。最寄りのバス停が播州清水寺から姫路駅行の路線バスの途中にある。窯元や窯元横丁などもあり、観音様の仏縁で案外な掘り出し物に出会えるかも……。

書き忘れて末尾になったが、大講堂に祀られている札所本尊の十一面千手観世音菩薩は常にオープンになっている。住職の言「こちらの御本尊の観音様は見えるようにしています。三十三霊場の観音様をお参りされる方は、お厨子の扉も閉まってお前立ちもないのでは信仰としてはやはり心許ないでしょう。そこでご参拝の際には観音様の顔を一生懸命よく見ていただいて、それを心に映して信仰してくださいという願いを込めて、扉を閉めるのをやめて開けっ放しにしています」。

秘仏と称して厨子の扉を閉じているお寺が多い中で、これは誠に結構なことである。

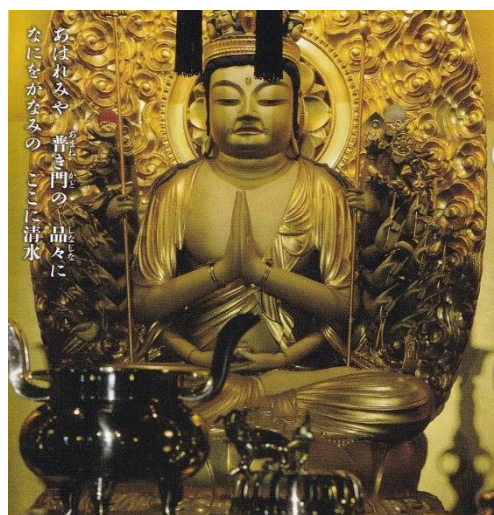
[第 25 番札所 御嶽山 播州清水寺]

本尊：十一面千手観世音菩薩

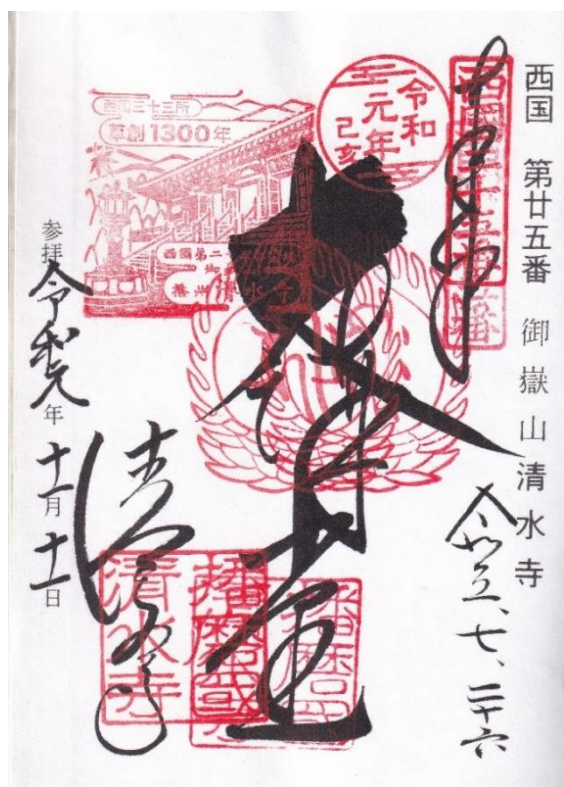
本尊真言：オン バサラ タラマ キリク

御詠歌：あはれみや 普き門の品々に
なにをか波の ここに清水

参詣日：令和元年 11 月 11 日、
令和 5 年 7 月 26 日



(札所本尊 引用出典：「西国三十三所をあるく」)



第二十六番 法華山 一乗寺（播磨）



（日本屈指の三重塔、国宝、平安時代末期建立）

この寺は播州丘陵の山中にあるが、姫路駅からの路線バスが門前まで入るのでアクセスが容易い。また、路線バスの便数も多いので便利である。第1回目の巡拝の折にはひとつ前の札所「第25番・播州清水寺」からの35キロを歩いたので2日間掛ったが、今回の2度目は姫路駅からのバスで40分程で着いた。バスは姫路郊外の田園丘陵地帯をノンビリと走ったので山の緑が身に染む心持であった。

昨日は上記の播州清水寺を詣でてから、西宮市に住んでいる学友の山本潔ちゃん宅に一宿一飯の恩義に与り、いつものように一献傾けながら「今の政府や国会議員は全くサッラン」と大所高所から国を憂えながえら盃を重ねたのであった（コレ、毎度のことナリ）。

彼も西国観音霊場を巡礼していて、未参拝の残る札所はこの一乗寺、次の札所の天橋立の成相寺、結願寺の華嚴寺（岐阜県揖斐川町）の3ヶ寺という段階まで攻め上げていたので、今回は前二者の札所を彼と同道で一泊二日で参拝することになった。

さて、この寺もひとつ前の札所・播州清水寺の開祖・インド僧法道仙人の開創であるから相当な古刹である。法道仙人はインドから紫雲に乗って飛んで来たという。この仙人の

持ち物は一体の仏像と仏舎利と鉄鉢のみ。腹が減ったらこの鉄鉢を飛ばして供養を乞うた
そう。或る時、瀬戸内海の高砂沖辺りを航海していた官米満載の船にこの鉢を飛ばして
「一飯、恵んでくれやあい～」と頼んだが、船頭は「積んでいる米俵は朝廷に納める税物
だ。一粒だってやれるものか」と取り合わなかった。

鉄鉢も為す術なく戻って来たが、何と驚くなかれ、積み荷の米俵が一俵残らず鉄鉢に付
いて来たそうで、驚いた船頭は胆を潰した。仙人は笑って全部の米俵を船に返してやった。
中に一俵だけ地面に落ちた俵があったが、その落ちた場所は稲が良く稔って豊かな村にな
ったという。兵庫県印南群^{よねだ}米墜村、今の^{よねだ}米田町だそう。思うに、この法道仙人という人
物は大陸からの渡来民族で、進んだ農業技術の指導や開墾、利水技術などをこの地方の農
民に教えて崇敬されていた人達ではなかろうか。

そのような由緒ある古刹であるから、懸崖造りの本堂をはじめ、常行堂、法論堂など境
内に点在している御堂も重文級が多いが、大抵は扉が閉まっているので本堂くらいしか参
拝できないが、平安時代末期建立の三重塔（国宝）は堂々とした古色豊かな風格のある伽
藍であった（ただし、入塔はできない）。

こんな山奥の寺に、絹本著色の傑作「聖徳太子及天台高僧像」（国宝）が伝わっているこ
とは、やはりこの寺の古い歴史と格式を物語るものであろう。



（絹本著色「聖徳太子及天台高僧図」 左：天台高僧像のうち伝教大師像、右：聖徳太子像）

（引用出典：同寺パンフレット）

境内の山道を少し登ると開山堂があった。人々の厚い信仰を得ていた開祖法道上人はこ
こに祀られていて度々開山堂で開帳されているそうだが、今は閉扉されていて拝顔できな
かった。広い境内の山隅にある御堂であるから寺人や参詣者の目も届かないので盗難防止

などの為にも平生は固く扉が閉められているのもやむを得ないことであろう。

樹木が茂った境内には至る所に石仏や石碑が並んでいて、それぞれ由緒ありそうな風格が感じられたが、刻まれた梵字や仏字が読めない小生にはそれらの由来は分からなかった。特に、参道入口に建っていた石造笠塔婆（鎌倉時代）は味があった。

参詣後バスで姫路駅に戻り、JR 播但線と京丹後鉄道を乗り継いで丹後の天橋立まで行ったが、瀬戸内海から日本海まで縦断した 5 時間の鈍行列車の旅となった。



（境内に散在する由緒ありそうな石仏群）

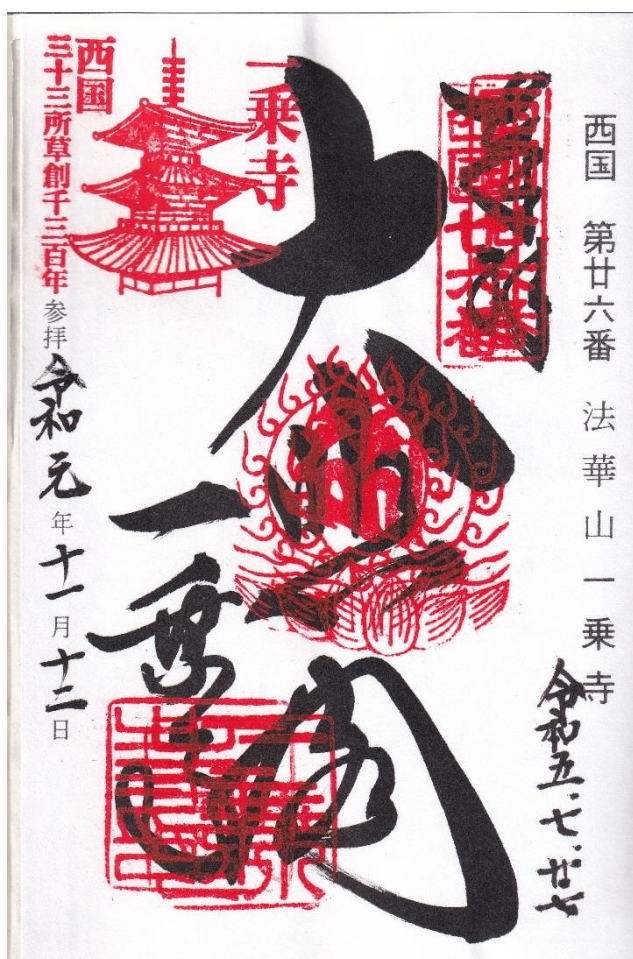
刻銘は、胎蔵界大日如来
の種字「アーク」。
その下側に「金輪聖王」
の刻。



種字「アーク」



（参道入口にあった味のある石造笠塔婆）



[第26番札所 法華山 一乗寺]

本尊：聖観世音菩薩

本尊真言：オン アロリキヤ ソワカ

御詠歌：春は花 夏は橘 秋は菊 いつも妙なる 法の華山

参詣日：令和元年11月12日、令和5年7月27日

第二十七番 書寫山 圓教寺（播磨）



（観音堂[摩尼殿]の豪壮な懸造り。上部は京都清水寺と同じく舞台造りの回廊になっている）

第 27 番「圓教寺」は、西国観音霊場 33 札所の最西端、姫路市北部の郊外にある。前回の第一回目の西国観音霊場巡礼の折は巡礼古道を忠実に辿って全て徒歩巡礼で巡ることを基本としたが、今回の二回目の巡礼は最早その体力無く最寄りの駅までは電車で行って、そこからは歩いたり路線バスを使うという安直スタイルとした。

姫路駅からバスで 30 分走ると書写山という標高 4 百ほどの山の麓に着く。この寺への参詣は、かつては六坂道と呼ばれた修験道を 2～3 時間ほど登って詣でたそうであるが、今はロープウェイが僅か 4 分間で運び上げてくれる。

この圓教寺は「西の比叡山」とも呼ばれ、西国 33 札所の中では奈良の興福寺、近江の三井寺とともにベスト 3 に数えられる古刹大寺である。往時は僧兵を 2～3 千人も抱えて権勢を誇ったという。なるほど、ナルホド、書写山の天辺まで広大な境内が拡がり、山や谷を越えた諸処に多くの伽藍が建っていた。老人の参拝者向けに境内を参詣シャトルバスが走っている。山麓から山門までの参道を登るシャトルバスが用意されている寺院はあるかも知れないが、日本広しと言えども境内を走り回るシャトルバスがある寺は珍しいのではあるまいか。

さて、この巨刹は境内も広く、伽藍も多いので見るべきものも多い。ゆっくり観れば一日仕事となるので年寄りには相当草臥れるが、マ、お布施 500 円也で一日中遊ばせて頂けると考えれば、これはもう天国ではなかろうか。

まずはロープウェイを降りて参道を暫く登ると展望ポイントがあり、広大な播磨平野が足下に鳥瞰できる。天気良ければその先に播磨灘に輝く陽光や、淡路島、小豆島、四国の山並みを望むこともできる。



(圓教寺参道から播磨平野を望む。遥か遠方に播磨灘と淡路島の山並みが見える)

志納所で入山料を納めてからの仁王門までの山道の参道には西国 33 札所の本尊の写し観音像が順番に祀られていて「西国巡礼ノ道」と言われており、また、この寺に由緒が深いと伝えられている平安時代の女流歌人・和泉式部の生涯を描いた看板も設えられているので、これらをゆっくりと観賞しながら歩くと参道の急な山坂道も苦にならない。(参道⇒)



(西国 33 札所の写し本尊。これは第 24 番・中山寺の十一面観音像。インドの王妃勝鬘夫人を模したという異国的な姿が艶めかしい)



(泉式部の生涯を伝える絵巻看板の一つ。奔放な恋愛遍歴を重ねた和泉式部の、さる親王との初めての後朝(きぬぎぬ)の風情を描いた絵巻)

現在の本堂は摩尼殿と呼ばれる壮大な懸造りの観音堂である（冒頭の写真）。この観音堂は、開山・性空上人が生木の桜の樹に刻んだ如意輪観音を祀るために造った鞘堂であった堂宇が後年豪壮な懸崖造りの大伽藍に再建されたものだそう。舞台造りの回廊から眺めると老杉が茂った境内の山を渡って吹いてくる翠の薫風が爽やかであった。秋には満山の紅葉が観られ、春には桜花爛漫であろう。



（開山・性空上人と生樹に彫られた如意輪観音像）（摩尼殿。懸崖造りだけでなく舞台も屋根も大きい）

さて、観音堂から少し山道を登ればやや平坦な広場に出るが、そこには三之堂と呼ばれる三つの大きな御堂がどっしりと建っていた。大講堂、食堂（じきどう）、常行堂。摩尼殿・観音堂の人出の賑やかさに比べて、この広場の一面は異境の静謐に満ちていた。風格ある三つの巨大な古伽藍がひっそりと建っているが、霊気が身に沁み込んでくるようだった。大講堂が本来の本堂だったそうだ。（↓ 三之堂。左：常行堂、中央：食堂、右：大講堂）



三之堂の裏には更に森閑とした奥之院があり、性空上人を祀る開山堂がひっそりと建っていた。ここが広い境内の端であった。何か怖い程の異空間の雰囲気醸し出している一画であった。

開山堂の屋根は軒の四隅に設えられている伝左甚五郎作の力士によって支えられているが、このうち西北隅の力士はその重さに耐えかねて逃げ出したというエピソードも伝わっているそうだ。ユーモラスなその表情が誠に結構であった。



(怖いほど森閑とした雰囲気奥の院・開山堂)



(屋根の重さに耐えかねて逃げ出した力士)

森閑とした開山堂の裏手には更に森閑とした霊気が漂っている幽邃な一画があり、そこに和泉式部の歌塚と言われている古びて苔生した宝篋印塔がひっそりと建っていた。泉式部がこの圓教寺と縁が深かったということは冒頭で触れたが、それは彼女が当時の名僧と謳われたこの寺の性空上人に皈依して、その奔放な恋愛遍歴や宮廷サロンでの華やかな生活の裏で彼女が背負っていたであろう女の宿命を上人に預けてその性（さが）から逃れたかったのかも知れないと想像するのである。

和泉式部が性空上人に宛てて詠んだ一句。

冥（くら）きより冥き道にぞ入りぬべき
はるかに照らせ山の端（は）の月

性空上人の返歌。

日は入りて月まだ出ぬ黄昏に
かかげて照らせ法のともしび



(開山堂の裏にひっそりと建っている和泉式部の歌塚の宝篋印塔)

和泉式部は、同じ宮廷サロンの同僚であった紫式部や清少納言からはその奔放な恋愛遍歴を指して「淫らな女」と軽蔑されていたそうだが、上述の“冥きより冥き道にぞ入りぬべき・・・”にも表れているように、人間の悲しき性（さが）を詠った当代一流の女流歌人であり、またその深い闇を生き抜いた女性（によしょう）でもあったのではないかと思う。紫式部や清少納言などの売文ライター風情とは比較にならない深い心の情を持っていたのではなかろうか。

末尾になったが、和泉式部と同様にこの寺に深く帰依していた西国観音霊場中興の祖・花山院は2回も参詣行幸をしているが、その模様を下に掲げて筆を擱くこととしたい。



（「播州書寫山縁起」より『花山の法皇浜より雨に御幸同御共の体』）

[第27番札所 書寫山 圓教寺]

本尊：如意輪観世音菩薩

本尊真言：オン バラダ ハンドメイ ウン

御詠歌：はるばると のぼれば書寫の 山おろし 松のひびきも 御法(みのり)なるらん

参詣日：令和元年11月12日、令和5年6月10日

追記

関東地方に住んでいる小生は、遠方の西国観音霊場参拝などは何回かに分けて区切り打ちにすることが多い。また、何かの所用の序に立ち寄って参ってくる場合もある。

この圓教寺も、実は岡山市のケア施設に夫婦で入居されている私の大学時代のゼミの恩師（仲人でもある）の百寿のお祝い面会に行った帰途に姫路に立ち寄って参拝したものであり、第2回目の西国観音霊場巡拝の発願寺となった。



第二十八番 成相山 成相寺（丹後）



昨日の播州の一乗寺参詣に続き、本日も相棒（山本潔ちゃん）との弥次喜多道中である。この相棒とは3ヶ月ほど前にも一週間ほど掛けて秩父観音霊場三十四札所巡礼を同道満願したばかりである（拙者は二回目の結願。この折の弥次喜多道中記は以下の拙HPをご覧ください。 <http://yamanami-harukani.world.coocan.jp/chichibu-pilgrimage-2nd.pdf>

昨夜泊まった天橋立の旅館から歩いてすぐの府中からケーブルカーに乗ると僅か4分で「股のぞき」で有名な笠松公園の天橋立展望台に着き、さらに老体に有難いことには、ここから成相寺までの登山バスが出ていて僅か7分でお寺まで連れて行ってくれる。

昨日に続いて今日も全国的に熱中症警戒アラートが発令されていて、京都府丹後地方の最高気温は38℃との予報。展望台の大パラソルの中に入っても、まだ朝の9時というのに早くもフライパンの底で炒られているような灼熱地獄。股を覗く元気も無し。

さて、登山バスの時間待ちをしている間の講釈に、このケーブル建設と登山バスの運行に関する成相寺との関係を一席。杉本苑子著『西国巡拝記』（1966年刊）からの引用。

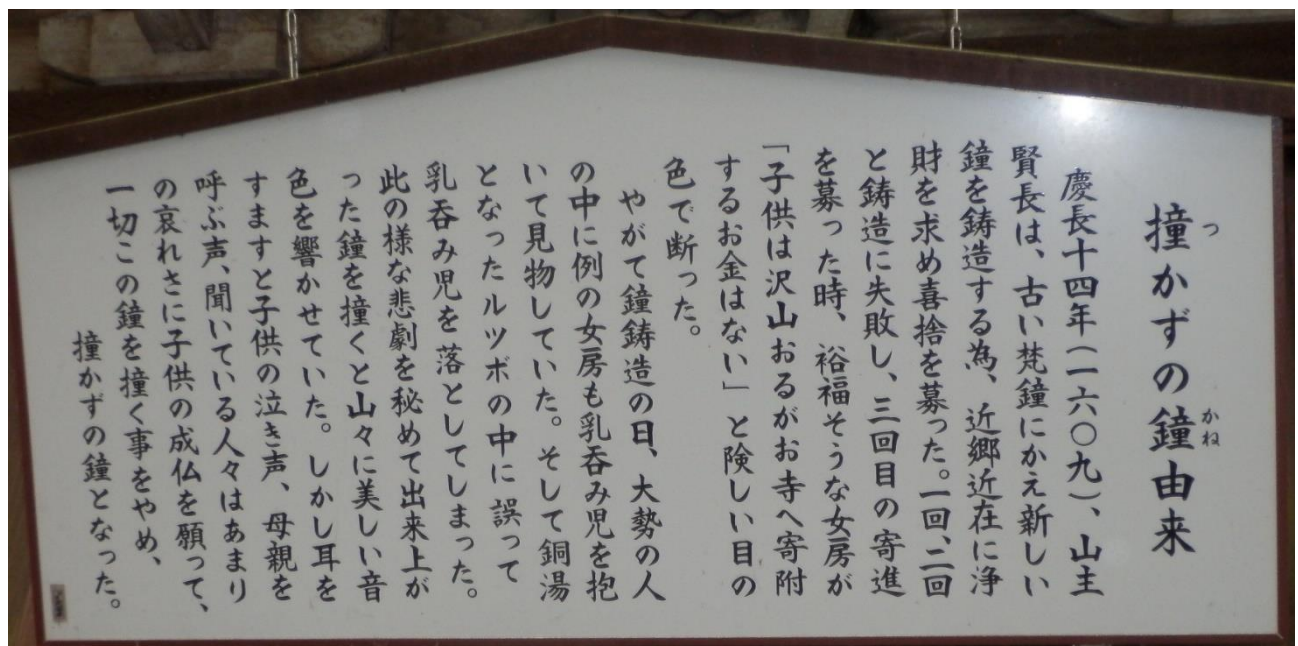


（笠松公園展望台から天橋立を望む。
左が宮津湾、右側は阿蘇海）

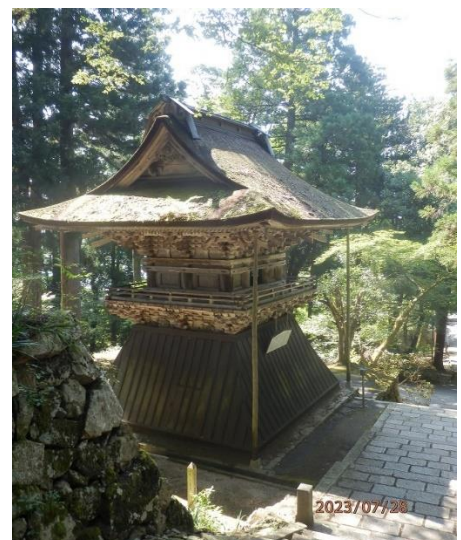
「・・・ケーブルで中腹まで運ばれ、後はバスで山門迄着く。つまりケーブルもバスも、成相寺参詣のために特設されているようなもので、二十年前、本山高野山から住職に任命されてやってきた時は草ぼうぼう、雨の日のお勤めには本堂の中で傘をさしていたという荒れ寺を、丹海交通とタイアップし、山内の一部を無償で提供して、ついに同社のドル箱観光コースにまで仕上げたのは石坪哲真大僧正の腕である。ジャーナリズムは口を揃えて、“坊さんにしておくのはおいしい”とその商才をたたえているが、(中略)住職のお口から飛び出したのは“寺の経営もこんにちでは、企業でなければなりません”という第一声だった。歩いて登ったら、間違いなく三十三ヶ所数々の難所に数えられる山道に、機械化した“足”をつけたことで参詣者は年間六十万、(中略)師曰く「バスやケーブルはあくまで衆生と観音様を直結させる“手段”であって寺院の観光化と布施収入の増加が目的ではない」。

その僅か10分間ほどの“機械化した足”で楽々と本堂まで運ばれた。筋力の衰えを若干の金力で補ったことになるが、この熱風の中を2、3時間も歩いて登れば確実に彼岸の灼熱地獄に送られること必定であろう。

さて、参道の入り口には鐘楼があった。立札には以下のような縁起が書かれていて撞かずに鐘となっていたが、鐘楼は茅葺二層の堂々とした風格ある建物(写真下)であった。



猛暑のために大汗を掻いて登った石段の上に本堂があった。江戸中期の再建だそうで、冒頭の写真のように、五間四方の入母屋造り、正面に千鳥破風、軒唐破風を配置した堂々たる金堂であった。金堂に祀られた本尊は平安時代作の木造聖観音菩薩であるが、33年に1回しか開帳されない秘仏だそうで、お前立を拝んだ。寺のパンフレットによれば、この観音像は梵天王国の姫君が姿を変えた心優しく美しい美人観音であり、絶世の美女小野小町も信仰したという。



写真が暗くてよく見えないが、巡礼堂に祀られていたこの寺の写し本尊を右に示した。この観音様を拝めば女性には美人になりたい想いを叶えられるそうだから、しっかりとお布施も弾んで参拝されたし。

本堂の外陣の天井には伝左甚五郎作の雨乞祈願の「真向の龍」が掲げられていた。一般的に龍の彫刻は龍の顔が左右のどちらかに向いているのが普通であるが、この龍の顔は真正面を向いている珍しいものだそう。真正面を向いているので、どの方向から見ても龍の顔が自分の方を向いているように見えるのだそうだ。



本堂の前には今は手水鉢として使われている鉄湯船が置かれていた。日本三大鉄湯船の一つだそうで重文。



(鉄湯船)

また、境内の放生池「底なし池」には奇怪な言い伝えが残っているそう。それは次のようなものだった。

その昔、この池に住んでいた龍が夜な夜な寺の小僧を次々に食べていた。それを見かねた和尚が小僧に見立てた人形に火薬を仕込み、それを知らずに食べた龍は爆発し、海に倒れた。その時の龍の体は天橋立になり、龍の頭は池の向こうにある榊の木になった・・・と。

底なし池の奥に見える五重塔は平成時代に再建されたもので、鎌倉時代の形式をそのままに復元した建物だそう。朱色が鮮やかであった。



(底なし池)

下山時には、山門からバスに乗った。獅子、龍、虎、鳳凰など霊獣の彫刻が施された朱塗りの山門であった（写真下）。



さて、本日のお参りはこの寺で終わりなので、天橋立を少し観光してみた。

宮津湾には「伊根の舟屋」という漁家が沢山並んでいる有名な地域がある。各自の家の1階が海に突き出して漁船のガレージになっていて家から直接海に出漁できるという仕掛けである。この伊根地区には230軒もの舟屋が並んでいて現在も現役だそう。TVなどでもよく放映されている場所である。観光案内所で尋ねると、ケーブル下駅からも伊根までバスの便（所要時間30分）があり、また伊根からは海上遊覧船も出ているとのことだった。しかし、何しろバス便の本数が少なく、伊根の舟屋を見るには半日では済みそうになるので、規模は小さいがケーブル下駅から歩いて30分ほどの所に、同じような舟屋が並んでいるという阿蘇海にある「阿蘇の舟屋」を観ることにした。ここもバス便があるらしいが時刻表を見ると2時間に1本くらいしかなかった。気温は既に40度近くまで上昇しているから、炎天下を歩くことはできそうにない。「レンタサイクル」という看板があったので、そこで自転車を借りて巡ると片道10分間くらいで到着した。

しかし、残念至極だった。舟屋らしき建物はあるにはあったが、すべて廃屋となっていて、舟屋漁業はもう廃業しているようであった。日本海に面している宮津湾の伊根地区と異なり、阿蘇海は天橋立で外海と遮断されているので、もう魚も居ないのであろう。



（こちらは現在も現役の「伊根の舟屋」）



(こちらは、寂れ果てていてガッカリした阿蘇の舟屋)

天橋立駅の近くには日本三文殊の一つ智恩寺・文殊堂があって、文殊菩薩の霊場として学業成就を願う参拝者が全国から訪れるのだそう。拙者は既に若い頃から学問は成就し過ぎるくらい成就したので今更参詣する必要も無いのだが、一応は敬意を表して参ってきた。また、境内横の船着き場には「知恵の輪燈籠」なるモノがあって、三度くぐれば知恵が付くと言われている。知恵も付き過ぎるくらい付いているので今更くぐる必要も無いが、一応は顔だけはくぐらせておいた。

また、天橋立の親町である宮津の町は江戸時代には丹後縮緬の産地として栄えた。そのために多くの商人の往来があり、また縮緬の集積地やそれを積み出す宮津の港も繁盛したという。この成相寺も、宮津の町の人出で賑わったという。次ページに示した成相寺曼陀羅図にも壮大な伽藍の様子が描かれている。



(知恵の輪燈籠。これはどのようにして潜るのか?)



(成相寺 曼陀羅図)

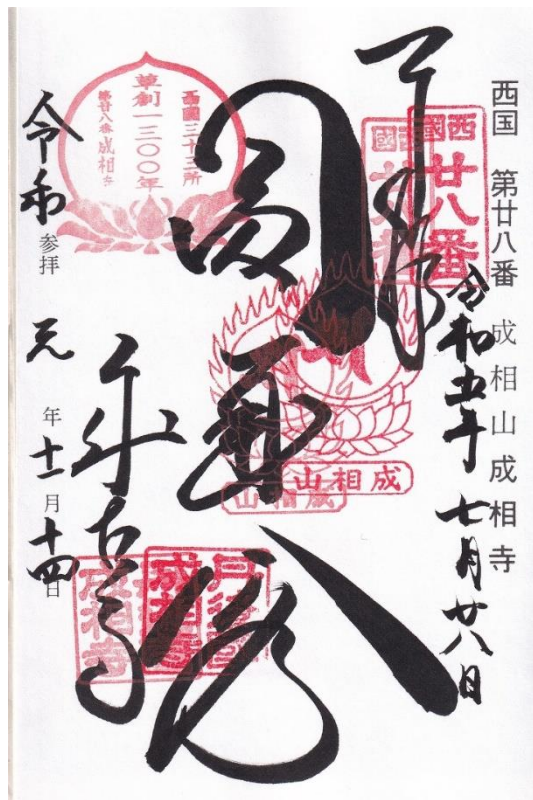
天橋立駅から京丹後鉄道で JR 福知山駅まで戻り、そこで相棒と別れて京都駅経由で帰宅した。

[第 28 番札所 成相山 成相寺]

本尊：聖観世音菩薩 本尊真言：オン アロリキヤ ソワカ

御詠歌：波の音 松のひびきも 成相の風ふきわたす 天橋立

参詣日：令和元年 11 月 14 日、令和 5 年 7 月 28 日



(朱塗りが鮮やかな成相寺五重塔。屋根の均整も鮮やかであった。埋め草に補載)

第二十九番 青葉山 松尾寺（丹後）



（手前の香炉屋根、奥の二層屋根の向拝と宝形造りの本堂が重なって美しいシルエットを見せる観音堂）
[ただし、観音堂は現在修理工事中でシートに覆われて閉鎖中。完成は令和8年とのこと]

この札所は、日本海の若狭湾を望む京都府と福井県境の山（青葉山 693m、別名若狭富士）の山腹にある。地図で見る限り舞鶴中心街からすぐ近くの丘陵地にあり JR 東舞鶴駅から JR 小浜線で僅か 10 分ほどの一駅次の駅「松尾寺駅」から一里ほどの丘陵地帯にあるのだが、しかしながら寺の周辺は鄙の風情が深い山中であった。

車で参る人にとっては舞鶴市街地からすぐの郊外なので、ちょっと序にお詣りに寄るという感覚であろうが、歩きの小生には電車を降りても路線バスも無く、田んぼのあぜ道や登り坂の林道を 2 時間近く歩くしかないのも、やはり西国霊場の中でも不便な口の方に入るであろう。おまけに、小浜線というのは 2～3 時間に 1 本くらいの便しか無いし、駅も無人駅でタクシーも無いので、往生する。マ、しかし、往生した分だけそれだけ余分に功德が積めたと思いたい。

さて、この松尾寺はひとつ前の札所である同じく丹後の「成相寺」（天橋立）参拝の折に続けて廻りたかったのであるが、その折は猛烈な猛暑のために断念して一旦帰宅、今回は会社で親しかった同僚が今年のお盆に急逝しその四十九日忌に奈良生駒のご自宅で仏前にお参りし、また翌日に岡山で家内の実家の墓参を済ませた帰途に、改めて舞鶴と琵琶湖に立ち寄って丹後や近江の 4 札所を廻ることにした。

日程計画では、この松尾寺をスタートして小浜街道から近江今津に出て船で琵琶湖の竹生島に渡り、竹生島の寶厳寺、竹生島から長浜に渡って近江・湖東の長命寺、及び観音正寺を参拝する丹後・近江地域の 2 泊 3 日の巡拝日程を組んだが、生憎強風のために琵琶湖汽船が欠航して竹生島には渡れず、寶厳寺を除く 3 寺だけの巡拝となった。 —132—

さて、前夜泊まった東舞鶴から電車に乗り、松尾寺駅に下車。無人の駅舎の周りには人影一人も見当たらず、周りの風景も田圃と里山が幾重にも重なった山なみばかりで静かな山里であった。札所へはここから一里ほどの山坂道をトボトボと歩くしかない。



(鄙びた JR 小浜線「松尾寺駅」と文化財標)

この駅は鄙びた無人の駅舎であったが、明治時代のローカル駅舎の典型的な姿を留めている駅舎だそうで、国登録の有形文化財だそう。なるほど、風雪に耐えたその容姿には奥床しさと風格がにじみ出ていた。登録理由に曰く「切妻造の平入で、待合室正面に切妻屋根の車寄を出し、背面全面に下屋を付ける。戦前に敷設が進んだ地方鉄道の木造駅舎の姿をよく留め、地域の歴史的景観の核になっている」。

さて、2泊3日分の着替えや巡礼装束などで重くなったザックを担いで稲刈りが終わった畦道を暫く歩き、ウネウネとした林道の坂道を独りトボトボと登っていると、後ろから追い抜いた車が停まってくれて「お寺にお詣りなら、宜しければ乗って下さい」との有難いお言葉。喜んで乗せて頂いた。聞けばこの寺の納経所でお世話をされている方だそうで、大助かりだった。これも仏縁、合掌。

段々と平坦になってきた所にこの寺があった。境内のすぐ東側には京都府と福井県の県境が通っていて隣はもう若狭の国であった。

扨て、ここの札所のご本尊は馬頭観音である。馬頭観音を本尊としている寺院は数が少なく、西国観音霊場の33札所の中では唯一この松尾寺だけであり、また、坂東、秩父も併せた日本百観音霊場でも、この寺以外には秩父の橋立寺が1寺あるだけである。坂東霊場の33札所には1寺も無い。余談であるが、観音菩薩の33変化の御顔は皆穏やかな顔をされているが、唯一この馬頭観音だけが憤怒の怖い顔である。その激しい怒りで衆生の諸悪を除き、煩惱を絶つと言われている。私は午年生まれであるし、馬面でもあり、また馬鹿でもあるので、特に馬頭観世音菩薩に思いが籠るのである。



(駅を出てこのような畔道を歩く。目指す札所は一番奥の山「若狭富士」の中腹にある)

馬頭観音を本尊としている寺の縁起は概ね似たようなもので、苦しんでいる衆生が白馬の姿に化けた観音菩薩に救われたという言い伝えが寺伝になっている。ここ松尾寺の寺伝も以下のようなものである。

昔々、若狭の漁師が荒れた海で遭難し、流れていた一本の丸太に掴まって助かった。この丸太は浜に打ち上げられると白馬に変身、青葉山に駆け登って元の本丸太に戻った。

この丸太に助けられた漁師は、これは観音様の変化に助けられたに違いないと観音様を感じ、この丸太で馬頭観音を刻んで祀ったのが松尾寺の本尊だそう。ただ、現在は観音堂（本堂）は修理中であるので、ご本尊はお前立と共に本堂と渡り廊下で繋がっている大師堂の方に仮住まいしておられた。このご本尊は秘仏で、ご開帳は77年に1回だそうであるが、先ほどの納経所の方のお話では、現在修理中の本堂が完成した後の令和9年に催す大法要で開帳する予定だそう。4年先のことであるが、何とかそれまで生き延びていて本尊の馬頭観世音菩薩を拝顔したいと思うが、果たしてどうなることやら。馬頭観世音菩薩さま、よろしくお願い申し上げます。

また、境内にある宝物殿は春秋の特別期間のみの開館であるが、この寺に伝わる仏像絵画彫刻などの国宝・重文級が展示されている。

5年前の回目の参拝の折には、西国観音霊場札所の巡礼古道の調査・復活に尽力されたこの寺のご住職の松尾心空老師から親しく声をかけて頂き、西国巡礼古道の徒歩調査の様子や実際に古道を何回も徒歩巡礼された様子などをお伺いすることができて興味深かった。

庫裏で当地名産の舞鶴茶と虎屋羊羹の接待に与り、また同じ西国札所の南摂津「葛井寺」の山主から贈って来たという葛井寺名物の立派な柿をお土産に頂いた。四国遍路や日本百観音巡礼で通算400寺を参拝したが、お寺のご住職から接待を受けたのはこれが最初で最後であった。

（国宝 普賢延命菩薩像 12世紀 同寺HPから引用⇒）



（松尾寺の本尊・馬頭観音（御前立）

引用出典：日本遺産ポータルサイト）



実は前回の参拝巡礼の折には、老師の著書である『西国札所古道巡礼～「母なる道」を歩む』や老師編纂の『西国古道地図』を頼りに熊野那智の第1番札所「青岸渡寺」からこの西国巡礼古道を歩いて巡礼し、残るは琵琶湖竹生島の宝厳寺、結願寺の谷汲・華厳寺の2寺だけになっていたことなどを納経所の方に話したところ、本日は老師在宅なので呼んで来るからお待ち下されと庫裏に居られた老師と呼ばれた。老師は既に九十歳を超えておられたが矍鑠たるものだった。

しかし、残念なことに老師は昨年夏鬼籍に入られて今回はお会いすることが出来ず、誠に残念であった（享年 95 歳）。合掌。

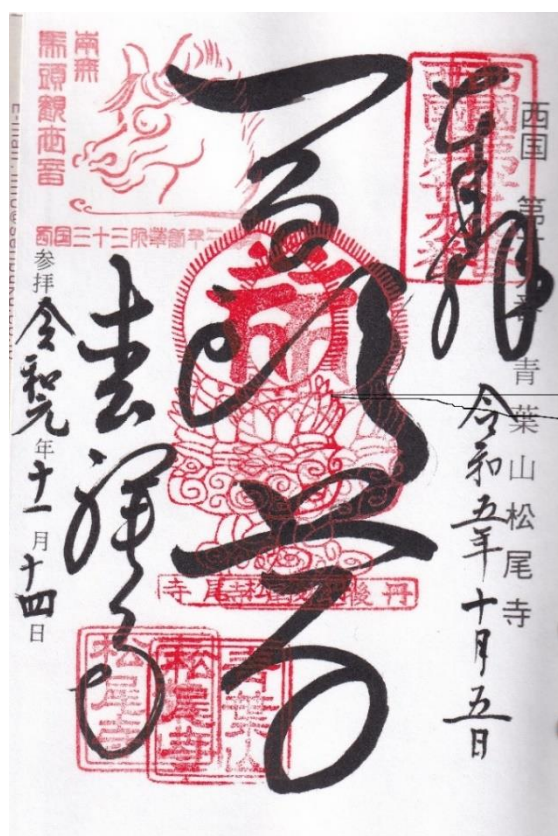
今朝から今にも泣きそうになっていた空模様は、下山する頃には土砂降りの吹き降りとなった。先の納経所の方がご親切にも傘を貸して下さったので、ずぶ濡れにならずに駅まで辿り着き、傘は松尾寺駅に新たにできた交流カフェに預かって貰った。電車で東舞鶴駅に戻り、特急「まいづる」で京都に出て近江八幡の第31番札所「長命寺」に巡拝した。

[第29番札所 青葉山 松尾寺]

本尊：馬頭観世音菩薩 本尊真言：オン アミリトドハンバ ウン ハッタ ソワカ

御詠歌：そのかみは 幾代経ぬらん 便りをば 千歳もここに 松の尾の寺

参詣日：令和元年 11 月 14 日、令和 5 年 10 月 5 日



追記：東舞鶴では駅すぐのビジネスホテル「ウェーブ舞鶴」に宿泊。安価(シングル 4,980 円)で良。

夜巡拝はホテル推薦の地元割烹「進肴」(いいざかな)。旨くて値段もリーズナブル。大将は口数は少なかったが、心籠った料理をお客に食べてもらうことが生き甲斐だという爽やかな人だった。

第三十番 竹生島 寶巖寺（琵琶湖）



（琵琶湖竹生島の船着き場のすぐ上に建つ寶巖寺）

島とも言えないような岩礁の小さな島の上に小祠が建っている風景は例えば諸国名所図絵などに描かれた仙台の松島や瀬戸内海の小島などに見えるが、それなりの大きな無人島に大きな著名な神社仏閣だけが鎮座ましまして島は寡聞にしてこの琵琶湖北端に浮かぶ竹生島と福岡県宗像市沖の沖ノ島（60km 沖に浮かぶ絶海の孤島、宗像神社の沖津宮）の2箇所しか知らない。いずれも全島が神仏だけがおはします聖域で民家は無い。

さて、今年の10月に参拝した丹後の松尾寺からの帰途に今津経由で竹生島にも寄りたかったのであるが、生憎悪天で琵琶湖汽船が欠航となり断念、11月に岡山県の鷺羽山で催された大学の研究室OB同窓会への行き駆けの駄賃にチョイト米原で新幹線を途中下車して長浜から竹生島に渡りこの第30番寶巖寺に参拝してきた。竹生島は周囲僅か2kmの切り立った断崖絶壁の小島で、昔から聖域の島と考えられていた。修験道華やかなりし頃、琵琶湖の東側の伊吹山や山麓の長浜辺りから湖に浮かぶこの竹生島に夕日が沈むのを見れば、その向こうには西方浄土が見えて或いは補陀洛渡海の場所と考えられていたのかも知れない。（汽船から見た竹生島⇒）



補陀洛渡海の聖地は必ずしも海浜の独占ではなく、例えば日光中禅寺湖（観音札所は中禅寺）などでも渡海舟が浮かんでいた例もあるから、この琵琶湖で補陀洛渡海が行われていたことがあったとしてもおかしくはない。

扱て、ここは琵琶湖の中でも有名な観光名所であるから、今津や長浜からの観光船が着くたびにド〜ッと人が降りてきて狭い境内は押すな押すなの大混雑となる。観光船は地元の人が利用する足ではないから乗客全員が参詣客か観光客である。島の中には寺院の寶巖寺（真言宗）と神社の都久夫須磨神社（ツクブスマ⇒ちくぶしま⇒竹生島）神社があるが、かつては神仏混淆だったのであろう。

豊臣秀吉の帰依が篤かったそうで、秀吉が建てた幻の大坂城の唯一の遺構「極楽門」を移築した「唐門」（国宝）には豪壮な風格があり、また、観音堂から都久夫須磨神社に続く渡廊「舟廊下」（重文）は朝鮮出兵の折に秀吉公の座船として作られた日本丸の船櫓（ふなやぐら）を利用して作られたものだそうで、いずれもこの寺の名所となっている。



（豪壮な唐門。奥が観音堂）



（渡廊 舟廊下）



（唐門の豪壮な彩刻）

扱て、この札所のご本尊は本堂が弁財天、観音堂は千手千眼観世音菩薩であるが、どちらも気が遠くなるような60年（干支一巡り）に一回しか開帳されない秘仏とされていて、平生はお前立を拝むしかない。弁財天は、安芸の宮島、江の島の弁財天と並んで日本三弁財天と称されている弁天様で、その中でも最古の建立であるので「大弁財天」と呼ばれている。また、三弁財天の中では一番の美人とされているようで、帰依衆の誰かが奉納して本堂の脇に祀られている写し弁財天には更に艶の気も漂っているようだった。



（千手千眼観音お前立。同寺HPから引用）



（弁財天お前立。同寺HPから引用）



（帰依衆が奉納した写し弁財天[戦国時代?]. 当時としては珍しい女性からの寄進。同寺HPから引用）

かつての神仏混交の時代にはこの観音霊場「寶巖寺」と一心同体であった都久夫須磨神社との共同の参道入口は直接琵琶湖の波の上であったから、鳥居は琵琶湖畔に突き出して建てられている。その湖畔に建てられている龍神拝所から見下ろす琵琶湖の景観は、やはりこの琵琶湖の湖の彼方には補陀洛浄土があるように感じられた。船着き場には右のような石碑「當嶋水際八町殺生禁断也」も建っていたから、昔から殺生を戒めた場所でもあったのだろう。



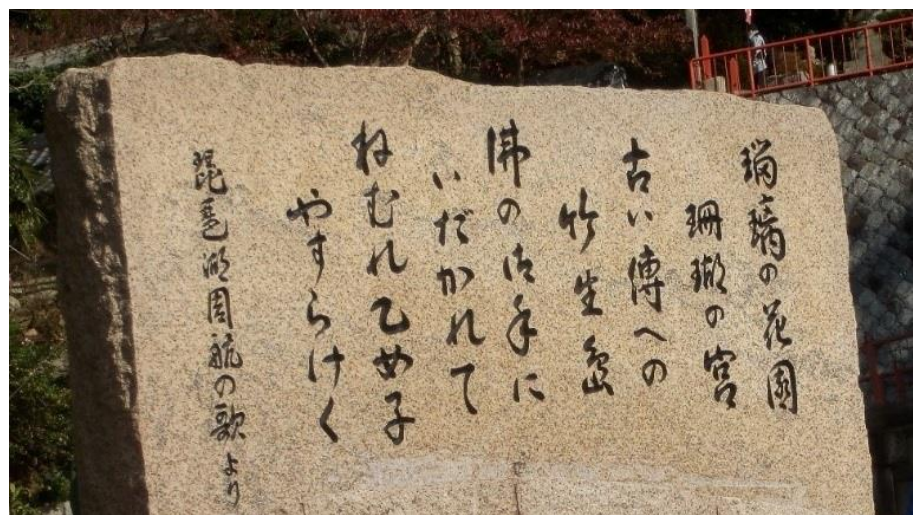
(↑ 龍神拝所から琵琶湖の水面を望む。確かにその彼方には帆墮洛浄土があるように感じられた)
(境内から船着き場を見下ろす⇒)



さて、抹香臭い話はこのくらいにして懐かしい話題をひとつ。

この札所のすぐ下の船着き場には右のような歌碑が建っていた。

(⇒船着き場に建っていた「琵琶湖周航の歌」の歌碑)

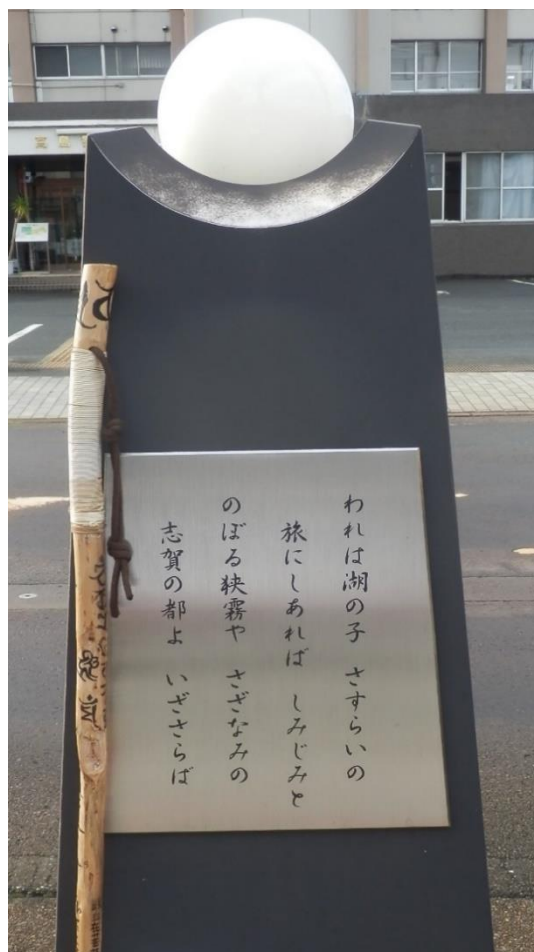


もう半世紀以上も前のことになるが、旧第三高等学校（現京都大学）のボート部の部歌であった「琵琶湖周航の歌」というのが大流行し、加藤登紀子が歌ったレコードが80万枚売れて当時としては爆発的な大ヒット曲となった。この歌詞は旧第三高等学校漕艇部員が漕艇で琵琶湖の津々浦々を巡った折の感懷を歌詞にしたものだそうだが、ご年配の方々には懐かしいメロディーと歌詞ではなかろうか。

このような歌碑は漕艇部員が巡った琵琶湖の諸所に建てられているそうだが、第一回目の巡礼の折に通った琵琶湖西岸の今津の浜には歌碑だけでなく「琵琶湖周航の歌資料館」という立派な記念館も建てられていてこの歌にまつわる沢山の資料が展示してあった。

現地に行かれた際には、この歌の歌詞を思い出しつつ、この歌の縁の土地でこれらの歌碑を探してみるのも一興ではなかろうか。

（今津港の傍にあった歌碑⇒）



（今津港のすぐ傍の「琵琶湖周航の歌資料館」）



(資料館の展示の一部)

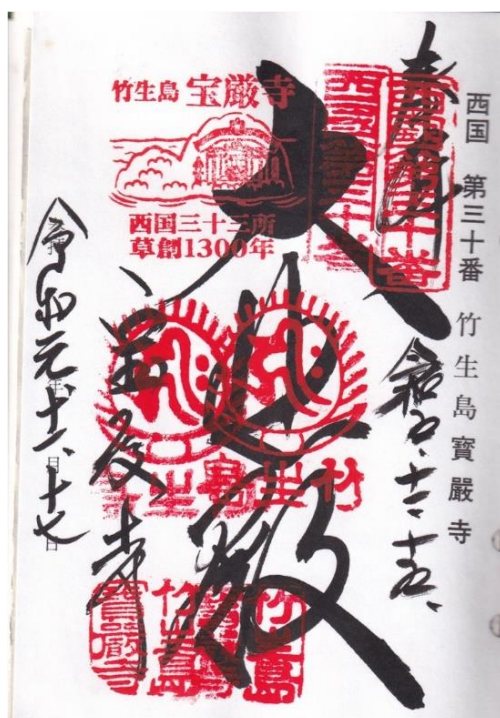
[第 30 番札所 竹生島 寶巖寺]

本尊：千手千眼観世音菩薩

本尊真言：オン バラザ タラマ キリク

御詠歌：月も日も 波間に浮かぶ 竹生島 船に宝を 積むこちして

参詣日：令和元年 11 月 17 日、令和 5 年 11 月 15 日



第三十一番 ^{いきやさん} 姨綺耶山 長命寺（近江・湖東）



第 31 番札所・長命寺は安土城址のある丘陵地が琵琶湖東岸に突き出した岬の突端の長命寺山という低山の中腹に建っており、その山麓には長命寺港という小さな港もあった。参道の 808 段ある長い石段をウンウンと登って行くと足下に琵琶湖の入り江が見えてその向こうには比良山や比叡山の山並みも見えた。

余談であるが、この 808 段の石段は段差が高い直線的な石段が真上に登っていて、標高差 200m を水平距離僅か 600m で登る急勾配（勾配＝200/600＝1/3 の急勾配）になっているので息が切れて往生した。途中には踊り場も適宜設置されていたが、我が衰えた足は次の踊り場までもたず、恥ずかしながら恥も外聞もなく途中の石段に座り込む始末。

また、この石段には手摺などが設置されておらず、小生の筋肉の弱った縛れる足でこの段差がある石段を下れば転倒して頭から転がり落ちること必定、よって、下山時にはこの石段は遠慮してかなり遠回りにはなったが、林道の車道を下った。正解であった。



（境内からは足下に琵琶湖の入り江、その向こうには比良山系が見えた。右は麓の琵琶湖・長命寺港）

この寺の本尊は一つの厨子の中に千手観音、十一面観音、聖観音の三仏を一体として祀ってあるそうだが、33年に一回しか開帳されない秘仏だそうで拝顔はできなかった。

また、寺の境内には右のような歌碑があった（琵琶湖周航の歌碑）。冒頭でも触れたとおり、この地は琵琶湖の入り江のすぐ近くにあるので、当時の第三高等学校（旧制、現京都大学）ボート部の部員達がしょっちゅう漕艇で周航して来ていた故地でもあろう。

なお、あまり知られていないかも知れないが、近江八幡という所は近江商人発祥の地で、往時の古い商家の町並みや白壁の土蔵が今も保存されている情緒ある町であった。

琵琶湖と繋いで商業の物品を運ぶために豊臣秀次が開削した八幡堀という水路が町の中に張り廻らされているが、この堀を日本一遅い乗り物と称される手漕ぎ和船で巡る「八幡堀めぐり」はこの地の名物だそう。観音霊場巡拝の序に観音様と「同行二人」で乗ってみるのも一興ではなかろうか。



（八幡堀めぐり、同市観光協会HPより引用）

今宵は JR 近江八幡駅近くのビジネスホテル「近江八幡ビジネス第一ホテル」に投宿、夜の紅灯巡礼は同ホテルご推薦の“刺身と魚飯”「FUNAYA」に行った。ホテルは駅から少し離れていて設備もやや古かったが朝食付き 1泊 6,000 円也は年金貧乏生活者には有難かった。居酒屋の方は話好きで応対も気持ち良い若大将がやられている店で、こちらも誠に結構な店であった。

[第三十一番 姨騎耶山 長命寺]

本尊：千手十一面聖観世音菩薩

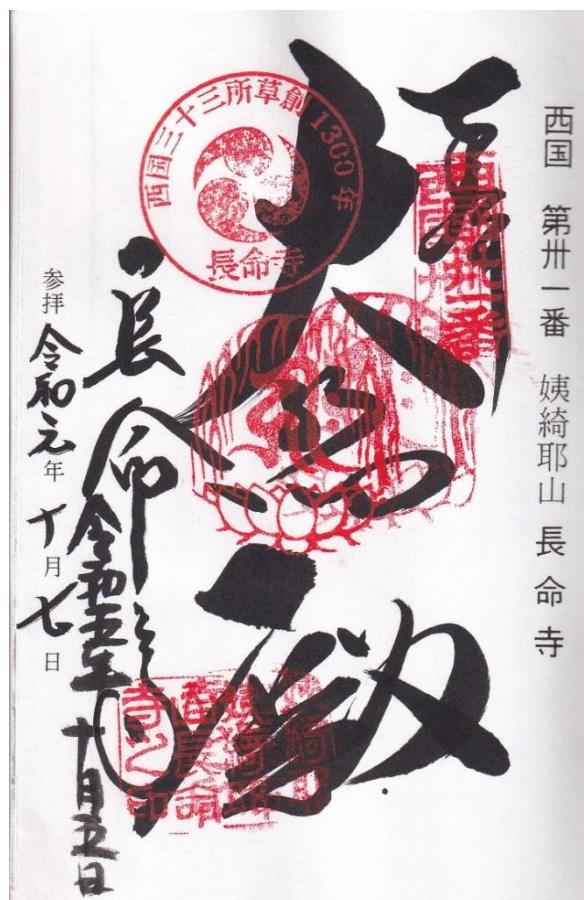
本尊真言：オン バザラ タラマ キリク

御詠歌：八千年や 柳に長き 命寺 運ぶ歩みの かざしなるらん

参詣日：令和元年 10 月 7 日、令和 5 年 10 月 5 日



(木漏れ日が映える長命寺本堂 右は五重塔)



第三十二番 ^{きぬがささん} 繖山 ^{かんのんしょうじ} 観音正寺 (近江・湖東)



(寺域を警護する露座の仁王像、奥突き当りが本堂)

近年は札所寺院もホームページを公開している寺が多くなった関係か、寺院のロゴが目立つようになってきた。

この寺のロゴ(右)はちょっと小粋でモダンなデザインであるが、鯨の尻尾のような半ギレとその右には古代の貴人のような人物が描かれており、下側には山並みのようなシルエットが浮き出ている。寺院の文字は一般的には隷書体や篆書体が普通と思われるが、ここではゴシック体とローマ字が使われていて絵との調和を醸し出しているようだ。

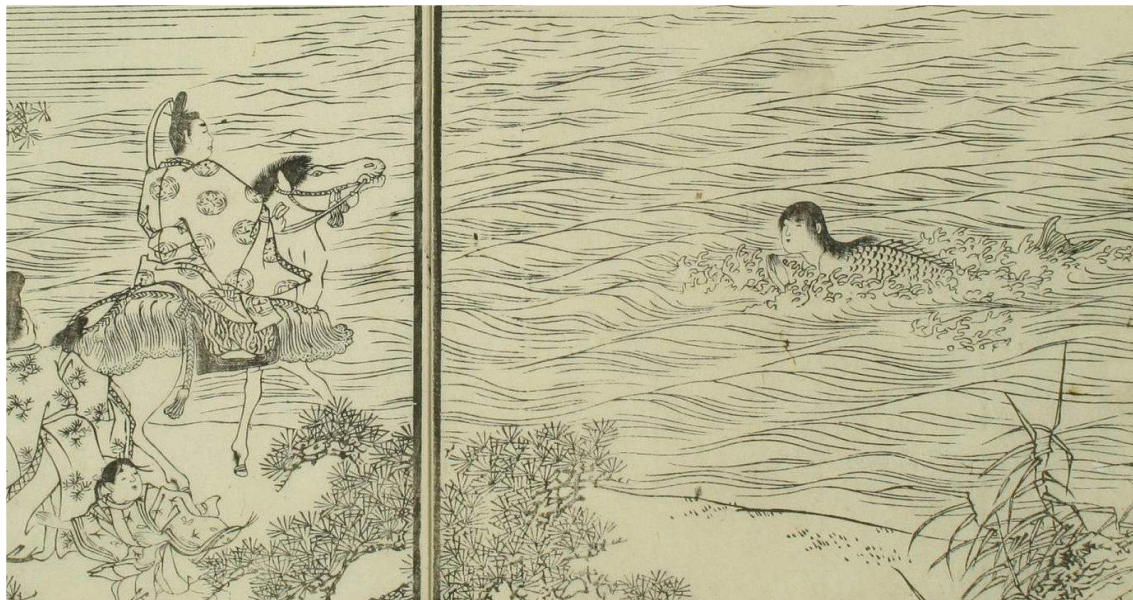
このロゴだけでは何を表しているのか分からないが、実は以下のような縁起を表わしているのだそう。曰く、

推古天皇の御代、近江国を遍歴していた聖徳太子は湖水から浮かび出てきた人魚と出会った。人魚は「私は前世漁師であり、殺生を業としていたため、このような姿になりました。繖山にお寺を建て、どうか私を成仏させてください」と懇願した。聖徳太子はその願いを聞き入れみずから千手観音の像を刻み、堂塔を建立した。日本唯一の人魚伝説が残る寺院としてその歴史は脈々と受け継がれている、云々……。

即ち、左側の鯨の尾は人魚を、右側の貴人は聖徳太子を表わしている。「天空の寺院」とは



この寺が建っている場所が標高 433m の低山ではあるが里から相当登った山の天辺にひっそりと佇んでいることにあやかっている。シルエットとして描かれている山並みはその天辺であろう。この山は山号にも使われている「繖山」(きぬがさやま) で、その山容が古代に貴婦人が外出の折に差し掛けられていた衣蓋(きぬがさ)のようにふんわりとした美しさから名付けられたそう。



(「西国三十三所観音霊場記図絵」三十二番神崎郡石場村観音寺より)

さて、近江の辺境にあるこの観音正寺は今から約 1400 年前、聖徳太子によって開創されたことは上で触れたが、西国観音霊場札所一般の草創は 1300 年前とされているから西国観音札所の中では古刹名刹と言える。聖徳太子の生涯を描いた「聖徳太子絵伝」という作品の複製に取り組んでいるのも聖徳太子開創の寺だからであろう。

この寺は平成になってから本堂を焼失、本尊も同時に焼失したが、10 年後に本堂を再建し、印度から特別許可を得て輸入された香木白檀 23 トンで再刻された丈六(約 6m)の千手千眼観世音菩薩が祀られている。光背にも小さな手と眼がびっしりと刻まれていてまさに千手千眼である。柔和な顔であった。

因みに、火災の折に焼け残っていた前立の千手観音が発見され、これを新たに秘仏本尊として祀り、33 年に一回の開帳としたそう。



(観音正寺本堂)



(聖徳太子像 蒲生野を眼下に右奥は三上山
〈通称近江富士〉)



(インド産白檀刻 千手観音菩薩像。光背にも千手
千眼がびっしりと刻まれている。同寺 HP より⇒)

また、境内には石を積んだ庭園がしつらえてあった。この寺が位置している^{きぬがさやま}織山は石だらけの山であるから、これも自然の地形でもあろう。この山全体が戦国大名の近江源氏・佐々木一族の山城であったから、裏山には至る所に崩れた石垣や城郭の遺構があった。

境内に祀られた釈迦如来像（濡仏）や一願地蔵（北向き地蔵）も趣があった。一願地蔵は酒樽の中に安置されていたが、このお地蔵さまは毎晩般若湯の晩酌がお楽しみなのであろう。左党の小生も今晚そのお零れに与りたいものだ。

このお地蔵さんは、真言を3回唱えると悩みを取り除いて下さり、また一願を叶えて下さる有難い仏様だそう。



(石積庭園)

(左：釈迦如来像⇒)

(右：一願地蔵⇒)



寺の境内からは足下に琵琶湖湖畔に続く蒲生野ののどかな田園風景が眺められた。



（観音正寺境内から近江蒲生野の眺望。右奥の尖った山は近江富士の名称で親しまれている三上山）

今回の巡礼では、昨日の舞鶴「松尾寺」で納経所の方が往路の参道で車に拾って下さったのに続き、この寺でも偶々麓で道を尋ねた地元の方が水撒き仕事を中断して態々車を出してお寺まで送って下さった。結神社門前の大きなお宅のご主人だった。車中の道々で世間話をしたが、近江やこの寺のことなどを聞かせて下さって大いに興味が湧いた。

ここ結神社から石段の参道を歩いて登れば若者の足でも1時間、足弱になっている小生の足では2時間くらいは掛るだろうから、大助かりであった。これもこの寺のご本尊千手観世音菩薩が与えて下さった仏縁であろうか。合掌。

帰途はこの結神社に下る石段の参道を歩いて下った。緩い坂道だったが結構足が笑った。



（観音正寺から麓の結神社に下る石段の参道と丁石）

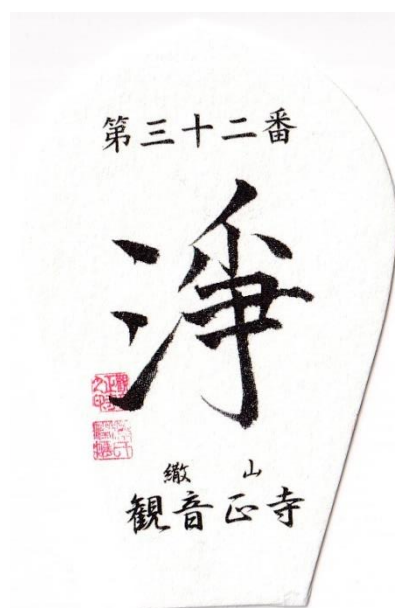
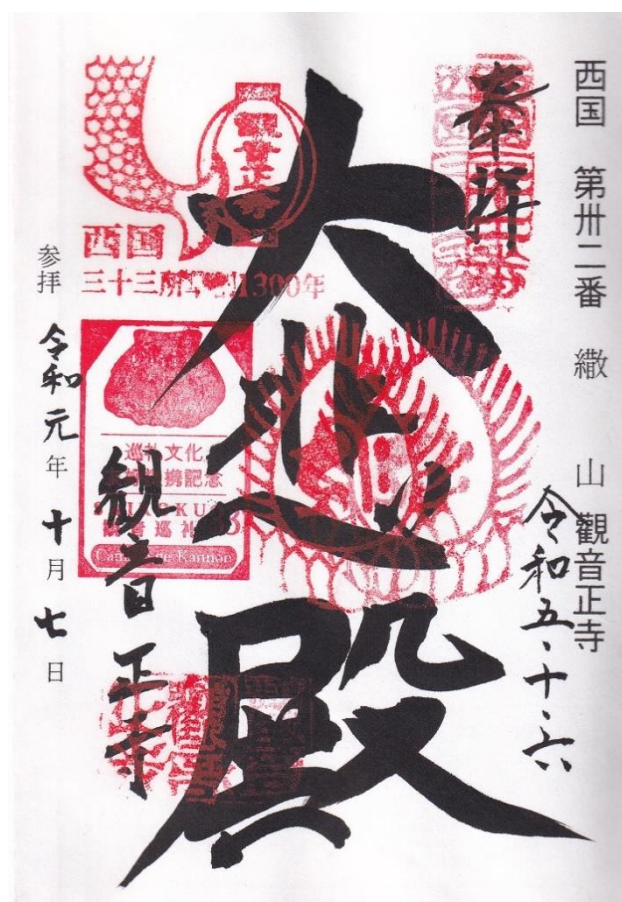
[第 32 番札所 織山 観音正寺]

本尊：千手千眼観世音菩薩

本尊真言：オン バラザ タラマ キリク

御詠歌：あなとうと 導きたまえ 観音寺 遠き国より はこぶ歩みを

参詣日：令和元年 10 月 7 日、令和 5 年 10 月 6 日



第三十三番 谷汲山 華嚴寺（美濃）



西国観音霊場の33札所はこの寺を除きすべて近畿圏内にあるが、巡礼最後の第33番札所（結願寺）であるこのお寺だけは岐阜県的美濃にある。霊場巡礼の作法から言えば、この33番札所で結願し、満願堂に満願成就を報告、それまでの巡礼の旅で被ってきた笈摺や菅笠を笈摺堂に奉納して「精進落としの鯉」を撫でて観音霊場巡礼の結願とするのが常道であろうが、小生の今回の巡礼では結願寺は発心寺である南紀那智の第一番「青岸渡寺」とし、気持ちの上では、そこから西方浄土の須弥山に補陀洛渡海すると決めていたので、この33番寺は今回は巡礼の途中の一札所にしか過ぎないという位置づけとなった。

「補陀洛渡海」とはチト大袈裟であるが、西国、坂東、秩父の日本百観音霊場巡礼も四国八十八ヶ所歩き遍路もそれぞれ二巡完拝した現在、齢も八十路の峠を越えて精神的にも肉体的にも老化と持病で衰弱してきたのでこの辺がそろそろ潮時であろうかと観念した次第である。

ところで、今回のこの札所華嚴寺への巡拝は、本稿にも時々ご登場頂いた兵庫県西宮市在の悪友（&学友・岳友・呑友）が彼の長きに及んだ西国観音霊場巡拝も残るはこの札所1寺だけとなったのを機会に彼の西国札所満願の参拝に同行させて頂き、彼の西国霊場巡礼の精進落としに観世音菩薩サマにもご来籠頂いて西宮の彼の家で三人で直会を供奉する

のも悪くないと思って同行させて貰った次第である。

この悪友とは、1ヶ月ほど前にも播磨と丹後の西国2札所を同道し、また、5ヶ月ほど前には秩父観音霊場34札所を一週間同道しているので、彼との同行三人（うち一人は観世音菩薩さま）の巡拝旅は、マ、日常茶飯事のようなモノでもある。

さて、美濃のローカル鉄道「樽見鉄道」の大垣駅で件の悪友と合流、そこから乗車30分の「谷汲口駅」で土・日曜日だけ運行している揖斐川町営コミュニティバスに乗り換えて大垣駅から谷汲山まで約1時間、桜並木が続く大きな門前町の参道には土産物屋、食堂、仏具店が並んでいたが、前回5年前に来た時よりも一層さびれた様子で、食堂と土産物屋がほんの二、三軒開いているだけで後の残りの殆どはシャッター街となっていた。

前回泊まった山門前の老舗旅館も同館経営の温泉「満願の湯」も倒産廃業となっていた。観音霊場の門前町は、例えば京都の清水寺や東京の浅草寺などの観光地を除けば今はどこも閑古鳥が鳴いていて、昔日の面影は色褪せた〇〇寺曼荼羅図等で忍ぶしかないが、これも時代の流れであろう。

さて、この華嚴寺は流石に満願寺だけあって、広い境内には沢山の堂宇があり、上でも触れたが他の札所には無い満願堂や笈摺堂もあって、境内の諸所に置かれた「満願」の文字が刻まれた石燈籠などが満願気分を煽ってくれる仕掛けとなっている。満願帳を持った満願タヌキの像もご愛嬌である。

前回は時間の関係で巡れなかった本堂の床下の戒壇を三百両也のお布施を喜捨して巡ってみた。秘仏ご本尊の十一面観世音菩薩さまの足下を巡っているのだろうと思うが、何様漆喰の闇の中を狭い通路の壁を手探りで触って摺り足で戒壇を歩むという寸法になっているから、息が詰まって往生した。前を歩いている相棒はスイスイと歩けたと言っていたが、当方は真っ暗闇の中で何者かに押し拉がれそうになって死にそうであった。相棒に言わずと修行が足りない人間や悪行を尽くした悪人はこのような目に遭うのだそう。コン畜生メ！！。

ここには3種類のご朱印が用意されている。御朱印が複数ある札所も無いことは無いが、大抵は例えば坂東観音霊場の浅草寺の如く、観音霊場本尊のご朱印と七福神の大黒天の御朱印と言うように霊場がダブっているために複数の御朱印が用意されている場合が多い。しかし、この華嚴寺の3種の御朱印は同じ西国観音霊場札所としての堂宇毎の朱印である本堂（観音堂）朱印、満願堂朱印、笈摺堂朱印であり、この3種類のご朱印がセットとなって押される寸法となっている。因みに、御詠歌もこの3種の堂宇と朱印に合せて3種が用意されている。それぞれ現世、過去世、未来世に擬せられて詠まれているようだ。

[現世（観音堂）]世を照らす 仏のしるし ありければ まだともしびも 消えぬなりけり

[過去世（満願堂）]萬世の 願いをここに 収めおく 水は苔より 出る谷汲

[未来世（笈摺堂）]今までは 親と頼みし 笈摺を 脱ぎて納むる 美濃の谷汲

マ、有難いようでもあるが、下司な勘繰りではあるが、寺の御朱印収入も放っておいても3倍になっているという仕掛けではなかろうか。その魂胆がちょっと卑しい気がする。

下世話な話で恐縮であるが、仏様の前で金勘定をするのはチト情けない気もするが、霊場巡りにもそれなりの財布が掛り、例えば、入山料、御朱印料、ローソク・線香料も度重なると馬鹿にならない金額となる。遠方の寺ともなると交通費、宿泊料、門前紅灯の般若

湯の喜捨も相当な額になる。下司を重ねて恐縮であるが、小生の場合は四国歩き遍路2巡、日本百観音霊場2巡で喜捨した（交通料金、宿代、紅灯への喜捨も含めて）お布施の総額は三百万両くらいにはなっているだろう。

マ、それは兎も角として、上記のようなお布施集めの仕掛けは観世音菩薩サマも苦々しく思っておられるのではなかろうか。仏の道に叶う寸法であれば、喜捨は放っておいてもそれなりに集まろう。要は寺の品性の問題である。マ、しかしお寺にもそれぞれの経営維持のための事情もあろうから、他人がとやかく言うのは“地獄の沙汰も何とやら・・・”の逆効果になるから慎まねばナラヌ。ちょっと下司な話で失礼申した。

第一回目の西国観音霊場三十三札所巡拝の満願を果たし、この満願寺の本堂に吊るされている鯉を撫でて精進落としを済ませた悪友の満願を祝して、取敢えず門前の老舗蕎麦屋で暑気払いの般若湯（ビール）を喉に流し込み満願蕎麦を頂戴致した。

西宮市の彼の自宅に着いてから、十一面観世音菩薩さまを勧請し、ビールと鮎で盛大に直会を行った。果たしてこの功德、有りや無しや？

（華嚴寺秘仏本尊 十一面観世音菩薩 同寺 HP から引用⇒）

[第33番札所 谷汲山 華嚴寺]

本尊：十一面観世音菩薩

本尊真言：オン マカ キャロニキャ ソワカ

御詠歌（観音堂）：世を照らす 仏のしるし ありければ
まだともしびも 消えぬなりけり

参詣日：令和元年11月18日、令和5年9月2日



番外 東光山 花山院 菩提寺（播州）



（本堂が二つ並ぶ境内。左：花山法皇殿、右：薬師堂）

冒頭の「はじめに」でも触れたが、この番外札所「花山院菩提寺」は、西国観音霊場中興の祖である花山院が隠棲の終の棲家として崩御までの晩年の5年間に過ごした故地である。それ故、西国観音霊場の特別な聖地（別格の番外札所）として、西国33札所の巡礼に出る前にまずはこのお寺に参詣することが古来からの慣習であったという。

今回は都合でこの札所に巡拝する前に既に播磨などの5札所ほどを巡拝していたのでこの別格番外札所には順番の後先の失礼をしたが、摂関家藤原兼家・道兼父子の陰謀により弱冠19歳で皇位を追われ上皇に退位させられた花山院の哀史をこの寺の深山幽谷の静謐な境内で偲ぶのもまた一興であった。

さて、昨日は播州西宮市在の例の悪友と同道で西国結願寺の美濃の谷汲山華嚴寺に巡拝し、彼の自宅に一宿一飯の恩義に与って彼の西国観音霊場第一目巡礼の満願の精進落としの直会を供奉したが、少々般若湯を頂き過ぎて今朝はこの寺の参道口のバス停から寺までの琴弾坂の坂道を登るのがキツくて息が切れた。標高差は200m強ほどしかないが、何しろ車もヒーヒー唸っているほどの急坂道で、たった1kmほどの距離を登るのに1時間掛った。ガイドブックでは30分と書かれているので拙者の体力が1/2にガタ落ちしている証拠であるが、徒歩の参詣者は最寄り駅（三田駅）からタクシーに乗ることを奨めると態々註書きを加えてあったから、マ、この琴弾坂のキツさがお分かり頂けるかも・・・（駅からはかなり遠いので、タクシー代金は福沢諭吉1枚近くになるだろう）

さて、この寺には、西国観音霊場を巡拝した花山院が播磨の播州清水寺に詣でた折に、東方に美しい山があるのを心に留めて終の棲家にこの山を選んだという縁起が伝わっているが、なるほどこの寺の展望台からの播磨平野の鳥瞰は素晴らしいものだった。

雲海が流れる時にはまさに西方浄土の眺めもかくやであったかと思われた（花山院が見たという“美しい山”とは、実は有馬富士であったのかも？）。

その時に院が詠んだという御製御詠歌、

「有馬富士 ふもとの霧は 海に似て 波かときけば 小野の松風」。



（琴弾坂の急坂道。写真では平坦に見えるが・・・）



（花山院菩提寺展望台からの眺望 中央奥：六甲山、右奥に小豆島、手前左：有馬富士）

この寺で弱冠 41 歳という若さで生涯を閉じた花山院の御廟所（右写真）もこの境内の樹叢の傍に祀られていたが、折からの晩夏のつくつく法師の蟬の鳴き声が一層の境内の静かさを醸し出していた。

また、境内の一角には「幸福（しあわせ）の七地蔵」が設えられていて、



祖父母、父母、子供の地藏菩薩像が差し出されているその右手に触れば肉親との仏縁が得られるのだという。小生も普段は思い出すことも少ない亡き父母や祖父母の手を握って日頃のご無沙汰と不孝行を詫びたのでありました。



(幸福の七地藏尊)

さて、「はじめに」の花山院の件でも触れたが、院がこの寺に隠棲した時、宮中で院に仕えていた女官 11 人が法皇を慕って来てこの寺までたどり着いたが、ここは女人禁制であるために寺には入れず、やむ無く尼となって麓の里に庵を結んで院を偲んだという。この麓から少し寺の山道を登った所に琴弾坂という所があり、女官たちはここまで登って来て琴を弾いて院を慰めたという。この庵を結んだ場所がこの寺の参道入口である尼寺(にんじ)という集落であり、ここで生涯を終えた 11 人の尼の墓と若くして亡くなった院寵愛の妃・弘徽殿の女御の五輪塔が祀られている「十二尼妃の墓」と称される墓所があった。

うらぶれた淋しい雰囲気のところではあったが、新しい花やしきびが手向けてあって、墓所も綺麗に掃除されていた。地元の人々の郷土愛、心意気と信仰心の表れでもあろうか。残暑厳しい時節であったが、田圃を渡って吹いてくる風がススキを揺らせ、空には鰯雲が流れていて周りには早くも秋の気配が漂っていた。



(麓の尼寺集落にある十二尼妃の墓)

尼寺からバスで JR 宝塚線三田駅に戻り、本日参拝予定の次の札所「第 24 番・中山寺」に向かった。バス道路沿いの稲田は黄金色に色付き既に稲刈りが終わった田圃もあった。

花山院がある三田市周辺は位置的には神戸のすぐ北側に位置しているが、周囲の自然景

観は播磨というよりも丹波の雰囲気が強かった。

[番外札所 東光山 花山院菩提寺]

本尊：花山法皇殿＝十一面観世音菩薩、薬師堂＝薬師瑠璃光如来

花山法皇殿本尊真言：オン マカ キャロニキャ ソワカ

御詠歌：有馬富士 ふもとの霧は 海に似て 波かときけば 小野の松風

参詣日：平成 31 年 4 月 27 日、令和 5 年 9 月 3 日

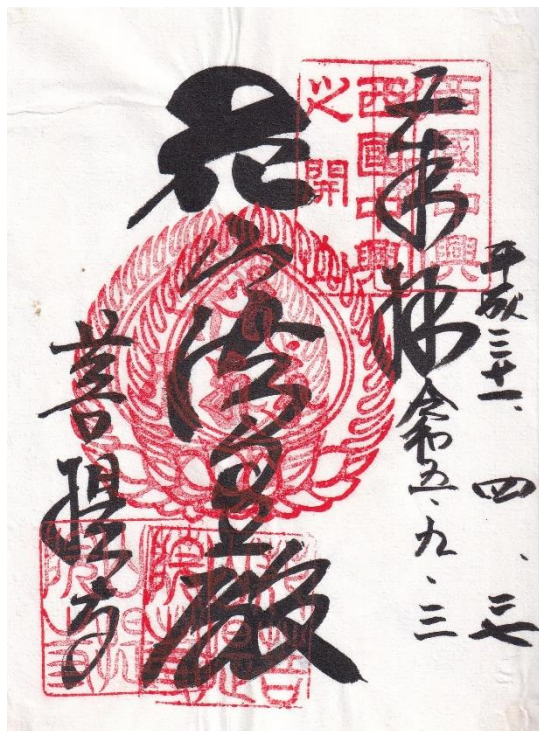
ご参考

花山院菩提寺の法話パンフ『西国巡礼の心』などに下記のようなことが記されていた。

この札所は西国観音霊場巡礼の中興の祖花山院の由緒が深い菩提寺であるから、西国巡礼の作法にはうるさい寺であり、納経所で朱印を頂く時にも必ず“有難い”説教を聞かされるのが常であって、些か煩瑣ではあるが、それはそれとして仏の道を愚蒙の衆生に説教垂れ給うことも住職の大切な務めであるから有難く拝聴した。

この法話の内容は当たり前のことであるが、つつい忘れがちな事柄であるので以下ご参考までに。

- 日本の巡礼のルーツは大自然の山々に神を感じてその山々を巡っていた古代人の民俗信仰にある。やがて仏教伝来とともにその山々に仏教寺院が建立されて、そこを巡るようになったのが巡礼である。
- 仏教が目指す究極の目的は悟りである。悟りとは文字のとおり吾が心の本質を知ることである。その方法として、まずは心の汚れを取ること。巡礼はその心の汚れを洗うための一つの方法である。
- その意味で、巡礼はご利益を求める旅ではなく、心を洗う旅である。
- 西国霊場の寶印は人間が創ったものではなく、西国霊場の開祖徳道上人が霊界の閻魔大王から頂き、この世に持ち帰ったものである。寶印にはご本尊の梵字が刻印されていて、各札所のご本尊と巡礼者を繋ぐ結縁守護の印である。参拝記念印ではない。その意味で、寶印に価値があり墨字は本来不要なものである。
- 御朱印受ける時は脱帽合掌で受けること。
- 朱印コレクション、スタンプラリーは仏縁に反することだから、当寺では授与しない。等々・・・。



番外札所 豊山 法起院（奈良桜井）



（法起院の小さな山門。右門札には総本山長谷寺開山坊、左門札には長谷寺開山徳道上人御廟所）

奈良・長谷寺の門前町の家と家に挟まれた狭い露路の突き当りに小さな山門があるが、これが番外札所「法起院」（長谷寺の開山堂）であった。長谷寺へ参拝する途次にあるのでちょっと立ち寄って参拝するのに好都合であった。寺の境内も狭いので、10分もあれば参拝できる。この小さな寺が西国観音霊場の番外札所となった縁起は以下のとおりである。

昔、法起菩薩の化身とまで言われた徳道上人という善知識が晩年に隠棲し老体を養っていたのがこの寺である。徳道上人は道明上人と共に、長谷寺の濫觴となった高僧である。

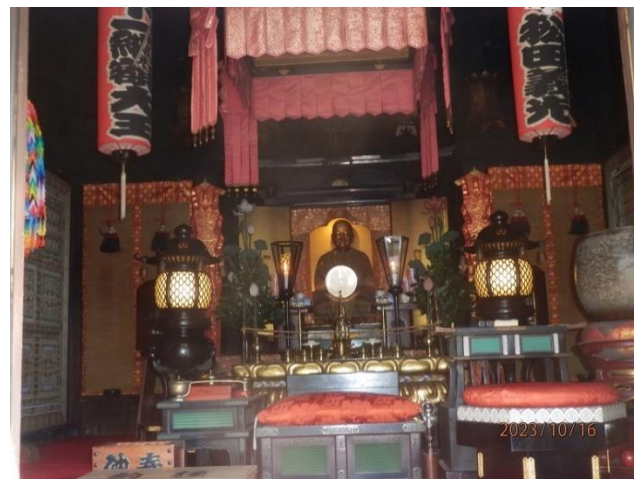
徳道上人は創作力豊かな人であったそうで、或る日弟子の僧達に“上人様は亡くなられた”と言い触らせて七日後に蘇生してみせた挙句、衆生を集めて曰く「閻魔大王から素晴らしいお告げを頂いたぞ」と言い出した。

仔細を聞いて見ると、「閻魔大王曰く、本邦には観世音菩薩の霊場が33箇所ある。これを巡拝した者は善人は勿論のこと極悪人でも極楽往生間違いなし。もし間違っても地獄へ墜とされても儂が代ってその罪を引き受けてやろう。これはその印の品だと仰ってこの33ヶの寶印をお授けになった」。

この話を聞いていた衆生は我も我もと巡礼希望を申し出て上人はこれらの衆生を引き連れて西国巡礼の旅に出たのが西国観音霊場33札所順礼の始まりとなったと伝わっている。即ち西国巡礼の祖が徳道上人であるという訳で、この寺が番外札所になった。



(小さな本堂)



(本堂内陣。奥の像が徳道上人。撮影自由)



(徳道上人像 撮影自由)



(徳道上人の御廟と伝わる法起院十三重石塔)

この寺の庚申堂には、珍しい青面金剛像という金剛が安置されているが、年に一回10月末の数日間しか開帳されないので、今回も拝観できなかった。青面金剛は、中国の道教思想に由来し、日本の民間信仰のなかで独自に発展した尊像で、病魔を退け、健康長寿のご利益があると信仰されている仏像であるが、脛に多種多様な瑕を持つ小生はその顔を拝顔すると、その恐ろしさに卒倒してしまうのがオチであろうから、拝顔できなかったのも観音様のご配慮であったのかも知れない。

余談であるが、この寺は拝観料無料であるにも関わらず、丁寧な案内パンフレットを下さって、納経所の方の応対も丁寧であった。白洲正子の『西国巡礼』にも、「・・・七堂伽藍が美しく整った長谷寺より、この寂れたお堂の方が今度の旅では印象に残った」と記している。



(法起院庚申堂に祀られている青面金剛像)
[10月下旬に年一回しか公開されないので、
今回も拝観できなかった]



(青面金剛像が安置されている庚申堂)

[番外札所 豊山 法起院]

本尊：徳道上人像

御詠歌：極楽はよそにはあらじ わがころろ おなじ蓮（はちす）のへだてやはある

参詣日：令和元年10月3日、令和5年10月16日



番外札所 華頂山 元慶寺（京都山科）



藤原氏一族の政争の犠牲となって弱冠 19 歳で退位させられた花山天皇が、藤原道兼の陰謀で連れ出されて落飾させられたのがこの寺であった。

月岡芳年描くところの「花山寺の月」を観ると、騙されて（たぶん内心では事情を承知していて）配所に牽かれる花山天皇の無念さと哀れさが滲み出ているように感じられるが、如何なものであろうか。右側のお供の如き人物は騙して連れ出した張本人の道兼であろうか。

出家して法皇となった花山院はこの寺で2年程過ごした後に観音巡礼の放浪の旅に出て、最後に辿り着いた処が二つ前の項で書いた同じく番外札所の花山院菩提寺であった。

花山院は観音を深く信仰し、全国の観音聖地を巡礼されて「西国観音霊場再興の祖」として今でもこの世界では崇敬されている人物である。

さて、この元慶寺は昔は栄えた大寺だったそうだが、今は小さな本堂と庫裏を残すだけの路地裏の寂寺になっていた。



（月岡芳年筆「花山寺の月」）



(本堂というには余りにも小さな御堂)



(花山院 御落飾道場の碑)

御堂の扉には菊花紋が掲げられていた。菊花紋が掲げられている寺院は、皇室と深い関係にある寺院だけであるが、この寺の菊花紋も花山天皇に因るものであろう。寂れた寺に菊花紋の紋章だけが輝いていたが、栄枯盛衰は世の倣い、寺の品格は伽藍や寺宝の目の前の豪華さにあるのではなく、その寺が辿って来た来歴、滲み出ている風格、参拝者が感じる仏縁や雰囲気などに因るものであろうから、菊花の紋章もこの寂寺に溶け込んでいると見るべきであろう。この寺に限らず、寺院の外見だけを見所として漁るのではなく、その寺の来し方に思いを馳せてみるのも悪くなかろう。



(本堂の扉に掲げられている菊花紋)

本堂の入り口階段には“境内の樹に生っていたカリンです。ご自由にお持ち帰り下さい”という籠に大きなカリンの実が幾つか置いてあったので有難く一つ頂戴して帰り、我がご先祖様の仏縁ともなろうかと自宅の仏前にお供えさせて頂いた。

5年前の回目の参拝の折は、西国古道をオール徒歩で巡拝することを基本としたので、この山科北花山の番外札所「元慶寺」まではその前に巡拝した大津の三井寺から小関越を越えて山道を歩いて辿り、また次の札所へは鳥辺野を越えて京都東山清水寺まで歩いたので草臥れたが、今回は老体向け安直スタイルに切り替えて山科駅から元慶寺まではタクシーを奮発（料金は僅か野口英世1枚）、次の札所（東山・清水寺）へは地下鉄・御陵駅から電車に乗ったが、元慶寺から御陵駅までの僅か30分程度の歩きにも息が切れる体たらく。マ、厚生省の指定難病「間質性肺炎」を患っている身であるから、まだ歩けるだけでも多ししなければなるまいデ。これも観世音菩薩サマのご慈悲でもあろうか。合掌。

[番外札所 花頂山 元慶寺]

本尊：薬師瑠璃光如来

御詠歌：待てといはば いとも畏し花山に しばしと啼かん 鳥の音もがな

参詣日：令和元年10月8日、令和5年11月16日



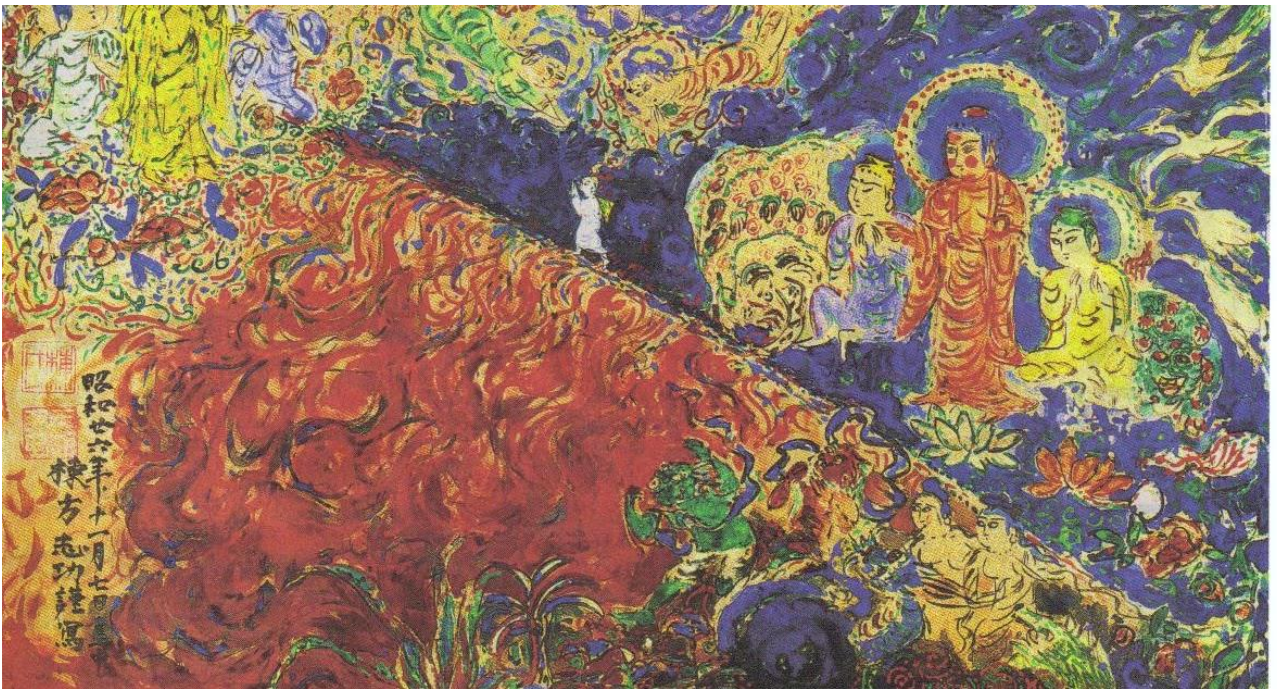
おわりに

最後まで我が駄文にお付き合い頂き、ありがとうございました。これで西国観音霊場 33 札所、及び番外 3 札所、合計 36 ケ寺の巡礼が終わり、目出度く満願となりました。

観音霊場札所巡礼や四国八十八所遍路などの巡拝は、山伏や僧職などの行者にとっては行道ですが、我々衆生にとっては信仰や苦しい修行ではなく、歩き巡っている内に自然に風が吹いて来て心の中を爽やかな風が吹き抜ければ、それが最大の功德というものでもありましょう。そこにはややこしい仏教の理屈や経典の理解などという野暮な世界は無く、行雲流水の如き心の移ろいがあるだけで充分なのではないでしょうか。

寺社を巡っている参拝者の中には、かような暢気なことを言っておられる場合ではなく、心身の苦しみのために神仏に縋りたい一心で巡礼している方々も多いことでしょう。そのような参拝者とも苦も楽もご一緒しながら同じ二河白道*を辿るのも、これまた仏縁ではないでしょうか。

皆様方の一層の一路安泰、重ねて三界萬霊六道の平安をお祈り申し上げます。合掌。



(棟方志功画伯謹寫「二河白道」)

〔註〕 二河白道*

人が此岸から彼岸に渡る際に、火の河と水の河が並んで流れている真ん中に白い細い道が一本通っている。この白い道を最後まで辿れば極楽に行けると信じられている。浄土門ではこれを「二河白道」という。火の河は人の貪欲、水の河は人の怒りを表しているが、人が渡らねばならない白い道には火と水以外にも魑魅魍魎が襲い掛かって来て渡る人を苦しめる。しかし、釈迦と阿弥陀を一心に信じて念仏一筋に勤めて渡れば煩惱に塗れた凡夫でも極楽浄土に迎えられるという。上の棟方志功画伯の画で、左下が火の河、右上が水の河、その境目を白衣姿が渡っている所が白道である。

仙說摩訶般若波羅蜜多心經
 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
 蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
 異色色即是空空即是色受想行識亦復如
 是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
 不增不減是故空中無色無受想行識無眼
 耳鼻舌身意無明亦無無明尽乃至無老死
 亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無
 所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
 罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
 想究竟涅槃三世諸仙依般若波羅蜜多故
 得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
 多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等
 呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
 多呪即說呪曰
 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩
 婆訶
 般若心經

右為 三界萬靈六道平安

大塚忠彦 謹写

令和五年 四月

(般若心經 筆者写經、各札所へ納經)

第2巡目 西国観音霊場三十三札所巡礼 巡拝日程メモ

| 段 | 期 日 | 巡拝札所 | 備 考 |
|------|---------------|--|---|
| 第1段 | 令和5年6月10日 | 圓教寺（播州） | 柴田先生百寿面会の帰途 |
| 第2段 | 令和5年7/26～27日 | 播州清水寺、一乗寺、成相寺 | 後二者は潔ちゃん同道 |
| 第3段 | 令和5年9/2～4日 | 谷汲華嚴寺、番外花山院菩提寺、播州中山寺、北摂勝尾寺、北摂総持寺 | 全山、潔ちゃん同道 |
| 第4段 | 令和5年10月5～6日 | 松尾寺、長命寺、観音正寺 | 岩橋さん四十九日忌お参り（奈良生駒）、女房実家（岡山）墓参の帰途。予定していた琵琶湖竹生島「寶巖寺」は強風で汽船欠航、参詣できず。 |
| 第5段 | 令和5年10月16～17日 | 番外法起院、長谷寺、南円堂（潔同道） | 南円堂大般若経転読会参拝 |
| 第6段 | 令和5年10月23～25日 | 六角堂、革堂、穴太寺、善峯寺、岡寺、壺阪寺 | 大学サークル同窓会（京都・嵐山）に便乗 |
| 第7段 | 令和5年11月15～16日 | 竹生島寶巖寺（15日）、番外・元慶寺、音羽山清水寺、六波羅蜜寺（16日） | 大学ゼミ同窓会（岡山・鷺羽山）の往復の途次に |
| 第8段 | 令和6年1月22～24日 | 石山寺⇒岩間寺⇒三井寺⇒京都四条大宮 B.H. 泊⇒上醍醐寺⇒今熊野観音寺、（泉湧寺）⇒宇治民宿泊⇒三室戸寺⇒（三十三間堂） | 泉湧寺、三十三間堂は西国霊場ではないが、今回の駄賃に参拝 |
| 第9段 | 令和6年2月18～19日 | 18日：葛井寺⇒施福寺⇒粉河寺門前旅館泊 19日：粉河寺⇒紀三井寺 | 17日夜、潔ちゃん宅泊。彼と同行3人。 |
| 第10段 | 令和6年3月3日 | 青岸渡寺、（別院・補陀洛山寺）（紀伊勝浦駅前温泉民宿に前泊） | 第2回西国観音霊場33札所&番外3霊場 結願。紀勢本線で名古屋から往復 |

（本項 完）